
Fate/CrossOverGuardian 第二章 『ネギま編』

蒼空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Fate/CrossOverGuardian 第二章『ネギま編』

【Nコード】

N40250

【作者名】

蒼空

【あらすじ】

【突然で申し訳ありませんがFate/CrossOverGuardian 第二章『ネギま編』の製作を一時中断させていただきます。

段々と遅くなる更新で皆さんに不快な思いを抱かせてしまい本当に申し訳ございません。

本日製作を中断させた理由として、あまりに本編のストーリーが長

過ぎる為、とても完結させる事が出来ないと判断した事と完成間近の18部を間違えて全てフォーマットしてしまい全てのネームデータが全て消去された為、一から作り直すと2、3ヶ月程掛かってしまうのでネギま編の製作は中断させる事にしました。

皆様に大変なご迷惑をお掛けして本当にすみません、今から第一章と第二章を基準とした新作である第三章を考案中です、第二章をご愛読の方々にも楽しめるような作品を頑張つて製作して見せますので、どうかこれからFate/CrossOverGuardianの応援をよろしくお願い致します！！

次回作の投稿予定日と内容はまだ未定ですが、もしネギま編より面白くありませんでしたら遠慮なく言ってください、全力で修正して良い作品に仕上げて見せます。

それまでは退屈と思われませんが、どうかその時まで少しの間お待ちください。】

新たな守護者となったエミヤシロウは赤い少女の誓いを胸に新たな世界へと旅立つ、そして辿り着いた先は魔法使いが居る世界！？世界の理が紡ぐ滅亡の危機とやらを回避する為に麻帆良学園に潜入する。

そして正義の味方が一人の少年と邂逅した時、運命と共に新たな物語が動き出す！！

《注意1、この小説は第一章『サスケ外伝編』の続編です。此処から読んでも解からないので第一章から読むのをオススメします。もし第一章がつまらない、長過ぎると言う方は簡単な概要を下に説明しておきます。注意2、この作品はテンプレとアンチ要素を多量に含んでおります、許容できる方のみ御覧頂きますようお願いいたします。皆さんにお手数をお掛けしますが今後共よろしく願います》

くプロローグく 始まりの運命（前書き）

お待ち致しました！

二章が思いの他早く出来たので早速載せました。

これも皆さんのお陰です、これからも頑張っ
て書いて行きますので
応援してください！！

くプロローグく 始まりの運命

「ありがとう。大丈夫だ凜。必ず戻ってくるよ」

笑顔を浮かべた彼女の顔がかすんでいく。

（最後まで君らしいな、ならばそれに答えてみせるとしよう）

・・・そして私の視界は闇に閉ざされ、上下左右の感覚もあいまいな浮遊感に襲われた。

しばらくその状態が続く。

だが、唐突に全身に落下感を感じ目を開けた。

最初に飛び込んだのは果てしなく広がる蒼空と太陽の輝き、そして極めつけは重力に引かれ地上の木々に向かって落下していく自分の体。

「・・・やれやれ、私は召喚されると上空から落下する運命なのか？」

上空数百メートルに位置する所から落下しながら呟いていた。

凜に召喚された時もいきなり数百メートルに及ぶフリーフォールを食らわせられた。

自分とはことん空に好かれているらしい。

「さすがに二度も地上に激突する訳にはいかんな」

とりあえず落ちながら考える事は、視界いっぱい広がる森にどうやって着地するかと考えていると。

- ガキン -

- キン -

目の森から激しい戦闘音が聞こえて来る。

森の中でもやや開けている場所に一人の少女の姿が見える、そして四十を超える異形の群れが少女を取り囲む様に迫っていた。

どうやら相変わらず騒動に巻き込まれる身であるようだ、まあ守護者になったからには戦いの運命からは逃れられんだろう。

しかし女の子を見捨てる訳にもいかな、なぜならこの身は”正義の味方”なのだから。

落下しながら眼鏡を外し写輪眼を発動させ、少女の背後に襲い掛かろうとする一匹の人外に狙いを定めた。

腰に帯びた草薙の剣を抜き魔力を流す、すると手にした草薙の剣は碧色に輝き大気を震わせた。

かつてアヴェンジャーことうちはサスケが残してくれた究極の切断力を誇る宝具『アマノムラクモノツルギ天叢雲剣』。

それを落下した勢いのまま人外の顔に突刺し、人外は煙となって消えていった。

「さて、そこまでにしてもらおうか。事情は知らないが女の子一人に寄って集って手を上げるのは感心せんのでな。その子の加勢をさせて貰う」

急に降って来て地面を陥没させた自分に対し、自分の背丈ほど有る刀 多分野太刀だろう。それを脇に構えていた女の子ははんば呆然とし、その周りを取り囲んでいた人外達も此方を見ながら動きを止めている。

自分達の仲間が一人やられたのだ、当然だろう。
殺気を剥き出しにして人外は吼える。

「なんや、われは？」

「そうだな・・・通りすがりの旅人と言ったところだ」

我ながら的を得た表現だと思う。

そんな態度に腹を立てたのか人外たちは少女を無視して一斉に飛び掛つて来た。

【Side 刹那】

少女・・・桜咲刹那は目の前の状況に啞然としていた。

鬼たちに囲まれてどう状況を打開するかを考えていて背後から襲い掛かつてくる鬼に反応が遅る。

「っ！？しまっ」

自分の胴廻りよりも太い豪腕が私に迫まり死を覚悟した瞬間。

上空から黒い影が落下し鬼を頭から刺し貫き鬼を跡形もなく還していた。

そしてなにより驚いたのがその影が勢い余って地面を陥没させた事だ、普通なら足の骨が折れている筈だがその影は何事も無かったかの用にケロリと立ち上がっている。

そこでその影の正体が漆黒の外套を着た男性だと気付いた。

年齢は二十代後半、身長は180後半といったところか、白く色褪

せた白髪と鋭い眼光、錆びた鉄の様な赤銅色の肌に黒を基調とした外套を纏っている。

「さて、そこまでにしてもらおうか。事情は知らないが女の子一人に寄って集って手を上げるのは感心せんのでな。その子の加勢をさせて貰う」

よく通る声で宣言した。

その言葉に一瞬ドキツとする。女の子とは私の事を差しているのだろう。

しばし女の子と言う言葉を噛み締めていると鬼が、

「なんや、われは？」

突然の乱入者に鬼たちが吼える。

その疑問には私も同意見だが、しかし返ってきた答えは。

「そうだな・・・通りすがりの旅人と言ったところだ」

まともに取り合う気がないのか曖昧な答えが返ってくる。

その態度に腹を立てた鬼たちが私を無視して外套の男に一斉に襲い掛かる。

（不味いあれだけの数の鬼に襲われてはひとたまりもない）

声を掛けようとするが既に何もかもが遅かった。

だが次の瞬間、その男の人は手にした碧色の刀を独楽の様に一閃する。

それだけで鬼の約半数が真っ二つに切り裂かれる、一人の鬼が鉄の棍棒を振り降ろすがそれを何の抵抗もなく切り裂きまた一人鬼を還

した。

「な ! ! ! !」

その切れ味に恐怖した、鉄の棍棒を難なく切断したのだ、刀で鋸迫り合いしようなら間違いなく刀ごと切り裂かれるだろう。

鬼たちも警戒したのか一斉に襲い掛かるのをやめ、一体一体ずつ時間差で攻撃する戦法に変えて来た。

一人に気を取られて隙が出来た所を狙うつもりなのだろう、確かに戦略としては悪くない。

だが目の前の男は私の想像を遥かに超える実力の持ち主だった。右から襲って来た鬼は上段から棍棒を振り下ろすが、男は半身を後ろにずらして避け、刀で首を飛ばす、次に左から襲って来た鬼は左から右へ横なぎに棍棒を振ったので、振るった右手の刀をそのまま勢いを殺さず左へ突き出し棍棒ごと鬼を切り裂き、真正面から襲ってきた鬼の攻撃をまるでその軌道が判るかのように躲し振り向き様に刀を一閃させ鬼を両断する。

・・・その剣舞にいつしか魅入っていた。

剣舞を見れば、その人の実力を推し量ることは出来る。

彼の技量は、あきらかに私など及ぶべくも無い。

あの剣舞は才能と何度も何度も積み重ねてきた鍛錬が一体となって初めて体现できる。

武を目指す者にとってあの動きは完成された一つの答えだ。

どれほど見惚れていたのか。

魅入っていたその剣舞も、ついに終幕を迎えた。

最後の一匹を危な気なく還し、眼鏡を掛け私に振り向く男性。

「怪我は無いか？」

と気遣いながら私の元に歩いてくる。

事態の目まぐるしい展開で自分の思考はショート寸前だが、それでも自分の使命を思い出し、夕風を突き出しその歩みを止める。

「それ以上近付かないで下さい。助力された事には感謝します、しかし貴方が何者で何の為に此处に来たのか分らない以上信用出来ません」

夕風を握る手が汗に塗れるのが分る。

当たり前だ。先の戦いを見て解るように、今の私ではこの人に勝てない。

そこで、冷静になった頭に一つ疑問が浮んだ。

「・・・一つ質問します。貴方は何者ですか？」

男性は心底困った様な顔を浮かべて。

「・・・正直な所を言うと迷子だ」

「・・・本当の事は言えない。という事ですか・・・」

明らかな不審者発言、なのだがスパイ等なら私を助けた利点を使い、取り入ったりすると思うのだが。

じーっと頭の中から足の爪先まで観察しても不審者だ。

「いや、本当に判らないんだ。そこで君に聞きたいのだが・・・」

「なんでしょうか？」

彼の一拳一動に注意を払いながら続きを聞く。

「ここが何処なのか教えて欲しい」

「？　ここは麻帆良学園都市の端にある森です。とりあえず貴方を学園長のところへ連れて行きます、よろしいですね」

男性は何か考える素振りを見せるがすぐに。

「ああ、それで構わない。迷惑を掛ける」

その困ったような顔を見て、私はひとまず警戒を解いた。
嘘をついているようには見えない。

それに　この人は信用できる。
何故かそう感じた。

「では私についてきて下さい。それと、くれぐれも私から離れないように。貴方は此処では部外者ですから」

そういつて先に歩き出そうとすると、男性は手を差し出し。

「そういえば自己紹介をしていなかったな、私の名はエミヤシロウと言う。よろしく」

「あ、はい。桜咲刹那です」

握手のために差し出した手を握り返す。

そしてエミヤシロウさんと名乗った人は笑顔で、

「それでは刹那と。・・・ああ、この響きは実に君に似合っている」

いきなりとんでもない事を言った。

「な、え？ と、兎に角。私についてきて下さい!？」

ドキマギしながら、私とシロウさんは歩きだした。

麻帆良学園へと向かって。

くプロローグく 始まりの運命（後書き）

所々で見覚えのあるセリフが混ざっていますがどうかご愛嬌という事で許してください、そして今後も同じ事が多々あると思われませんが皆様の寛大なお心でこれからも見守ってくれたら嬉しいですよ、もしよかったですら今後もご愛読をお願いします！！

麻帆良学園へ

だいぶ日が傾き、蒼く澄んでいた空も、今ではもうその殆どを夕日の赤が照らしていた。
いたる所から喧騒が聞こえて来るところからやはり都市といった所か。

「シロウさん、そろそろ学園です」

前を歩く刹那が声をかけていた。
顔を上げると目の前には大きな橋があり、その先には大きな西洋風の建物が見える。

「・・・大きな学園だな」

その広さに圧倒され、学園を見ながら呟く。
そしてこれが日本とは、異世界や平行世界と判っていても自分の知る世界と似ているだけに実感する、此処は自分の知る世界じゃない事を。

「そうですね。麻帆良学園には初等部から大学まであり、日本でも有数の大きさだと聞いています。私も初めてココに足を踏み入れた時は圧倒されました」

「そうか・・・ところであの樹は何なんだ？」

相槌を打ちつつ橋を渡ると、学園の中央に三百メートルを超える馬鹿でかい樹が聳え立っているのが見える。
その大きさに苦笑いしか込み上げてこない。

「アレは麻帆良学園都市が誇る世界樹と呼ばれる樹であの下で告白をすると必ず成功するという伝説もある世界でも類をみない霊樹なんです」

「必ずって、それはもう呪いじゃないのか・・・」

はははと二人して苦笑いを浮かべで歩く。

何だか不思議な雰囲気になってしまったので話題を変える。

「これから会うこの学園の理事長はどんな人物なんだ」

「は、はい。性格には少し難ありと言った感じですが、人格者として割と皆さんから信頼されてます。先ほど連絡をした所、女子校の学園長室に居るとの事ですので、其方に向います」

「判った、案内を頼めるかな刹那」

「あ、はい。ついてきてください」

先を歩き出す刹那に、黙ってついていく。

学園の校舎の中に入ってからしばらく歩くと、ある扉の前で刹那が立ち止まる。

「ここが学園長室です」

刹那の言つとおり、その扉の横には学園長室、という文字が書かれた札が掛かっていた。

「わざわざすまなかったな」

「いえ、気になさらないでください」

「いや、そういう訳にはいかない。身元不明で怪しい私をここまで連れてきてくれたのだ。だから、礼を言わせてくれ」

そういうと、刹那は表情を赤らめ。

「わかりました。受け取っておきます」

小さく呟いていた。

刹那は目の前の扉をノックして入っていく。

私もその後続く。

部屋の中に入ると、そこには椅子に座った仙人のような老人と三代半の男が立っていた。

「フォッ、フォッ、フォッ、ようこそ麻帆良学園都市へ。わしの名は近衛近右衛門、この学園の学園長じゃ。まずは刹那君の危機を救って頂いた礼を言わせてもらおうかのう」

そう言つて頭を下げる老人。

その頭の形状は本当に人間かと疑うほど変形している、一瞬妖怪の類かと思つたが一応人間らしい。

「刹那君も春休み中に御苦労じゃつたな」

「いえ」

老人の労いに桜咲は小さくお辞儀をして一步後ろへ下がる。
すると老人の後ろにいた男が前に出て手を差し出す。

「僕は刹那君の元担任の高畑・Ｔ・タカミチだ。僕からお礼を言わせてもらつよ。ありがとうエミヤ君」

「なにたいしたことは無い、人を助けることは当たり前だ。それから私の事はエミヤと呼び捨てて構わない」

「じゃあ僕もタカミチでいいよ」

固い握手を交わし再び老人の後ろに控えるタカミチ。

「フオ、フオ、フオ、それじゃあさつさと本題に入るとするかの」

「ふむ、わかつた」

「ではおぬしはなぜここに侵入したのかのう」

さて、ここからが勝負所だな。

まだこの世界について何も解かっていないのが現状だ、こちらの事

情を伏せたまま相手の情報を得るにはこの方法しかあるまい。

「実はその件なんだが、自分でも分からないのだ」

「なんじゃと？」

「どうも記憶が混乱しているらしい、自分の名前や素性は判るのだが、それ以上の記憶となると霧が掛かるように曖昧になってな」

これは前回凜に召喚された時、正体を隠す為に用いた記憶喪失のフリだ。

全員から訝しげな視線を感じるが、ここはそれで誤魔化すしかないだろう。

「気が付くと上空から森に向かって落下していた、その下で刹那が囲まれている所を見つけて助けに入ったと言う訳だ」

「・・・エミヤ君、組織の長として君が言う事全てを鵜呑みにする事は出来ん」

まあ当然の反応だろう。

自分ならこんな、素性も明かさないそれも記憶が無いなどと言う怪しい不審者を信用しろと言う方が無理だ。

やはり別の方法で行くか考えていると。

「じゃが、刹那君を助けてくれたのも事実じゃ。そこでどうじゃろうか、君の記憶が戻るまでこの学園で働いてみる気はないかのぉ」

「「は？」」

私と刹那の声がハモる。

その中で一人で悠然と笑う学園長に私は訊ねる。

「近衛老、自分で言うのもなんだが、こんな得体の知れない相手を雇うのはどうかと思うぞ」

「フオ、フオ、フオ、かまわんよ。エミヤ君は信用できそうだし、これでも人を見る目はあるつもりじゃ。それに行く宛ても戸籍もなく、頼れる縁者もおらんようじゃし、困っている者に手を差し伸べるのはマギステル・マギとして当然じゃ」

「・・・その厚意に感謝します」

仰々しく頭を下げる。

非常に有り難い申し出だが。

実際は下手に拘束するよりは手元で監視しておくほうが無難・・・という訳か。

しかしマギステル・マギとは何の事だ？

「ところで、先にも述べたが・・・知らぬ間に此处に居た上に、記憶も曖昧でな。マギステル・マギとは一体何なのだ」

「マギステル・マギとは立派な魔法使い、という意味じゃよ。世界にはマギステル・マギを目指す魔法使いが大勢いるのじゃ」

「魔法・・・使い・・・」

この世界はどうやら魔術師の代わりに魔法使いがいる世界のようなのだ。私の居た世界との差異に驚きつつも学園長の話を聞く。

「さて、エミヤ君には学園広域指導員兼3 - Aの副担任をやつてもらいたいのじゃが」

「「は？」」

再びフリーズする私と刹那。

指導員とは警備員の事だろう、それはまだ判るが副担任？

「・・・私は教員免許なぞ持っていないし、教えるだけの素養を持っているか分からないのだぞ、そんな男を副担任にする？悪いが正気かね」

多少失礼な物言いにタカミチが顔を曇らせるが近衛老は笑いながら。

「フオ、フオ、フオ、大丈夫じゃ。エミヤ君には担任であるネギ・スプリングフィールド君の補佐をしてもらっただけじゃ、授業はネギ君に任せてくれればいい」

「それならば副担任など必要ないだろう」

「そのネギ君なんじゃが、実はまだ数えて十歳なんじゃよ」

「・・・何？」

十歳だと、この世界の労働基準法はどうなっているんだ？
私の疑問を察したのか。

「もちろん大学卒業クラスの語学力は持つておつて、授業にはなんの不安もないんじゃないの。いくら授業が出来ても10歳の先生では色々と不安じゃろう？先生にとつても生徒にとつても」

「・・・なるほどその為の補佐か、了解した。副担任の仕事を引き受けるでしょう」

この世界での使命はまだ分からないが、生活するにも仕事は必要だ。それに魔法使いと一緒に行動した方が世界の危機とやらに遭遇する可能性が高いだろう。

今は成り行きに身を任せるでしょう。

「そうかそうか、こっちとしてもありがたいのう。では、よろしくのう、エミヤ君」

「ああ、よろしく頼むよ学園長」

私が頭を下げて学園長と言つと、学園長はフオ、フオ、フオ、と笑いだす。

・
こうして鍊鉄の英雄の物語はゆっくりと動き始めたのだつた・・・

少女との出会い

「それではエミヤ君。次は学園広域指導員の仕事を説明しようかの」
学園長は説明を始めた。

この学園には貴重なモノが多く、それを狙って異形の者や魔法使いが侵入することがあるそうだ。

それを他の魔法教員と共に撃退する仕事らしい。

「一応僕も広域指導員をやっている。分からない事があつたら何でも聞いてくれ」

「助かるよタカミチ」

タカミチの實力は握手した瞬間から感じていた。
少なくとも信用に足る人物だと思う。

「さて、次はエミヤ君の仮住まいなんじゃが、今日は学園の宿直室に泊まるとよいじゃろう。明日にはちゃんとした部屋を用意しておくからの」

「何から何まですまない学園長」

正直ここまで世話になるとは夢にも思わなかったな。

学園長は裏がありそうだが刹那やタカミチは善意で気に掛けてくれている。

凜もそうだがつくづく私は恵まれているな。

「では、詳しい仕事の内容は明日の朝に説明するので今日はゆっくり

り休むといいじゃろう。

刹那君」

「え・・・は、はい!？」

呼ばれるとは思わなかったのか刹那は慌てて返事をした。

「すまんのじゃが、エミヤ君を宿直室に案内してやってくれんか」

「わかりました。ではエミヤさん、案内しますからついてきて下さい」

先程と同じ様に刹那が歩き出す。

私は学園長とタカミチに頭を下げて部屋を後にした。

学園長室から離れ刹那の後を追う。

静かに響く薄暗い廊下から窓の外を見ると、完全な闇夜になっていた。

しばらく歩いていると宿直室と書かれたドアの前で刹那が止まる。

「こちらが教員用の宿直室です。では、私はこれで」

ペコリとお辞儀をして刹那は帰り始める。

私はその背中に向かって。

「今日は色々迷惑を掛けてすまなかった、今度料理でもご馳走するよ、おやすみ刹那」

刹那は振り返りながらも一度頭を下げ、視界から消えて行った。

【Side 刹那】

シロウさんと別れた私は家のベットで横になっていた。
ベットの上で、刹那は今日一日の出来事を思い出していた。

突然、空から降ってきたエミヤシロウさん。

私を上回る実力を持ちながら、どこか抜けている感じがする人。
副担任になると聞かされた時、不思議と悪い気分にはならなかった。
普段の自分ならお嬢様に危険が及ぶかもしれない者には警戒するの
に、何故かそんな気持ちにはならなかった。

「エミヤシロウさんか・・・本当に、おかしな人だ」

そう言っただけで目を閉じる。

すぐに眠気が襲い意識が落ちる。

しかしその口元は、微かに微笑を浮かべていた。

「・・・・・・学園長、これは一体どうということだ」

「どうということにも、そこに書かれているとおりじゃが？」

朝一番に学園長室に来た私は副担任や広域指導員になるにあたつての書類に目を通す。

そして最後の一枚になったところで、それまで静観していた学園長が何かたくらむような声色で口を挟む。

「その紙に書かれていた場所がこれから衛宮君の住むところじゃ。確認してくれるかの」

言われたとおり最後の一枚を確認し、私は固まった。

その反応が予想通りなのだろう、学園長はフオ、フオ、フオ、と満足そうに声を上げて笑う。

「もう一度確認するぞ、本気か？」

「もちろんじゃ、何か不都合でもあるのかのう？」

軽い眩暈を覚えつつ、改めて問題の箇所をマジマジと見る。

そこには、こう記されていた。

『麻帆良学園中等部女子寮』

と。

「当たり前だ！何故男の私が女子寮の管理人をしなければならんだー！」

「最近なにかと物騒で、寮にも管理人が必要じゃと思っておったんじゃが、そこに丁度エミヤ君が来たというわけじゃ。エミヤ君は腕もたつし副担任なら生徒を守るのは当然じゃろう」

「そういう問題ではなく」

「

「まあまあ、最後まで話を聞きなさい。ここからが本題じゃ」

そう言つて学園長は説明を始めた。

なんでもこの学園には孫の近衛木乃香が通っており、魔法使いではないがその内にはかなりの魔力を秘めている。

そして木乃香の実家には関西呪術協会という組織がありその中に、学園長が理事を勤める関東魔法協会の西洋魔法使いを心良く思っていない一派が木乃香を狙う可能性があるとの事だ。だから、護衛を兼ねて私に管理人を頼みたいらしい。

「このかの父はなるべく魔法の事は知らずに普通に過ごして欲しいと思つておる。一応このかには刹那君を護衛に付けているができれば彼女にも危険な目にあつて欲しくはないんじやよ」

学園長の気持ちも分かる。

いくら才能があつてもまだ年端もいかない女の子を危険に晒すのは心中穏やかではないのだろう。

その気持ちはよく分かる、自分がまだ衛宮士郎だった頃、戦いで誰かが傷つく度にやるせない気持ちになつた、それはエミヤシロウとなつた今でも変わらない。

私は危険が迫る人々を守る為に守護者に、いや正義の味方になつた。ならば私がやれる事はできるだけ多くの危険を払ふ事だ。

「……分かつた、護衛も寮の管理人も引き受けよう」

「そうか、感謝するぞエミヤ君」

学園長はすまなそうな顔で感謝の言葉を述べた。

「気にしないでくれ、孫の木乃香や刹那を想う貴方の気持ちは本物のようだからな」

「うむ、すまんのう。細かい事はこれを読んでおけば大丈夫じゃろう」

と数枚の用紙と共に部屋の鍵を手渡す。

「では次に学園の仕事について説明しようかのう」

仕事という言葉と共にまじめな表情に戻った学園長。
副担任と広域指導員の事だろう。

「まず、副担任としてじゃが。明日から新学期が始まるのでな担任のネギ君の補佐をお願いする、授業に関してはもちろんじゃがネギ君も魔法使いで、もし魔法に関する事件が起きた時はそれとなく助けてやってくれんか」

やはりな、十歳の先生など何かあるとは思っていたが魔法使いとはそれにしても子供ですら魔法使いか、この世界はよほど魔法が普及しているのだろう。

「次に広域指導員としての仕事じゃが。最近満月になると寮の桜通りで吸血鬼が出没すると言う噂があつてな、夜間の見回りをして欲しいのじゃ」

「吸血鬼だと？」

私の世界にも吸血鬼はいた、それ自体は珍しくない。真祖となれば

話は別だが、さすがにそれはないだろう。
もし真祖がいたならこの学園は死徒だらけになっている筈だ。
噂程度なら気にする必要はないな。

「一つ確認するがもし吸血鬼を発見したら捕らえるのか、それとも排除するのか」

「・・・出来れば捕まえて欲しいのう」

「了解した、善処しよう」

「では最後に、くれぐれも一般の生徒に魔法のことをばれんようにのう、もしばれたら・・・」

話を区切り、湯飲みに口をつける。
そして湯飲みを置いて、一言。

「オコジヨにされてしまうからの」

「・・・・・・・・」

学園長が冗談を言っているようにも見えない。
魔術を秘匿する為に目撃者は殺すのが私の世界の常だが。なるほど、
この世界では魔法を知られた者はオコジヨにされるらしい。
ある意味平和的かもしれないが同時に死ぬより辛い人生が待っている。

「どうしたのじゃ？」

「い、いえ。なんでもありません、十分気をつけます」

思わず敬語で返してしまう。

自分がオコジヨにされる姿を想像する……もしもの時は逃げ出すしかないかもしれん。

「では明日はまずこの部屋に来てくれんか。ネギ君を紹介せんといかんからのう」

「分かりました」

「わざわざすまんかったの。今日はこれまでじゃ」

「はい、失礼しました」

ボタン、とドアを閉めて私は学園長室を後にした。

春休みだからだろう学園の中は静かだった。

明日から教師としてこの学園に赴任するが私に勤まるのだろうか物思いに浸っていると、すぐ傍の教室から何かが倒れる音が聞こえた。何事かと思いドアを開ける。

するとそこには、和服の少女が倒れこみその下着を見ている子供の姿があった。

「……………失礼した」

ドアを閉め踵を返す。

最近の若者は進んでいるのだな、と達観しながら教室から離れる。

するとドアを開いて先程の子供が慌てて追いかけて来た。

「あ、あのどこのどなたか存じませんが誤解なんです」

肩で息をしながら必死に先程の事を弁解している少年。
そこで気が付いた、この少年から魔力を感じるのを。
外見や魔力を見るとこの子がネギ君なのだろう。

「なるほど、君がネギ君だね」

「え、なんで僕の名前を知っているんですか？」

「なんだ、学園長から聞いていないのか」

「？」

本当に何も知らないのか不思議そうな顔をしている。
私が説明しようとした時。

「ネギ王子 !!!」

廊下の奥から沢山の女生徒がネギ君目指して押し寄せてきた。
それを見たネギ君は困った顔であたふたしている。

「・・・どうやら立て込んでいるようだ。今日はお暇するでしょう」
そう言つて窓から飛び降りる。

降りる途中でここは二階ですよー、とネギ君が慌てた声を上げたが
すぐに先程の女生徒の群れにもみくちゃにされ姿が見えなくなった。

辺りが赤く染まる中、私はある建物を見上げていた。
言うまでもなく、目の前にあるのは、これからの住居となる麻帆良
学園中等部女子寮である。

「ここか………」

展望台でこの地形を確認した私は寮の前で立ち尽くしていた。
いくら寮の管理人ということになっても中に入る決心がつかず、
刹那が通らないものかと待っていたのだ。
しかしそううまくいくはずもなく、かといって立ち尽くしては
変質者と間違われるかもしれない。

「……行くしかないか」

気後れしそうになる自分に気合を入れ、寮の玄関をくぐった。

五分後。

寮の案内図に視線を落とし、私は自身の部屋がある階を歩いていた。
このあたりにあるはずの自分の部屋を手元の案内図と見比べつつ探
していると、曲がり角に差し掛かったあたりで、

「きゃっ!?!」

ドンッ、という衝撃と共に上がる女の子の声。

慌てて声のしたほうに目をやるとそこには床に腰をついている黒髪の女の子と、その隣にはツインテールの少女が立っていた。

「すまない、大丈夫か？」

手を差し出し女の子を起こそうとするがその前に黒髪の女の子はツインテールの少女に起こされる。

「このか、大丈夫！？」

「うん、なんともないよ」

「ちょっと、どこみて歩いてるの……って、どうしてここに男がいるの！？」

木乃香？この子が学園長の孫か。

木乃香と呼ばれた子を起こすとツインテールの少女はこっちを見てぶつかった相手が男だと気付くとずんずんと詰め寄ってくる。

「ここは女子寮よ、早く出て行かないと警察を呼ぶわよ！」

すかさず携帯電話を取り出す。

その剣幕に凜と通ずるものを感じた私は慌てて。

「先程は申し訳なかった。こちらにも事情があつてな」

「なによ言ってみなさい！」

コホン、と咳払いをして。

「今日からこの寮の管理人になったエミヤシロウだ。よろしく」

言って、頭を下げる。

そして先程までの剣幕を忘れ去ったかのように目を丸くする少女。

「・・・・・・・・・・」

一瞬の静寂の後。

「え、ええ ！？」

目を見開き、盛大に叫ぶ少女。

「アスナー、あんまり大きな声出すと周りに迷惑やえ」

「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！なんで男が女子寮の管理人なんてするのよ！」

その疑問は最もだ。

だが護衛の事を言う訳にもいかないので当たり障りのない言葉で濁すか。

「いや、私も学園長に頼まれてな、寮の管理人を引き受けなければ野宿する羽目になるんだ」

「もー、しょうがないなーおじいちゃんも」

「君は学園長のお孫の木乃香さんだね。先程はぶつかってすまかった怪我はないかね」

「このかでええよ、ウチも余所見しとったからなお互い様や」

ほわほわ　とこちらまで暖かくなるような笑みを浮かべて少女は言った。

「では改めて、エミヤシロウだ。よろしくこのか」

「うん、よろしくなーシロウさん」

「私もシロウと呼び捨てもらって構わないよ」

刹那の時と同じで手を差し出し握手する。

このかとのファーストコンタクトはこうして無事終えたのだった。

副担任エミヤシロウ

その日の夜、このか達に案内され管理人室に辿り着いた私はまず部屋の掃除をする事にした。

どうやらしばらく使っていなかったのか部屋は埃だらけだったのだ。主夫スキルを発揮して部屋を片付け軽い夜食を食べた後、私は寮の屋根から夜間の見回りをしていた。

周囲を強化した目で見張っていると視界の端で黒い影が動いた。

「ん、アレは・・・」

凝視すると黒のマントと帽子を被った小さな少女が移動している。視線の先にはお風呂上りに外を歩いている女の子の姿があった、一瞬子供が脅かす為にあんな格好をしているのかと思ったが、長年の直感が違つと警鐘を鳴らす。

噂の吸血鬼が出るのも満月だと学園長も言っていた、ならあの少女が吸血鬼なのか！？

「トレース・オン
投影開始」

瞬時に魔術回路を起動させ、創り出したのは黒弓と矢。

矢を引き絞り素早く少女の目前へと放つ。

ヒュン、と矢は寸分違わず少女の目前に樹に突き刺さる。

それを見た少女は明らかに驚き周囲を警戒している。

その姿を見て警戒よりも暖かな笑みが浮かぶ。

「ふむ、随分可愛い吸血鬼だな、しかし人を襲うのであれば容赦はしないぞ」

誰に言うのでもなくただ呟いていた。

そして少女は分が悪いと判断したのか素早く姿を消す、どうやら撤退していったようだ。

私は内心ホッとしていた。

「・・・仕事とはいえ子供を手には掛けるのは気が進まんからな」

しばらく見張りを続けたが何事もなくそのまま朝を迎えていた。

見張りを終えた私は朝食を作り予め投影しておいたスーツを着て寮を出た。

時刻は七時。

通路には学生の姿がちらほら見える、流石に屋根の上を跳んだり全力疾走しては人間ではないと気付かれる為歩いて学園に向かっていく。

歩いている間私の姿が珍しいのか女学生がヒソヒソと噂話をしている。

（やはり女子校に向かう男がいれば怪しいと思われる。当然だな。今度からはもっと早く出るとしよう）

と、一人心に決めていた。

しかし彼は知らなかった、その噂話の大半は大人びた外見に心惹かれた黄色い声だと言う事を。

後に彼は麻帆良学園カッコイイ教師のランキング一位に輝くのだがそれはまた別の話。

学園長室に入った私は昨日の報告をしていた。

「そうか、ご苦労じゃったのうエミヤ君」

「いや、吸血鬼らしき少女は取り逃がしてしまった申し訳ない」

少女の顔は覚えているので実際はワザと見逃したのだが・・・

「いやいや、エミヤ君のお陰で大事には至らんかったのじゃ、礼を言うぞ」

「私もそう言ってくれと助かる」

「それではエミヤ君には引き続き見張りをお願いしようかのう」

しばらく警備や見回りの事を話し込んでいると。
コンコン、とドアがノックされる。

「どうやら来たようじゃの。入ってくれ」

学園長に促され、失礼します、という声とともに扉が開き。

「学園長、急な用とはなんでしょうか？」

昨日出会った少年がおどしながら入ってきた。

「やあ、ネギ君」

「あつ！貴方は昨日窓から飛び降りていった人！」

私の顔を見たネギ君は驚きの声を上げる。

「フオ、フオ、フオ、ネギ君彼は今日からネギ君のクラスの副担任をしてくれるエミヤシロウ先生じゃ、ちなみに彼もこちら側の人間じゃ。教師としてだけではなく、そっちの方でも困ったことがあったら相談するとええぞい」

「え、そうなんですか!？」

学園長が私の説明を終え未だ驚いている彼に私は笑顔で自己紹介した。

「改めて始めまして、今日からA組の副担任をすることになったエミヤシロウだ、よろしく頼む」

「あ、はい。僕はネギ・スプリングフィールドっていいいます。よろしく願いしますシロウさん」

手を差し出し握手する二人を見て学園長が元々細い目をさらに細めて微笑んでいた。

「では話はこれで終わりじゃ。さっそく授業じゃが頑張るんじゃぞ」

二人してはい、と答えて部屋を出る。

「それじゃあ教室に行こうか、ネギ君」

「はい!」

そう言ってネギ君と共に3 - Aの教室へ歩き出した。

教室の前で私とネギ君は立ち止まる。

「シロウさんは少しここで待ってもらえませんか、僕が合図をした
ら教室に入ってください」

「分かった、ネギ君もしつかりな」

ネギ君はありがとうございます、と返事をして中に入って行き。
すぐに教室から歓声が湧く。

その光景を窓から見つめていると教室内で刹那の顔を見つけ次いで
寮で会ったこのかと明日菜の姿を見つけた。

まあ、護衛の事もあるしある程度は予測していた。

このかと明日菜の二人は気付いていなようだが刹那は私に気付いた
ようだ、小さく頭を下げると再び前を向く。

「えーと、まず皆さんに報告があります。今日から新しくこの3
Aに副担任の先生が来ることになりました」

再び歓声が上がります。

「それではシロウさん入ってきてください」

ネギ君の合図がかかり私は気合を入れて教室に入っていた。
教卓に向かう途中で私の姿を見て驚いているのかと明日菜の顔が見えた。

そして黒板に名前を書き笑顔で生徒達の方を向き。

「今日からこのクラスの副担任をすることになった衛宮士郎だ。私は基本ネギ君の補佐なので授業をすることは無いと思うが、何かあれば遠慮なく頼ってくれ、よろしく」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

沈黙がクラスを支配する。
しかしそれも一瞬のことで、

「「「か、かつこいい

！」「」

次の瞬間には教室中のあちこちから声が上がった。

「何処から来たんですか？」

「何歳なんですか？」

「身長高いですけど何センチあるんですか？」

「彼女はいますか？」

「・・・・・・・・・・えーと、だな」

あまりの元気に圧倒される。
怒涛の質問攻めに私が困り果てていると。

「いいかげんになさい!!」

金髪の少女が机を叩くと教室が静まり返った。
助かった、と思っていたのも束の間。

「先生が困ってらっしゃるでしょう、質問は順番になさい」

結果として質問地獄に入ることとは変わらなかった・・・

最後の質問が終わると、若い女性教諭が教室のドアをノックしながら入ってきた。

「ネギ先生、今日は身体測定ですよーAのみなさんもすぐ準備してくださいね・・・あら、あなたがエミヤシロウ先生？」

私の名前を知っていると言う事は恐らく学園長が職員に通達したのだろう。

「始めまして、今日からこのクラスの副担任になったエミヤシロウだ。よろしく」

「ええ、学園長から聞いています。私は中等部の女性教員で源しずなと申します。こちらこそよろしく願いますね」

笑顔で頭を下げるしずな先生。

私は身体測定の邪魔にならないよう廊下に出るがネギ君は張り切り

すぎて教卓で服を脱いでくださいと宣言してしまっていた。
慌てて自分の発言に気付いたネギ君は顔を赤くして廊下に飛び出て行く。

教室からはそんなネギ君をからかう声が響いていた。

廊下に立っている間、私は先程しずな先生から渡されたクラス名簿を見ていた。

（ふむ、気になる生徒は数人いるが、やはり一番の懸念は彼女だな）

名簿の写真には昨日の夜に見た少女が写っている。

出席番号26番Evangeline・A・K・McDowell。
今はそれほど魔力を感じないが彼女が吸血鬼なのは間違いないだろう。

だが何故か彼女の事は嫌いになれない。

（やはり似ているからか・・・イリヤに）

かつて姉であり妹だった少女。

容姿は決して似ている訳ではない。

髪の色も違うし、精々容姿の年齢が近いくらい。

だが彼女の纏う雰囲気、何故か彼女を想い起こす。

まあ彼女の事は後で学園長を問い糾すとしてよう。

中には幽霊やロボットの様な少女もいるが危険はないだろう。

これでも人を見る目はあるつもりだ、まあ今の所はなんとも言えないが。

そんな事を考えていた折。

「シロウさんはマギステル・マギ《立派な魔法使い》を目指しているんですか？」

突然ネギ君が予想外の事を聞いてきた。

恐らく沈黙に耐えかねて話しかけてきたのだろう。

私もネギ君の事を知るいい機会と思い話す。

「残念だがちよつと違うな、私が目指しているのはマギステル・マギ《立派な魔法使い》ではないんだ」

「そうなんですか？」

「ああ、私は大切な人を護れる『正義の味方』になりたいんだ」

嘘偽りのない本心で私は答えた。

一度は間違いだと思つた正義の味方になるという夢。

だが、衛宮士郎と凜のお陰で私の理想は間違つてはいなかったと気付いた。

だから守護者となつた今でも胸を張って言える。

「やっぱり、おかしいか？」

そんな言葉に呆れたのかネギ君はポカン、としているが。

次の瞬間には目を輝かせ。

「おかしくなんてありません！いいですよね、『正義の味方』！僕も父さんみたいなマギステル・マギ《偉大なる魔法使い》を目指しているんです！お互い、夢をかなえるために頑張りましょう！」

ブンブンと手を握るネギ君に私は妙な共感を覚えつつ静かに時間は過ぎていった。

昼休み。職員室で他の教諭と挨拶し終えた私は学園の地形を把握する為に廊下を歩くと背後から呼び止められる。

「シロウ」

足を止めて振り返るとこのかが手を振りながら廊下をパタパタと走り寄って来ていた。

「どうしたこのか？」

「うん、ちょっと頼みがあるんやけど、ええかな？」

「構わないさ、それで私に頼みとは？」

私を頼ってくれるのは嬉しいが一体何事なのだろうと思っていると。

「実は、放課後になったらうちの教室に来てくれへん？」

「行くのはかまわないが、何故だ？」

「それはなー、」

このかはそこで一度言葉を区切り、

「秘密や」

そう言って、明るく微笑む。

「……分かった。よくわからんが、とにかく放課後に3 - Aの教室に行けばいいんだな？」

「うん、そっやえー」

このかが頷くと、昼休みの終わりを告げる予鈴が鳴る。

「そろそろ次の授業の時間か。遅刻しないようなこのか」

「はい」

約束やでー、と手を振りながら再び廊下を駆けて行くこのかに手を振り返しながら私は職員室に戻っていった。

放課後。約束通り3 - Aの教室に向かっていると、前からこのかがやって来た。

「待たせたなこのか」

「待つとたえゝシロウ、ほな行こうか」

私の隣に並ぶと一緒に歩いて歩き始める。

このかは相変わらずニコニコと微笑んでいた。

「それにしてもびっくりしたわ、まさかシロウがウチのクラスの副担任になるなんてな」

「まあ、副担任といっても私はネギ君のサポートくらいしか出来ないからな代わりに何か困った事があったら何でも相談してくれ必ず力になるよ」

「ほんまに！ありがとな」

嬉しそうなこのかを見ているとこちらも嬉しくなってきた。

私はこんな笑顔が見たくて正義の味方を目指していたのだと、改めて実感した。

そして3・Aの教室の前まで来ると。

「さ、シロウ。入って入って」

かすかにからかいが混ざった表情を浮かべるこのかに促され、扉に手をかけ、開く。

それと同時に、

「ようこそ！！衛宮先生ーッ！！」

パーン、というクラッカーの音と目の前の生徒の声が廊下にまで響

き。

その向こう、教室の中にはケーキや肉まん、ジュース等々が所狭しと並べられていた。

「なるほど、こういうことか」

私は状況を飲み込み隣にいるこのかを見る。

このかは小さく舌を出してごめんなー、と手を合わせていた。歓迎会。

つまりは、そういうことなのだろう。

クラッカーを置いた生徒たちが私の腕を取り、背中を押し、中へと引っ張っていく。

私が中心の椅子に腰を下ろすと、どこからともなく紙コップを手渡され、ジュースを注ぐと、その場の全員が紙コップを手に持ち、

「それじゃ、かんぱーい！」

かくして、3 - Aの生徒たちによる、私の副担任歓迎会が始まった。

闇の福音と正義の味方

「『衛宮先生ーさよーならー』」

歓迎会の片付けを終えた生徒が寮へと帰って行く。

「ああ、気をつけて帰るんだぞ」

私は教室の戸締りをして急いで外に出た。

窓の外はすっかり夜となっている。

歓迎会にはエヴァンジェリンの姿はなかった、もしやと思い桜通りまで向かうと。

「キヤアアアアッ！」

前から夜を裂く様な女性の悲鳴が聞こえた。

全力で声がした方へ向かうと。

百メートル程先で黒いマントに身を包んだエヴァンジェリンと、裸の少女を抱くネギ君がいた。

二人が何事か話していると、後ろから今の声を聞きつけて明日菜とこのかが駆け寄ってくるのが見える。

エヴァンジェリンは二人の姿を確認すると煙に紛れるように後退していた。

一方のネギ君はと言うと。

「あんたそれ・・・！？」

「ネギ君が吸血鬼やったんか~~~~！！？」

「違います、誤解です」

突然のことで慌てる三人。

まあ、この状況ではネギ君が疑われてもしかたないだろうな。

「落ち着け三人共」

私は急いで駆けつけ三人を落ち着かせた。

「あ、シ、シロウさん」

ネギ君は私を見ると、何とか冷静さを取り戻した。
私に少女を預けると。

「シロウさん。宮崎さんを頼みます！僕はこれから事件の犯人を追いますので、心配ないですから先に帰っててください」

「え、ちょっとネギ君………」

「頼みます！」

そう言うとネギ君は魔法を使い、もの凄い速さで走っていく。

「ネギく………うわっ、はや!？」

「ちょっと、ネギ ツ!!」

明日菜が呼び止めるがネギ君の姿はもう遙か彼方だった。

2人がネギ君に気を取られている間に宮崎の容態を見ていると明日菜がネギ君を追いかけて行った。

それを見た私は投影した上着を宮崎に掛けてこのかに預けると明日菜の後を追う。

「シロウ〜〜〜」

後ろでは未だ状況を飲み込めないこのかが困惑した声を上げていた。女子中学生とは思えないスピードで走る明日菜を追いかけるながら後ろを振り向き。

「すまないが宮崎を寮に連れて行ってくれ、頼んだぞこのか」

このかを置き去りにするのは気が引けるが副担任である以上生徒を見捨てる訳にもいくまい。

心の中でこのかに謝りつつ私は夜の街へと駆けて行った。

【Side エヴァ】

エヴァンジェリンは宮崎のどかを襲った後、ネギを誘うように逃げていた。

「待てーっ!」

「早い、そういえば、坊やは風が得意だったな」

このままでは追いつかれると判断したエヴァンジェリンは歩道橋の手すりを飛び越えて、黒のマントをなびかせ闇夜に飛び立った。

箒も杖も使わずに空を飛んだ事にネギは驚いているが、すぐに愛用の杖に跨り私を追う。

「はは・・・先生、奴の事を知りたいんだろ？ 奴の話を聞きたくはないか、私を捕まえられたら、教えてやるよ」

自分の父の情報を持つている聞きネギの目の色が変わり杖を加速させ呪文を詠唱する。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル 風精召喚！ 剣を執る戦友！」

ネギが魔法を発動させる。途端、ネギの周りに『ネギ』を模ったモノが八体出現した。

姿形は皆一様に同じで、唯一オリジナルとの違いがあるとすれば、それは全身が白色に統一されているのと、それぞれが何かしらの得物を所持している事だけだった。

「分身 いや、精霊召喚か」

詠唱を聞き、エヴァンジェリンは顔だけで後ろを見る事で、その分身じみた術の正体を看破した。

難度的にはそこまで難しいものではないが決して十歳の見習い魔法使いが扱えるような魔法でもない、それを可能にするネギの才能と貯蔵魔力の量に、エヴァンジェリンは密かに舌を巻いた。

「まったく十歳の見習いとは思えん魔力だな、ネギ・スプリングフィールド」

襲い掛かる魔法を魔法薬で打ち消しながらもネギに隙を与えてしま

う。

「追いつめた、これで終わりです！ 風花・武装解除！」

ネギの魔法によってエヴァが纏っていたマントは無数の蝙蝠となり散って行く。

そして二人は建物の屋根へと降り立った。

「やるじゃないか先生」

ほとんど下着だけとなった自分の体を隠そうともせず、三メートルほどの距離を隔てた先に降り立ったネギに向けて賛辞を送っていた。英国紳士を自称するネギは片目を隠して、そのあられもない姿を極力見ないよう努めつつ、己が勝利を確信して口を開く。

「こ・・・これで僕の勝ちですね。約束どおり教えてもらいますよ何でこんなことをしたのか。それに・・・お父さんのことも」

「お前の親父・・・すなわち・・・サウザンドマスターのことか？」

それを聞いたネギは驚きで目を見開いていた。

「と・・・とにかく！魔力もなくマントも触媒も無いあなたに勝ち目は無いですよ！！素直に・・・」

「・・・・これで勝ったつもりなのか？」

その言葉と同時に、エヴァンジェリンの背後にそびえる屋根からトッ、と足音のような音が聞こえた。

ネギはその音に気づいたが、それが何なのかを理解する間もなく、己が絶対的敗因が降り立つのを見届けた。

ズンツ、と何か金属でも落ちたような重い音が響く。

「さあ、お前の得意な呪文を唱えてみるがいい」

先ほどとは違い、はつきりと勝利の笑みを浮かべながらエヴァンジェリンがそう告げる。

落ちてきたモノは新手だと、ようやく思考がそこに思い至ったネギはすぐさま二人を拘束するために呪文の詠唱を始める。

「風の精霊11人、縛鎖となりて」

詠唱を始める様にエヴァンジェリンはフツと笑い背後のモノは音もなく間合いを詰め。

「敵を捕まえろ あたっ！」

ネギの詠唱をデコピンによって止めた。

「あたた？」

ネギはデコピンで痛めた額を押さえながらこのときになってやっと新しくやってきた相手に見覚えがあることに気付いた。

「え、あれ！？き、君はうちのクラスの……」

「紹介しよう。私のパートナー、3-A出席番号10番 ミニステル・マギ《魔法使いの従者》絡繰茶々丸だ」

「え、なっ・・・！？ええっ！？茶々丸さんがあなたのパートナー！？」

「そつだ。パートナーのいないお前では私には勝てんぞ」

驚愕するネギを余所にエヴァンジェリンは淡々と答える。

「な・・・パ、パートナーくらいなくなつて！」

エヴァンジェリンの言葉を否定しようと、ネギが再び詠唱を開始する。

だが途端、茶々丸はもう一度ネギに近づくと、今度は両頬を引っ張る事で魔法の完成を妨げる。

ネギは何度も呪文を唱えようとするがことごとく茶々丸に妨害されて満足に唱えることは出来なかった。

茶々丸に指示を出し茶々丸はネギに謝りながらも素早く拘束した。

「・・・ふふふ、ようやくこの日が来たか。お前がこの学園に来てから今日という日を待ちわびていたぞ・・・。危険を冒してまで血を集め、貴様に対抗出来るだけの力をつけた甲斐があった。まあ最後は邪魔されたがこれで、奴にかけられた私の呪いも解ける」

エヴァンジェリンは喋りながらトントんと拘束されているネギに近づいていく。

「え・・・の、呪い、ですか？」

「そつだ。真祖にして最強の魔法使い、闇の世界でも恐れられたこの私がなめた苦汁・・・」

ふふつと愉悦にとんだ笑みを浮かべて弾けたようにネギの胸倉を掴み上げ、その向こうに見える忌々しい影にぶつけるように、エヴァンジェリンは吼えた。

「私はお前の父、つまりサウザントマスターに敗れて以来、魔力も極限まで封じられもう十五年間も日本のノー天気な女子中学生と一緒に勉強させられてるんだよ！」

積みもり積みもった恨みを吐き出すように、エヴァンジェリンは一気にまくし立てる。

「え．．．そんな．．．僕知らな．．．」

「このバカげた呪いを解くには．．．奴の血縁たるお前の血が大量に必要なんだ。悪いが死ぬまで吸わせてもらうぞ．．．」

「うわああああん！ 誰か助けて ！」

ネギは悲鳴を上げて助けを求めるがエヴァはかまわずにその首筋に齧り付き血を吸い始めた。その時

「マスター！」

風きり音と誰かが駆け寄ってくる足音に茶々丸が警告を出した。

「ち、昨日の奴か！？」

エヴァンジェリンはネギを放り出し茶々丸と共に一歩二歩と後退した。そして今までいた場所に昨日見た矢が突き刺さる。

そして背後から気配を感じて振り返ると乱入者は見事な飛び回し蹴りをエヴァンジェリンと茶々丸に喰らわせた。

「コラ ッ、この変質者ども ！ウチの居候に何すんのよ っ」

・ガンッ・

「はぶうつ」

油断と障壁を突破された驚きからエヴァンジェリンは吹き飛ばされ、盛大に屋根を滑っていった。

「な、何だこの力は き、貴様は神楽坂明日菜！？」

自分が蹴られた事が信じられないエヴァンジェリンは、少しの間頬を押さえて放心したが、一人だけ見事な着地を決めた乱入者に気づくと、その名を叫んだ。

「あ、あれ ？あんた達、ウチのクラスの……ちよつど
ういう事よ！？」

乱入者 神楽坂明日菜は、ネギを襲っていた人物たちの顔が余りに見知っている者だったので面を喰らってしまい、何故が一礼している茶々丸と頬を押さえているエヴァンジェリンの間で、何度も視線が左右した。

「ま・・まさか、あんた達が今回の事件の犯人なの！？しかも二人
がかりで子供をイジめるような真似して…… 答えによつてはタダじゃ済まないわよ！」

ようやく思考がそこに戻ったのか、明日菜が威勢のいい啖呵を二人に向かつて切る。視線も腰も物怖じしておらず、いざ戦いになってみすぐさま対応できるほどの気構えが、その立ち姿から窺えた。

「ぐっ……よくも私の顔を足蹴にしてくれたな、神楽坂明日菜。お、覚えておけよ……！」

恨めしい視線を明日菜に向けながら、エヴァンジェリンは三流の悪党のような捨て台詞を残し、茶々丸と共に屋根から飛び降りた。エヴァンジェリンは茶々丸の腕に乗り茶々丸はバーニアを噴きながらこの場を離脱した。

「……ふん、まあいい。思わぬ邪魔が入ったが、坊やがまだパトナーを見つけていない今がチャンスであることには変わらない……だが」

恨みが籠もった目を矢が飛来した場所に向ける。

屋根の上には漆黒の外套をはためかした白髪の男が手に弓を携えていた。

エヴァンジェリンは茶々丸に指示して男の下へと向かう。

外套の男は弓を構えるのでもなくただエヴァンジェリンが近づくを見ていた。

そしてエヴァンジェリンが外套の男の前に降り立つと。

「貴様……何者だ……」

「何者か、か……とりあえず学園広域指導員とだけ言っておこう、それでそれを聞いた君はどうするのかね？」

「ふん、決まっている。邪魔をするなら排除するだけだ」

エヴァンジェリンはおもむろに魔法薬を取り出す。

もちろんあれ程の腕と殺気を放つ者だ実力も相当なモノだろう、戦った所でこの状態では敵わぬ事は明白だ。

だが、闇の福音と恐れられた私がおめおめと逃げ出してはプライドが許さない。

せめて手傷でも負わせようと茶々丸に命令しようとした時、

「エヴァンジェリン。副担任とはいえ君は私の生徒でもある、出来れば吸血鬼騒動は控えてくれないか。もし出来ないのなら気は進まないが……」

そう言つて奴は眼鏡を外した、奴の瞳は血のように赤く光っている、そして眼の中にある勾玉文様を見た瞬間。

「覚悟してもらおう」

世界のあらゆる時間が止まった。

「っ

」

恐怖が体を駆け巡り、血液が逆流するような感覚が私を縛り指一本動かせなかった。

気付いた時には膝を着いていた。

「マスター？」

茶々丸からすれば突然自分のマスターが膝を折った様に見えたのだろつ。

実際に時間にして一秒にも満たない、だがエヴァンジェリンには数時間に感じられた。

エヴァンジェリンは息を荒げながら目前の副担任を睨む。

「安心したまえ、加減してある。ちよつとした挨拶だ」

「ハア、ハア……今のが挨拶か……フフ、随分手荒いな先生、いやエミヤシロウ……」

封印されているとは言えエヴァンジェリンは自分を圧倒するエミヤシロウと言う存在に歓喜していた。

この男は面白い、と。

「シロウで構わないさ、ある意味君の方が年上なんだ」

「ほう、私の正体を知っていたか。情報源はじじいか？」

「ああ、君をクラス名簿で見た後にね」

「そうか、なら私の事もエヴァと呼べ」

「了解した、エヴァ。ところで寒くはないのか？」

言われて自分が下着姿だと気付く、だが仮にも六百年を生きた身だ羞恥心など無い。

だが、シロウはその姿が落ち着かないのか何時の間にか取り出したコートを私に掛ける。

「エヴァも満月の日意外は普通の女の子なんだから風邪を引かないようにな」

シロウは役目を終えたように立ち去ろうとしていた。
エヴァンジェリンはその背中に向かって言う。

「シロウ、最後に一つだけ聞かせる。オマエは、私の敵か？」

シロウは立ち止まると背を向けたまま、

「君が誇りを失い、魔に堕ちるのであれば」

君が私の許せる一線を踏み越えるのならば。

私は、君を滅ぼすだろう。

シロウは、そう付け加えて夜の闇へと消えていった。

弓兵の実力

桜通りの一件から翌日の夜の事だった。

私は今とある施設の屋上にいる、目前には私が始めて降り立った森が広がっていた、何故こんな所にいるのかと言えばそれは学園長が呼び出したからに他ならない。

そして屋上に着くと連絡用に手渡された携帯電話が鳴り出てみると電話の向こうからフォ、フォ、フォ、と学園長の笑い声が聞こえてきた。

「・・・どう言う事が説明いただけるかな」

『いやな、エミヤ君を勝手に学園広域指導員にした事がちよつとした問題になってしまつてのう、他の魔法先生が信用出来んと言つてきたのじゃ、納得させるには君の実力を皆に見てもらふのが一番じやろうと思つてな、そこで今日、この学園内に侵入しようとする集団があるという情報を運良く入手できたのでエミヤ君はその集団をちやちやつと撃退してくれればいい、儂等、魔法先生や魔法生徒はそれ眺めておるから頼んだぞい』

ブツン、と言いたい事だけ言つて電話は切れた。

つまりは信頼を得る為に一人で侵入してくる集団を相手にしろと言つているのだ。

先程よりどこから常に視線を感じるので、大方、戦いをモニターに映して同僚になるらしい魔法関係者は観察しているとでもいうところか。

これはまだ信頼されていないからなのか、学園長独特の指示であるのか、非常に判断がつきにくかった。

「はあ………仕方が無い」

ため息をつきながら思考を切り替え、眼に魔力を通し強化する。そして四キ口先の森に異形の集団を捉えた。数は二十を超えているが幸いな事に一塊になって移動している。

トレース・オン
「投影開始」

愛用の黒弓を取り出し弦を引き絞る。

しかしその手に矢は番えていない、誰もがその意味を理解できなかった。

だが次の瞬間。

「I am the bone of my sword・《我が骨子は捻じれ狂う》」

直後、弓には最初から番えられていたかのように虚空から捻じ曲げられた西洋剣のような矢が現れる。

凶悪な魔力が込められた剣もとい矢は唐突に放たれ空間を螺旋状に捻り切りながら音速を超えるスピードで四キ口先の異形の集団に着弾し、

フロークン・ファンタズム
「壊れた幻想」

呟いた直後、突き刺さった矢は盛大に爆発し轟音が鳴り響く。地面は削り取られ、動く敵の姿はそこでゼロになる。

すぐさま携帯電話を取り出し学園長へコールする。

「仕事は終わったのでこれで失礼する」

『ご苦労じゃったな、ところで一つ話があるんじゃない？』

「なにかね？」

『どうじゃな？うちのこのかを嫁にしてみんかの？』

「結構だ」

私は即座に断った。

自分の孫娘を出会ったばかりの男の嫁にしようとするとは、このかの苦労が伺われるな。

『むづ』

口惜しそうな学園長の声に苦笑しながら携帯を仕舞うと屋上から飛び降りた。

【Side エヴァ】

麻帆良に現れた黒い弓兵は、その姿を見た魔法関係の人々に様々な感情を植え付けた。

ある者は純粹に尊敬し、ある者はその実力に警戒を置き。

そしてまたある者はその存在に興味を抱き、またある者はその強さに惹かれた。

そしてその内の一人でもあるエヴァンジェリンは昼間だというのに授業をサボタージュ中だ。

今もふわーっと眠たげに欠伸をしていると。
彼女の思考に一つの違和感が発生した。
それは侵入者の知らせ。

学園に魔力を帯びた何者かが侵入したことの警報だ。

「メンドウクサイ……」

警備員としてはその対処をしなくてはなるまい。
まったく、厄介な呪いである。

エヴァは春の陽気に眠気を誘われながらも結界が反応した場所まで足を運んだ。

しかし現場に来てみるとそこには先客がいた。

「授業に出ないと卒業できないぞエヴァ」

「それは私に対する嫌味か？」

「さあ？」

エヴァはふんと顔を逸らす、この場はシロウに任せておけばいいだろうと思い再び学園に戻ろうと一人歩き出した。
しかしシロウは苦笑しながらすぐ後ろについて来る。

「どこに行くんだ？」

「貴様には関係ないだろう、ストーカーかお前は」

「生憎そんな趣味はない、ちょっと話をしたいだけさ」

「なんだ？くだらん話なら聞かんぞ」

「なに、私とある約束をして欲しいだけだ」

「ほう、言ってみろ」

「簡単な事だ、ネギ君を殺さないで欲しい。代わりに生死が危ぶまれるまで私は君達の戦いには介入しない、これでどうだろう？」

それは、エヴァにとって都合が良すぎる約定だ。

ネギ強襲の最大の障害、エミヤシロウの方から不干涉を申し出でてくれるとは。

だが疑問が残る、シロウはそんな回りくどい事をしなくても、今この場で強制的に、エヴァンジェリンの戦闘能力を奪い去る事が出来るはずだ。

それを、何故こんなにもややこしくする？

考えられるとすれば、それは。

「じじいの差し金か」

「まあ、それもあるが、未来ある若者に実戦経験を積んで欲しいと思ってね」

「・・・いいだろう。女・子供は殺さん主義だ安心しろ」

「よし、これで契約は完了だ・・・ああ、一つ言い忘れていたが、もし君がネギ君以外を襲った場合私は容赦なく君達に介入するので気を付けろ」

「ぐ・・・仕方あるまい」

エヴァは齒噛みする、まあ、これくらい交換条件なら安いものだと自分に言い聞かせ重い足取りで学園へと戻って行った。

あの日からエヴァは特に生徒を襲うでもなく普通に過ごしていたので私は街の散策と買い物をしていた、そして帰り道を歩いていた時。

「うえーん、あたしのフーセン！」

泣きじゃくる小さな女の子の姿を捉えた。

見ると樹の上に赤い風船が引っかかっているのが見える。

買い物袋を置き女の子を宥める。

「安心したまえ、お兄さんが取ってあげよう」

そう言っただジャンプする。

180を超える身長と英霊の身体能力で易々と風船を掴み女の子に手渡す。

「お兄ちゃん、ありがとー」

女の子がお礼を言い、私に向かって大きく手を振りながら去っていった。

手には先ほど渡された風船があり、ゆらゆらと風に揺れながら女の子についていつている。

私は足元に置いていた買い物袋を持って立ち上がると少し前方にエヴァの従者である絡繰茶々丸がペコリ、と頭を下げているのが見えた。

「こんにちは、茶々丸」

「・・・・・・・・こんにちはエミヤ先生」

「買い物かい？」

「はい、ネコたちに餌を・・・・」

見ると手にはネコ缶と受け皿が入った袋を持っていた

「ネコか、私も付き合ってもいいかな？」

コクリと頷くと、私は茶々丸と共に歩き出す。

道中、階段で困っているご老体を助けてみたり、じゃれついてきた子供と遊んだり、川で沈みかけている子猫を助けたりと。

二人とも人助けに余念がなかった。

あまり人氣が無い小さな広場に着いたところで茶々丸の歩みは止まった。

ミイー、と何故か私の頭の上に鎮座している子猫が鳴く、どうやら目的地に到着したらしい。

子猫が鳴いた声に反応したのだろうか。

建物の影から、ベンチの下から、茂みの中から、ネコたちが私と茶々丸を中心に集まってきた。

袋からネコ缶を取り出しふたを外して、一緒に買ってきた器の中へと中身を移す。

茶々丸のそれはずいぶんと手慣れた様子だった、見事なまでに缶の中身が全て器へと移っている。

ニヤーニヤーと器の餌を食べるネコ。

それを見て微笑む二人の男女、なんとも心和む光景である。

【Side ネギ】

そんな光景を茶々丸さんとシロウさんの後を着けてきたネギと明日菜はホロリ、と呟く。

「……いい人だ」

一連の『あまりにいい人』な行動を見て、当初の目的を忘却の彼方に追いやっていた二人組に、カモは発破をかけるように怒鳴った。

「ちよつ、二人とも！！しっかりして下さいよぉ！ほら、兄貴は命を狙われてるんすよ！」

「いや、でも、やりにく過ぎるわよ、いくら何でも」

それは発言した明日菜だけでなく、ネギにも大いに共感できる感情だった。

しかし自分の命が懸っていても素直に頷くことはできなかった。

そんな問答をしている内にシロウさんが茶々丸さんから離れていった。

どうやら帰るようだ。

「兄貴！あの男が離れていくつす、人目がない今がチャンスですぜ。心を鬼にして一丁ボカーっとお願ひします」

「で、でもー・・・」

「・・・しょーがないわねー」

あんなにいい人をこれから二人で襲うなんて卑怯なことに、凄く心が痛む。

けど、カモ君の『命を狙われてる』って言葉を聞いて、エヴァンジェリンさんの事を思い出す。

あの時、あの感覚をもう一度、もっと深く味わうことになんてなったら、僕は正直、正気を保っていられるか分らない。

僕はその恐怖に勝つことができず、動物たちがいなくなるのを見計らってから、茶々丸さんと向き合った。

「・・・こんにちは、ネギ先生。神楽坂さん」

学校で話すのと同じ風に僕たちを迎えた姿が、僕の心を締め付けた。

「・・・油断しました。でも、お相手はいたします」

「茶々丸さん、あの・・・僕を狙うのはやめていただけませんか？」

一縷の望に賭けてみるが、返ってきたのは予想通りの答えだった。

「・・・申し訳ありませんネギ先生。私にとって、マスターの命令は絶対です」

ペコリ、と茶々丸さんは礼儀正しく頭を下げる。

僕は覚悟を決めるとアスナさんに先程の打ち合わせを確認する。

「……では茶々丸さん」

「はい」

泣きそうな顔を引き絞り、茶々丸さんを正面に捉える。

アスナさんも、一言『ごめんね』と謝りながら、体を半身に構えた。

「神楽坂明日菜さん……いいパートナーを見つけましたね」

茶々丸さんと対峙し詠唱を始める。

「行きます！！契約執行10秒間！！ネギの従者『神楽坂明日菜』
！！！！ラス・テル・マ・スキル・マギステル！」

呪文を唱え終わるとアスナさんはまるで羽が生えたかのように身軽となり、爆発的な加速と共に駆け出した。

一撃目は互いに弾きあい、それでも接近して左手で構えていたデコピンを茶々丸さんの額に向けて放つ。

しかし放たれる瞬間に茶々丸さんは右腕でアスナさんの左腕を逸らし、自らも後退する事によってなんとか避けていた。

「はいい！素人とは思えない動き」

一撃を食らいながらも、それ以上の進行は許さぬとばかりに、アスナさんの足を茶々丸さんが払った。

それによってアスナさんは態勢を崩したが、その時にはもう別の呪

文の詠唱を始めていた。

「光の精霊11柱、集い集まりて・・・」

僕の詠唱に反応して光の玉が展開し始める。

「魔法の射手 連弾・光の11矢!!」

そして詠唱完了と共に茶々丸さんに向かって十一条の光の矢が迫る。

「・・・・・・・・追尾型魔法接近多数・・・よけません」

回避できない事を悟った茶々丸さんは全てを諦めような表情で光の矢を見つめ、

「すみませんマスター・・・・・・・・もし私が動かなくなったらネコのエサを・・・・・・・・」

声にもならないすいませんという謝罪を口にした時、トレース・オン投影開始という言葉とともに茶々丸さんの前に巨大な塊が現れ光の矢を全て防ぎ衝撃で粉塵が周囲を漂う。

「どうなったの?」

「わ、わかりません。障壁の類は展開されませんでしたけど・・・・何か魔力を感じます」

「・・・・・・・・それって!」

粉塵が晴れるとそこには怒りの表情をしたシロウさんが僕を睨んで

いた。

私は茶々丸と別れ寮への帰路に赴いていた時。

「ミイー」

頭の上で先程助けたの子猫が鳴いているのに気付く。

「いかん、広場に置いてくるのを忘れてしまった」

我ながら日寄ってしまったなと笑みを漏す。

頭の子猫を抱き茶々丸の所に引き返す。

広場に着いた所でネギ君が茶々丸に魔法を放とうとしている場面に
出くわした。

「まずいつ！」

あの魔法がどのようなモノかはわからないが、アレを食らえばただ
ではすまないだろう。

私は子猫を降ろし強化した足で走るがネギ君の魔法は無常にも放た
れる。

「くそつ、間に合わんか！」

そんな時、光の矢を見つめていた茶々丸が申し訳なさそうな声で呟
いた。

「すいませんマスター……もし私が動かなくなったらネコのエサを……」

「!」

その声を聞いた瞬間、私の中にある少女の顔が想い起こされる。

『申し訳ありません……どうか貴方だけでも……』

微かに残るセイバーの記憶と茶々丸の声が重なる。

同じ過ちを繰り返す訳にはいかない!!

「トレース・オン
投影開始」

一瞬で自己の裡に埋没しかつてギリシャの大英雄が使っていたあの武器を引き出す。

そして自分の手に現れたのは岩を削って作られた無骨な斧剣、それを強化すらしていない腕で大きく振りかぶる。

ブチブチと筋肉が断裂していくが構わず最大の力で斧剣を投擲する。斧剣は寸分変わらず茶々丸の手前に突き刺さりネギ君の光の矢を防いだ。

着弾の衝撃で粉塵が舞い、私は素早く両者の間に割って入る。

粉塵が晴れ、ネギ君たちが私の姿を捉える。

「あ……シロウさん」

「何でシロウが？まさかシロウも魔法使いなの!？」

ネギと明日菜は呆然と私を見ていた。

そんな二人を余所に私は衝撃で座り込んでいる茶々丸に近寄る。

「大丈夫か茶々丸？」

「あ、はい。エミヤ先生のおかげで私は大丈夫です」

「そうか、無事でよかった」

茶々丸の無事を確かめ笑顔で答えた後、表情を引き締め厳しい視線をネギ君と明日菜に向ける。

「一体何を考えているのかね、ネギ君」

ネギは冷たさを感じるその口調に怯え、一歩後ずさる。

「おいおい、邪魔しないでくれよ！そいつを倒しちまえばあとはエヴァンジェリン一人で兄貴が楽に戦えるようになるんだぜ！」

ネギ君の肩に乗っているオコジヨが何をしようとしていたのかをはつきりと伝えた。

どうやらあのオコジヨの言葉に乗せられてこんな事をしたのだろう。だが、乗せられたからと言って生徒を闇討ちしようなど許される事ではない。

「ネギ君、君は自分の生徒に危害を加えようとしていたのかね？」

「で、でも茶々丸さんはエヴァンジェリンさんの従者で・・・」

「だから、茶々丸を殺そうとしていたのかね？成程、それは戦闘者としては正しい。二人ががりて茶々丸を狙ったのも卑怯だとは言わない、戦略的には間違っていないからな。だが君は戦闘者ではなく

生徒を導く先生だろう？今の君は先生としてもマギステル・マギ《立派な魔法使い》を目指すものとしても完全に失格だ！」

「えっ……」

私の言葉に呆然とするネギ君。

「自分から言い出したのかそのオコジヨから吹き込まれたのか知らんが君は、自分が勝ちたいから生徒に一方的に危害を加えようとした。先生とは生徒を守ってやる存在だろう。それなのに、その先生が生徒を排除しようとする。そんな君に先生としての資格があるとおもつか？それにマギステル・マギ《立派な魔法使い》は世のため、人のために陰ながらその力を使う者達のことだろう。だが君は、自分が勝つ為に力を使って茶々丸を倒そうとした、いや殺そうとしたのほうが正しいか、そんなやつがマギステル・マギ《立派な魔法使い》を目指すだど……成程マギステル・マギ《立派な魔法使い》とは力で氣に入らないモノを組み伏せる者達だったのか、一つ勉強になったよ」

私は皮肉を籠めてネギ君を睨みつける、多少酷かもしれないがエヴァの約束の手前これもネギ君の為だと思い割り切る。

「あ、あ、ああああ……」

ネギ君は顔を青くしながら動揺した声を漏らしていた。

「ちょっとシロウ！なにもそこまで言わなくても！」

流石に見かねたのか明日菜が、私からネギ君を守るように駆け寄ってくる。

「明日菜、君にも言えることだ。本来ならば年上である君が引つ叩いてでもネギ君を止めてあげなくてはならなかった。それなのに、のこのことついていつてクラスメートを殺す、または大怪我させるための片棒をかついだ。違うのか？」

「う、それは・・・」

自覚があるのか、明日菜はバツがわるそうに視線を逸らした。

「ネギ君。私が言った事を、よく考えてみてくれ。君はまだやり直せるんだ、それが出来なかった私と違って・・・」

そう言つて私はネギ君たちに背を向け未だ座り込んでいる茶々丸を抱き抱える。

その様は俗に言うお姫様抱っこである。

抱えたまま放り投げた買い物袋を回収しこの場を去ろうとした時、背後からネギ君の声が響く。

「シロウさん・・・貴方は一体何者なんですか？」

その問いに私は振り返らずに答えた。

「私は・・・間違つたものだよ。・・・そして間違いながらも答えを得て、前に進む者だ」

思えば自分はどれほどの幸せをこぼしてきたのだろうか？
だからこそ・・・ネギ君には間違えて欲しくない。
そんな思いを抱きながら私は広場を去った。

茶々丸を抱えながら、エミヤシロウは思う。

振り返ってみれば、ずいぶんと好き勝手なことを言ったものだと思つて笑する。

自分が他人に説教できるような人間でないことは誰より自分が知っているのに言わずにはいられなかった。

桜が咲く並木道をしばらく歩いていると、

「あの・・・エミヤ先生。そろそろ降ろしていただきたいのですが・・・」

抱えていた茶々丸が困った様な声で言った。

「ん？ああ、すまなかった。体は本当に大丈夫かね？」

「ええ、さっき言ったとおり私は大丈夫です」

ゆっくりと茶々丸を降ろし体に着いた土埃をハンカチで拭う。

「ありがとうございます」

一礼して感謝する茶々丸に私は気にするな、と答える。

「・・・なぜ助けにくださったのですか？私とエミヤ先生は敵同士なのに」

「私は茶々丸を敵だとは思っていないし、あの夜はエヴァがネギ君に危害を加えようとしたから止めただけだ、私もエヴァの事は嫌いじゃない、だから何か困った事があつたら遠慮なく言ってくれ」

「そうですか。では私は用事がありますのでこれで、本当にありがとうございました」

そう言つて茶々丸は背中からジェットノズルの噴出口を覗かせ、炎を噴出させながら空へと消えていった。

その光景を見るのは二度目だがやはりロボットなんだなーと改めて実感する。

「・・・魔法と科学の融合か、やはり凄いな。機会があれば解析してみたいものだ」

自分の趣味はガラクタいじりだ、未知の機械には大いに興味がある。そんな子供じみた自分を笑いながら寮の部屋へと帰って行った。

決着と邂逅

あの茶々丸襲撃事件から二日経った日の朝の事だった。

あれからネギ君が家出をしたり、それをアスナが探しに行つて遭難しかけたりと、色々大変だったらしい。

だから帰つてきたネギ君が私の部屋を訪ねてきた時は驚いたものだ。私の顔を見て最初はおどしていたが何か踏ん切りがついたのかすぐに決意の籠もった顔する。

「シロウさん、この間ありがとうございました。僕は取り返しのつかないことをするところでした。いくら勝ちたいからといって先生が生徒を傷つける真似なんて許される訳ないですよね……。だから僕決めました！正々堂々正面からエヴァンジェリンさんに挑みます！でもエヴァンジェリンさんも僕の大事な生徒ですからなるべく怪我をさせないようにします！」

それがネギ君の出した答えか。

どうやら休日の中に迷いが吹っ切れたようだな。

「そうか、頑張れよネギ君。私はこの勝負に手出しは出来ないが立会人としてその勝負を見守ろう」

「はいっ！あ、それですね、今からエヴァンジェリンさんに果たし状を渡しに行こうと思うんですが」

「授業はどうするんだ？」

「授業が始まるまでには、帰ってくるつもりです」

「わかった、気を付けてな」

「はい！ありがとうございます！！」

一礼してから物凄いスピードでネギ君は走り去っていった。

しかし教室でエヴァが風邪を引いて欠席していると聞いたネギ君はエヴァの家に行ったまま帰って来なかった為、普段ならばネギが立っているはずの教壇には私が立っている。

「あー、ネギ先生は所用があって遅れるそうだ。よって、代わりに私が授業を担当する」

「あの、ネギ先生はどちらに？」

すかさずクラス委員長の雪広あやかが反応した。
彼女はネギ君を弟のように可愛がっていたからな。

「ああ、場所は判らないが信頼の置ける人の下にいるから安心してくれ。だからネギ君が戻るまでは私が代理になるが、構わないかな

「？」

「わかりましたわ」

「ありがとう雪広。さあ、そろそろ授業を始めろぞ」

まだうだうだと不満の声は漏れてきていたが、いざ授業を始めればそんな声も消えた。

天才とは言えまだ十歳のネギ君の授業よりは、バイリンガルで日本人の視点を持つている私の授業の方が分かり易いだろう。

発音に関して言えば、流石にネギ君よりは拙いのだが、それでも英語教師としては十分過ぎると自負しているつもりだ。

かつて自分の姉代わりだった人が英語教師であった経験もあり授業は滞りなく進みネギ君が帰って来る頃にはすっかり教師の認知が逆転していた。

「こちらは放送部です・・・これより学内は停電となります。学園生徒の皆さんは極力外出を控えるようにしてくださいさ・・・」

午後八時、ぎりぎりまで放送していたアナウンスが学園都市内メンテナンスの為に止まり、全ての灯りが落ちた。

麻帆良全域で起こる四時間に及ぶ停電は常時この麻帆良を覆っているという結界を消してしまうらしいので私は停電による学園の防衛力低下に伴い麻帆良全域の見回りとこの四時間の停電を狙った侵入者達の撃破・捕縛を学園長から依頼された。

今私は麻帆良学園都市全域を見渡せる建物の屋上にいる。

この場所は予想される戦闘ポイント全てに対応できる理想的な狙撃地点だ、停電してからしばらく周囲を見回していると上空から黒いマントを羽織った妙齡の女性が羽ばたくように現れた。

「こんにちは、エミヤ先生。見回りご苦労様です、よかったです一緒に緒しませんか」

女性が魅了するように微笑んだ、その神秘的な雰囲気はあのライダーを彷彿させる程だ。

耐性がない者ならば一瞬でその美しさで魅了されるだろうが元女神であるライダーや魔女のキャスターなどで多少の耐性はある。

それに幻術で姿を変えても今の私には通用しない、何故なら・・・

「・・・あまり人を幻術でからかうな、エヴァ」

「フフ　よく幻術だと見破ったな、女に疎そうな奴だと思ったが中々やるじゃないか」

「ク、生憎とこの眼は幻術の類を見抜く能力があつてね」

そう、アヴェンジャーの形見であるこの写輪眼はあらゆる技や幻術を見破る事が出来る。

魔眼としての能力は最高クラスに位置する為あまり公にはしたくないがエヴァになら構わないだろう。

それにしても今のエヴァからは魔力が満ちている、これが最強の魔法使いと名高い『闇の福音』か。

「それがエヴァの本当の力か？」

「そうだ。このメンテナンスによる大規模停電に乗じてな。私の魔

力を封じていた学園結界への電力を遮断させて魔力を復活させたい、まあ詳しい事は分からんがハイテクというやつだ」

フフフと楽しそうに笑うエヴァはふと真面目な顔で私に視線を向けた。

「シロウ、先日の約束は覚えているな？」

「ああ、」ネギ君の生死が危ぶまれるまで君達の戦いには介入しない」だろう」

「そうだ。私は、今夜の標的を坊やだけに絞り他には手を出さん。だから、貴様はこの戦いに手を出すな」

「分かっている、エヴァもネギ君を殺すなよ」

私の頑なの顔を見てエヴァは力を抜いてフツと笑う。

「安心しろ、前にも言ったが女・子供は殺しはせん」

「・・・そうか。がんばれとは応援できないが色々と気を付けるよ」

私のその言葉にエヴァは不敵に笑う事で返事を済ませた。

そしてそんなやり取りの中茶々丸が空を飛んでこちらに向かってくるのが見えた。

「マスター、お待たせしました」

茶々丸は私にも会釈をして挨拶をする。

「茶々丸行くぞ！」

もう時間だとばかりにエヴァは鋭い声を上げた。

茶々丸はエヴァの言葉に無言で会釈をしエヴァは一目だけ視線を向けて、そして二人はおぼろげな月の光に照らされ夜空に舞う。
その幻想的な光景を私は無言で見つめていた。

それから2時間程経った頃

「派手にやっているな・・・」

私は夜空を駆ける二人の魔法使いと一人の従者を遠く離れた施設の屋上で眺めていた。

視界の端では学園に侵入しようとしている異形の群れが押し寄せて来るのが見える。

すかさず弓を構え矢を放つ、直後、夜空を赤く彩る彗星が数多走り侵入者を貫いた。

視界に入る敵を全て射抜き再びエヴァ達の戦いを見守っていると、学園都市を結ぶ橋の上でエヴァの体は、幾重にも巻きついた光のロープのようなもので捕らえられたていた。

「捕縛結界か・・・ネギ君の罠にエヴァがかかったようだな」

それを見たネギ君はイタズラが成功したようにはしゃいでいる。

だが、相手は数百年を生きる真祖の吸血鬼。

そう簡単に捕まえられるわけもなく、茶々丸の耳飾りからアンテナの様なものが更に飛び出し捕縛結界を無力化した。

視線の先では喜んでいたネギ君が一転して驚いている顔になっており拘束を解いて見せたエヴァは不敵に笑っていた。

涙目になりながら怯えるネギにエヴァは口を開けてその首筋に噛み付こうとする。

「やはり、エヴァの勝ちか・・・ん？あれは」

エヴァの勝利かと思われた時、橋に向かって明日菜が走って行くのが見える。

それに気が付いたエヴァは茶々丸に迎撃を命じるが明日菜の肩にいたオコジョがマグネシウムに火を着け激しい閃光が辺りを支配しその中を明日菜は茶々丸をかわして突っ切った。

そして一直線にエヴァの下へと向かいきれいな踏み込みで跳び蹴りを敢行する。

しかしエヴァは向かってくる明日菜に対して片腕を突き出し魔力で構成された障壁を展開した。

生半可な手段では削る事すら出来ない、ましてや人間の力で障壁を突き破る事など到底不可能だろうと思っていた矢先。

飛び蹴りがエヴァの魔法障壁を突き破りエヴァを吹き飛ばした。

「何、障壁を無効化しただと！？まさか魔力を無効にする能力か！
」

確かに魔力を無効にするだけなら私の宝具の中にある破魔の紅薔薇ゲイ・ジャルクにも同じ能力がある。

だが何より驚いたのは仮にも宝具の域にある能力を人間である明日菜が発揮した事だ。

「やはりこのかやネギ君と一緒にの部屋と言うからには彼女も何か特殊な事情があるのだろう。気にはなるが詮索するのは野暮だな」

そんなことを考えているうちに柱の影から魔力の光が溢れる。

どうやら明日菜とネギ君は仮契約とやらをしたのだろう、柱の影から二人が現れエヴァ達と対峙する。

「停電が終るまであと少しか。ということはあと少しでこの戦いは終わるな」

広場の時計を確認して呟く。

実際の所この戦いは自分にとってありがたかった。

この世界の魔法使いがどういった戦いをするのかということを私はまったく知らなかった。

だからこの戦いでこの世界の魔法使いがどの程度のレベルをもっているのかということはある程度推測でき、また、それに対する対処法も考えることができる。

しかしその為にネギ君を危険に晒すのは本意ではない。

（一応すぐ戦闘に介入できるよう準備しておくか・・・）

ネギ君とエヴァの戦いは激しさを増していた、それは正に御伽話に

ある魔法使いの戦いようだ。
その戦いを見守りながら私はいつでも剣を打ち出せるよう弓を構えた。

【Side エヴァ】

「リク・ラク ラ・ラック ライラック 闇の精霊29柱!!」

「くっ・・・ラ、ラス・テル マ・スキル マギステル 光の精霊
29柱!!」

ネギは二十九という精霊の数に驚くが素早く詠唱を完了させ同数の魔法の射手を展開する。

「魔法の射手 連弾・闇の29矢!!」

「魔法の射手 連弾・光の29矢!!」

同時に魔法の射手を撃ち出し互いに相殺され魔法の射手の余波が、地上にいたネギに襲い掛かる。

「うくっ・・・!!」

「アハハいいぞ、よくついて来たな!!」

詠唱に時間がかかる事を指摘し自分の放つ魔法に合わせるように素早く詠唱したネギの頑張りに賛辞を送る。

すかさず先行を取ろうとするネギはすぐさま呪文の詠唱に入る。

「ラス・テル マ・スキル マギステル 来れ雷精 風の精!!」

詠唱を聞き、瞬時に放たれる魔法を看破し私はネギを試すように同種の魔法を唱え始める。

「リク・ラク ラ・ラック ライラック 来れ氷精 闇の精!!」

ネギは自分が見える一番強い魔法の詠唱にエヴァンジェリンが同種の魔法を唱え始めたことに驚く。

「雷を纏いて 吹きすさべ 南洋の嵐」

「闇を従え 吹雪け 常世の氷雪」

打ち合いとなるべく詠唱は紡がれ。

それぞれの手に、今までとは比べ物にならない、視認出来る程の魔力が集まり始めた。

「来るがいい坊や!!」

私の声に呼応するように両者の魔法は完成され魔力を溜めた手を振りかぶり

「雷の暴風!!!!」

「闇の吹雪!!!!」

麻帆良大橋すら震える程の衝撃と轟音を伴い、雷を纏った白い嵐と

黒い吹雪が激突した。

両者の魔法は完全に拮抗している。

「ぐうつ・・・くくつ・・・」

内心私は驚いていた、魔力が拮抗しているという事は、二人の魔力はほぼ互角。

少なくとも、身に宿す魔力の量で言えば、私と肩を並べる事ができるのだ。

（流石にあのナギの息子なだけはあるな）

自分をこの地に閉じ込めた男の顔を思い出し怒りが湧き上がるが同時に寂しさも覚える。

そんな感傷に浸っていた時、ネギが杖を突き出し魔力を注ぎ込んでいた。

しかしそのあまりの量に子供用の練習杖では耐え切れなかったのだろつ。

あっという間に先端の星に輝が入るが同時にネギがくしゃみしたことで瞬間的に全魔力が集まり杖は砕け散った、だが放たれた魔力は雷の暴風に上乗せされ闇の吹雪を消し飛ばした。

「な・・・何!？」

最後の最後で拮抗は崩れ驚いた時には、全てが終わっていた。

十歳の少年が放ったとは思えない威力の魔法は、完全に私を捉え魔法障壁を突き抜る、そして爆音と閃光が辺りを包み込んだ。

「・・・やりおつたな、小僧・・・フフツ・・・フフフ、期待通りだよ、さすが奴の息子だ・・・」

私は怒りで顔を引き攣らせながらネギを睨む。
奴は私の衣服が吹き飛んで裸体を晒している事に慌てふためいている。

「あ、あわつ、ぬ、脱げ・！?ごめんなさいっ!」

「や、やったぜ兄貴、あのエヴァンジェリンに打ち勝ったぜ!?信じられねー!!」

隣りでオコジヨが主の勝利に喝采をあげていた。

「ぐっ……だが、まだ決着はついていないぞ!」

再び詠唱に入るために手を構えた時、それは起こった。

「いけないマスター!戻って!!」

そして茶々丸の声と共に停止していたはずの学園都市の照明が次々に付いていく。

「な・・何!？」

「予定より7分27秒も停電の復旧が早い!!マスター!!」

「ちっ、ええいつ、いい加減な仕事をしおって!」

急いで橋の上に移動しようとしたがそれよりも早く学園都市の境界が再起動した。

「きゃんっ」

一筋の静電気のようなものが体に走り、その瞬間全身が落雷にでも打たれたような衝撃が私を襲い体の中にある魔力が消えていくのが判った。

魔力が無くなればただの十歳の子供だ、そんな状態では空を飛ぶ事も出来ず体は湖に向かって自由落下を始めた。

その様子を見ていた私は弓に剣を投影して番えた。

落下していくエヴァを杖に跨ったネギ君が追いかけるがあの速度では間に合わないと判断したからだ。

すぐさま剣をエヴァの真下に打ち出す、剣は高速で飛来しエヴァの下に到達した、同時に。

フロックン・ファンタズム

「壊れた幻想」

あまり威力のない爆発を起こしエヴァの体を爆風で浮かせる。

そしてエヴァの手をネギ君が見事にキャッチした、それを見た私は安堵した。

ネギ君に助けられたエヴァは何故か涙ぐんでいたが無事なようだ。

「……無事に終わってなによりだな」

しばらくネギ君たちの様子を伺っていたがどうやら険悪な雰囲気にはならなかったようで今では仲良くじゃれついている。

私はその光景を微笑みながら見守った。

寮への帰り道、桜通りを歩いていると前に黒いマントを羽織ったエヴァと茶々丸の姿を確認した。
いつも通り頭を下げる茶々丸とふてぶてしい態度のエヴァを見て安心する。

「派手にやられていたが怪我はないかね、エヴァ」

「大きなお世話だ、それより確認したいのだが、あの爆発は貴様だな？」

「さあ、何の事かね？」

私は大げさにリアクションする、それを見たエヴァはフツ、と笑い、

「やはり面白い奴だな貴様は、どうだ私の下僕にならんか？」

「全力で辞退する、私などよりネギ君の方がよっぽど面白いぞ弄り甲斐もあるし」

「・・・ぶ、くく、あはははははは！！！」

さりげなくネギ君を生贄したことが笑いのツボに入ったたのかエヴァ

アは腹を抱えて爆笑していた。

「くくく、ああ、いいぞ、ますます気に入ったよシロウ。その調子で私を楽しませてくれよ」

「私は漫才師ではなく君の先生なのだがね」

「そうかな、あの夜の後、貴様に関する情報を調べてみたが全くと言っていいほど情報がなかった、まるで突然この世界に現れたかのように。貴様は記憶喪失と言っているがそれは嘘だろう、何故なら記憶を失ったフリをすれば労せず情報を聞き出せるからな、そしてここまでの話を統合すると貴様は何か目的があつてこの学園に侵入した魔法使いと言ふ事になる、違うか？」

「エヴァ・・・君には探偵の才能もあるかもしれないな」

手痛い所を突かれ苦笑しか漏れてこない私を見てエヴァは満足気な笑みを浮かべていた。

「そう悲観するな、貴様には助けて貰った恩がある、少なくとも誰にも言わんさ」

そう言つて背を向ける、立ち去ろうとするエヴァに私は声を掛ける。

「エヴァ、明日の放課後に君の家で話をしたいのだからいいかね？」

「ああ、その時は精々歓迎しようじゃないかシロウ」

悪い魔法使いと正義の味方はこうしてお互いの存在を再確認したのだった。

破戒すべき全ての符

昼休みの教室で私はエヴァに何と言つべきか非常に悩んでいた、ちらりと教室の奥を見ると悩みの種であるエヴァがニヤリと意地の悪い笑みで笑っている。

（さて、どうするかな・・・やはりこの世界の情報を得る為にも協力者は必須か）

こうなつてはもう一蓮托生だと割り切る覚悟をしなければならないな。

そんな私の悩みを知つてか知らずかネギ君は修学旅行が京都に決まりあふれ出る喜びを体で表すかのように騒いでいる、生徒はそれに追隨するかのように教室中が騒然となっていた。

（今はその無邪気さが羨ましいよネギ君・・・）

ネギ君が生徒と一緒に喜んでいる様を見て心の中でそう思つてしまった。

そんな時、源しずな先生が教室へやってきて、学園長が私とネギ君を呼んでいますと伝えたのでネギ君を連れて学園長室へ移動する事になった。

「ええ……！し、修学旅行の京都市行きは中止……！？」

学園長の口から修学旅行の中止を言い渡されたネギ君はショックでヘナヘナと壁に寄り掛かっている。

その様子はまるで大学受験に落ちた浪人のようで切なかった。

「コレコレ……まだ中止とは決まっとらん、ただ先方がかなりイヤがっておつてのう」

学園長は困った様にネギ君に説明した。

何でも京都には関西呪術協会と呼ばれる組織あり学園長が理事を務める関東魔法協会と関西呪術協会は昔から仲が悪く今年は魔法先生であるネギ君がいる為関西呪術協会が京都入りに難色を示しているらしいとのことだ。

ネギ君は自分が原因なのかとまたショックを受けていたが学園長が特使として親書を西の長に渡して欲しいと聞くとすぐに決意の籠もった顔をした。

「わかりました、任せてください学園長先生……！」

「うむ、では、修学旅行は予定通り行おう、頼んだぞネギ君」

「はい……！」

エヴァとの戦いで少しは成長したのか中々いい顔をするようになった。

そんなネギ君の成長を見ていると学園長が私に視線を送ってきた。

「ああ、それとエミヤ君には話があるので残ってくれんかのう」

「わかった」

まあ、こうなる事は大体予想は出来ていた。

親書の件だけならば、わざわざ私を呼ぶ必要は無い。

ネギ君が学園長室を出たのを確認すると、学園長が口を開く。

「さて、エミヤ君にはネギ君のサポートをしてもらいたいんじゃないが、問題なのは親書の事だけではなくてのう、実は・・・」

「このかの事だろう？」

「！？・・・さすが鋭いのう、その通りじゃ、エミヤ君も気付いているじやろうが、あの子の魔力はとてつもなく大きい、西の中にその魔力を利用しようとする者があるかもしれん。あの子にはできるだけこちら側のことを知らずに普通の生活をしてもらいたいんじゃない。今は刹那君を護衛としてついておるのだが彼女一人では対処できん事態があるかもしれん。じゃからこのかの事を刹那君と協力して護衛してほしいんじゃない」

学園長は本当にこのかの事を心配しているようだな、恐らく学園長がよくお見合いを薦めるのもこのかの為と思つての行動だろう。

「了解した、このかの事は私に任せるといい」

私はこのかの笑顔を守りたい、彼女の笑顔を見ていると遠い日に失った想いが蘇ってくる。

彼女に危機が迫るというなら私は全力で守って見せようと心に決め

た。

「では、頼んだぞ、エミヤ君」

一礼してそのまま学園長室を出ようとした時、

「そうじゃ、ものは相談なんじゃが」

「なにかね？」

「このかを嫁に・・・」

・ボタン・

有無を言わずに扉を閉める、先程までに感じた学園長の威厳が崩れた瞬間だった。

放課後。私は今林の中にひっそりと建っているログハウスの前にいる。

そう、エヴァの家である。

（いよいよか、鬼が出るか蛇が出るか・・・嘘が通じる相手ではあるまい、やはり交渉に持ち込むしかないだろう、幸い取引ならこちらに分があるが、しかし出来ればアレは使いたくないものだ）

取引材料である破戒すべき全ての符の能力はエヴァにとっては喉から手が出る程魅力的だろう、だが一步間違えばエヴァから狙われる立場になるのだ。

（覚悟を決めるか・・・いざ!!!）

扉の鐘を鳴らす。

しばらくすると扉が開き何故かメイド服を着た茶々丸が現れた。

「お待ちしてました、エミヤ先生、マスターがお待ちですので奥へどうぞ」

「ああ、失礼するよ」

私は茶々丸の後に続き奥へと進むと部屋の至る所に可愛らしい人形が置いてあるのが見えた。

見た目は確かに女の子の部屋の部屋と言う感じだが、六百歳の年齢を考えると少しファンシー過ぎるとも言える。

まあ似合っているので気にしないでおう、エヴァにばれたら張り倒されるであろう感想を胸に秘めながら階段を登るとベッドに座るエヴァの姿を確認した。

「よく来たなシロウ、なんだ手土産の一つもないとは気の回らん奴だ」

「そういうな、代わりお茶は私が淹れよう、すまないがキッチンを借りてもいいかね？」

「貴様に淹れられるのか？とてもそうは見えんが」

「まあ家事は私の趣味のようなものでね、それなりに自信はある」

エヴァは不可解そうな表情でこちらを見ていたが、しばらくして

「いいだろう、お手並み拝見といこうじゃなか、茶々丸案内してやれ」

「わかりました、マスター。では、エミヤ先生こちらです」

階段を降りてキッチンに案内される。

棚を開けると日本茶、紅茶、コーヒーなどの様々な茶葉が陳列していた。

（ここは飲みやすい紅茶にするか）

棚からディンブラの茶葉を取り出す、ディンブラはバラの香りに似たやわらかい華やかな花の香りと、渋味が感じられないまろやかなやさしい口当たりが特長のとても心地よい紅茶である。

私はポットに沸かしたお湯を入れカップを暖める、そして茶葉をポットに淹れ沸騰したお湯を注ぎ蓋をして二、三分蒸らしエヴァの所に持っていく。

「ほう、紅茶のゴールデンルールを知っているとはやるじゃないか」

私は苦笑しながらカップに紅茶を注ぐとエヴァへと差し出した。
エヴァは登り立つ香りを堪能してから口に含む。

「どうかな、舌に合えば嬉しいが」

目を閉じてゆっくりと反芻するエヴァを見て多少の不安を感じる。
しばらくするとその瞳がゆっくりと開かれて、

「……味も香りも申し分ない、久々にうまい紅茶が飲めたよ」

「ふう、喜んでもらえて嬉しいが心臓に悪いな」

エヴァはその言葉を聞いてクスクスと笑っている。
背後では主の顔を嬉しそうに見る茶々丸、そんな華やかな空気はお
茶が終わるまでしばらく続いた。

「で、話とは何だ」

エヴァの一声で現実に戻される。
そろそろ本題に入るとするか。

「単刀直入に言うと、君と交渉がしたい、私の秘密を教える代わりに君はこの世界の知識や情報を教えて欲しい」

「・・・随分一方的な交渉だな、こちらにはなんのメリットもないが一つだけ聞かせる、貴様は何者だ」

いつかの夜の質問を再び返された、あの時ははぐらかしたが交渉を始める以上隠してもしかたがない。

「そうだな、簡単に言ってしまうえば私は人間ではない、それ以上は交渉を受けるか否かで答えよう、もちろん君にも益のある話はこちらにもあるが如何かな？」

「等価交換と言う訳か、いいだろう交渉を受けてやる」

「感謝する、しかし即答とは流石は齡六百歳の真祖の吸血鬼だなやはり年の功と言うやつか？」

「誰が年寄りだ　　！！」

額に青筋を浮かべながら私の首をガクガクと揺らしている。
端から見れば兄弟がじゃれあっているようにも見える程この光景は微笑ましい。

しばらくするとエヴァも落ち着いたようで私は話を進めた。

「まず私の正体なのだが・・・」

そう言って自分の過去とこの世界に來た訳を静かに語り出した。

【Side エヴァ】

「魔術師に英霊、守護者か・・・」

話を聞いた時私は正直半信半疑だった、だが嘘だと断言もできない。そして何より驚いたのがシロウが異世界、いや平行世界からやって来たという事だ。

確かにそれならばこの世界の事が解らないのも頷けるしシロウが使う魔法も見えた事がないのも説明出来る、だがそれを証明する証拠もないのも事実だ。

私が最終的な判断を下すか悩んでいると。

「無理に信じろとは言わない、ただの取引と思ってくれればいい、君がこの世界の事を教える代わりにそれに合った対価を私が払う、これでどうかな？」

「そうだな、とりあえず貴様の取引材料を見てからでも遅くはない」

私とその言葉を言うとシロウはしかたないかと呟き、

「トレース・オン
投影開始」

始動キーらしき呪文を唱えるとシロウの手に歪んだ形状の短刀が現れる。

「何だ、その変なナイフは？」

「これは破戒すべき全ての符ルールブレイカーと言ってあらゆる魔力による強化、物体、契約で繋がった関係、魔力による生成物などを全て“作られる前”の状態に初期化する究極の対魔術宝具。つまりこれを使えば君

の無限登校地獄の呪いを解呪できる筈だ」

「な、何いいいいいい！！！！！！」

私を十五年も苦しめ続けた呪いが解呪されると、それが確かなら世界の情報など安いものだ。

そのままその短刀に飛び掛ろうとした直後、シロウの手から短刀が霧散した。

「ど、どこに消えた！？出せ、出さんか！！」

「落ち着けエヴァ、破戒すべき全ての符は私がいいと判断するまで
渡せん、それに私は情報を貰っていないこれは契約違反ではないか
な、やれやれこれでは等価交換ではなく一方的な強奪だなそれとも
この世界ではこれを等価交換と言うのかね？」

「ぬぐつ・・・」

痛いところを突かれて押し黙るしかなかった。

シロウは口を皮肉げに吊り上げて苦笑している、今更だがコイツはナギやアル並みに性格が悪いかもしれん。

「……安心したまえ、君の悔しがる顔を見たいだけで言つた冗談だよ」

「余計に性質たちが悪いわ

!!!

鋭い爪の攻撃を笑って躲すシロウ、その表情は何かを懐かしむような感じだ。

しばしツッコミの様な攻防が続くが封印された体では体力が保つ筈

も無く肩で息をする。

「さて、悪ふざけはここまでにして取引に入ろうかエヴァ、君が情報を教えてくれれば私も潔く破戒すべき全ての符を渡そう」
ルールブレイカー

「はぁ・・はぁ・・ふん、よからう私の知る全てを貴様に教えてやろう、なんならこの世界の魔法も教えてやる、これでどうだ!？」

「交渉成立だな、これは前払いだ受け取りたまえ」

「は？何を言って・・・」

言い終わる前にシロウは破戒すべき全ての符を私の胸に突き立てた。
ルールブレイカー

- パリン -

「!？」

ガラスの割れるような音と共に、あれほど苦勞しても解呪する事が出来なかった無限登校地獄の呪が解けた。

「マスター!!」

茶々丸が心配して駆け寄ってくる。

私は呪が解呪されて沸きあがる喜びを静かに反芻していたがすぐに快感が全身を駆け巡り私は喝采を上げていた。

「あははは、はははははははは

!」

だが、次の瞬間

「喜んでゐる所で悪いが無限登校地獄を解呪出来ても電力を使っている学園結界は解除できないから実質この学園では力を使えないかな」

「はは・・・は？」

しばらく啞然としていたが登校地獄に比べたら些細な事だと割り切る。

「構わんよあの呪が解呪出来ただけでも上出来だ！さあ、今夜は宴だー」

上機嫌で騒ぐ私を見てシロウは苦笑とは違う笑みを浮かべ。

「では料理は私が作るう、エヴァよ宴会の覚悟は十分か」

「はっ！面白いじゃないか期待しているぞシロウ」

キッチンに消えるシロウを見送り、しばらくすると豪勢な料理が運ばれくる。

そうして私とシロウと茶々丸の三人の宴はこうして始まったのだ。た。

波乱の修学旅行

修学旅行当日

教員は早目に集合するので始発に乗り九時前に大宮駅に着いたが3

- Aの生徒達はよほど楽しみなのか何人かもう来ていた。

「おはようございます、先生方」

「あら、おはようございます、エミヤ先生」

「ああ、来ましたか、エミヤ先生」

「おはよう、エミヤ君」

他の先生方が集まっている固まりを見つけたので、足早に近づき、朝の挨拶を交わした。

今回の修学旅行参加の教員は私を入れて五人で唯一の女性教員であるしずな先生、学園広域生活指導員の新田先生、教師の中でも比較的若い瀬流彦先生、そして魔法先生であるネギ君だ。

しばし先生方と今日の日程を確認していると大きく手を振りながらネギ君がやってきた。

「おはようございまーす！！ わー、みんな早ーい」

ネギ君はよほど楽しみなのか、朝からテンションが高い。

それから、しばらくして三年生が全員揃ったので新幹線へと乗り込む。

一班から五班はテンションが高く最後の班である六班だけが静かだ

った、理由は単純明快で班全員が物静かな者で占められているからだ。

メンバーは班長である刹那、まったく喋ろつとしない留学生のザジ、そして呪が解けて修学旅行に参加出来るようになったエヴァと茶々丸である。

なんでもエヴァは旅行が好きらしいと茶々丸が話していたので学園長に事情を話し私がお目付け役として同行することで特別に許可してもらった。

エヴァを見ると眠たそうに欠伸をしているが心なしか喜んでいうだ。

- こうして京都を舞台にした波瀾劇はゆっくりと幕を上げたのだった -

新幹線が発車してしばらくすると、修学旅行独特の開放感に3 - Aのテンションは上がり上がった。

私自身騒いで楽しむようなことは得意ではなかったたのでそのテンションにはついていけなかったた為休憩スペースに避難していると竹刀袋を担いだ刹那がやってきた。

「シロウ先生、お嬢様の事で少し話があるのですが」

「ああ、護衛の件だろう。学園長から聞いてるよ、何があってもこのかの事は護るから安心しろ」

「あ、はい、ありがとうございます」

「折角の修学旅行だ、気負いしないで刹那も楽しむといい。このかの護衛は刹那に任せるけど後ろには私がいる事を覚えておいてくれ、刹那に危険が迫れば必ず駆けつけるよ」

笑顔でそう言うと、刹那は顔を赤くして俯いた。

熱でもあるのか思い額に手を当てようとした時、3-Aのいる車両の方から甲高い悲鳴が聞こえ騒然とした空気が流れてきた。

「なんだ？」

「どうしたんでしょうか？」

様子を見ようと扉を開けた瞬間、親書を咥え高速で飛行してくる燕を視界に捕らえた。

後ろからは、慌てた様子でネギ君が燕を追いかけていた。

「あれは……式神です。斬ります、離れてください」

竹刀袋から夕凧と彫られた野太刀を取り出し燕の進路上に立ち塞がる。

そして燕が交差する一瞬、キンツ、と甲高い刃唸りが鳴り式神のみを切り裂いた、そして燕が咥えていた親書を私が床に落ちる前に掴む。

「待て っ!!」

親書を手にしてから数秒と経たずにオコジョを肩に乗せたネギ君が駆け込んできた。

そして視界に私と刹那を捕らえて呆然と立ち尽くしている。

「シロウさん!と、桜咲さん……?」

私と刹那の間で視線を彷徨わせているが私が手にしているものに目が留まった時、

「あ、ソレは僕の大切な親書!!あ、ありがとうございます助かりました!」

ネギ君は私の下へと駆け寄ると早速手紙を受け取って腕をばたばたと振ってはしゃいでいた。

十歳という年齢ならしかたないがもう少し緊張感を持った方がいい。その様子を見た私と刹那は隠れて溜息をついていた。

「それは先生のモノですか?気をつけた方がいいですね、先生特に……向こうに着いてからはね。……それでは」

「あ、どうもご親切に……」

刹那は忠告めいた言葉を残し、ネギ君と私に軽く会釈をして脇を通り過ぎた。

やれやれ、あんな言い方では色々と誤解されてしまうだろうに。

横目でネギ君を見ると案の定あのオコジョが二、三何かを言うとき驚いたように刹那がいなくなった先を困惑的な視線で見ている。

「さあ、我々も車両へ戻ろう」

「え、あ、はい、そうですね」

ネギ君は生返事で何かを考えながら歩き出した。

それからは3 - Aの車両は多少騒然としていたものの特に何事も無く京都へと進み、車内にまもなく京都に到着するというアナウンスが流れる。

私とネギ君は生徒達に降りる準備をするように促すと3 - Aのテンションはまたも上がり。

「では皆さんいざ京都へ！！」

『お
』

ネギ君が高々に宣言すると生徒達はそれに追随するように心を躍らせていた。

そんな生徒達を見てせめて修学旅行中は楽しく過ごせるよう頑張るとしよう、柄にも無くそんな事を思っていた。

それから行く先々で妨害が続いたがどれも子供の悪戯レベルだ。地主神社にある恋占いの石では、石に辿り着く途中に落とし穴が掘

られていて委員長の雪広と佐々木が被害に遭い、音羽の滝では縁結びに流れている水が酒に代わっていて、それを飲んだ十名の生徒が酔っ払ってしまい他の先生に見つからない内に、急いでバスの中に乗せるなど余りにも幼稚過ぎて相手は真面目に妨害する気があるのかと疑ってしまう程だ。

なんとか修学旅行の宿泊地であるホテル嵐山にたどり着くと酔っ払って寝てしまった生徒を部屋に運び、やっと一息つくことができた。その時、通路の先からしずな先生がやってくる。

「エミヤ先生、教員は早めにお風呂を済ませてくださいね」

「わざわざすみません、しずな先生」

「いえいえ、ネギ先生も今お風呂に入っていますから早く行ってあげてください、露天風呂ですから気持ちいいですよ」

「わかりました」

準備を整え露天風呂へと急ぐ、実を言うと生前は露天風呂に入る機会がまったくなかった為内心楽しみにしていた。心を躍らせながら男湯に入ろうとした瞬間。

「ひゃあああああ~~~~っ!」

隣の女湯からこのかの悲鳴が響き、即座に駆け出す。

「どつした、このか!」

脱衣所のドアを開けると、ぬいぐるみのような小猿が大学してこのかと明日菜の下着を剥ぎ取ろうとしていた。

そして向かい側には何故かネギ君と刹那がいた。

「あ、シロウ！？あゝん、見んといてゝゝゝっ」

下着を奪われたこのかが私に気付くと顔を赤くしながら目尻に涙を浮かべていた。

慌てて眼を逸らすと刹那の激情した声が響く。

「こ、この小猿ども……！！このかお嬢様に何をするか！？」

刹那は夕風を手に猿達に斬りかかるが……

「きゃっ、桜咲さん何やってんの！？その剣ホンモノ！？」

「ダメですよおサルさん切っちゃカワイそつですよゝゝゝっ」

ネギと明日菜に止められ、刹那は身動きが取れなくなっている。その間に小猿達はこのかを抱えて逃走を図ろうとしていた。

「何をしている、あの小猿は式神だ！！」

すかさず小猿達に向けて千鳥千本を放ち貫かれた小猿は紙に戻っていく、放り出されたこのかは素早く滑り込んだ刹那に抱きかかえられて傷一つない。

「せ、せつちゃん、なんかよーわからんけど助けてくれたん？……
・あ……ありがとうな」

「あ……いや……その……失礼しますっ！」

夕風を手にしたまま、このかを離してすぐに刹那は逃げ出した。

「あ……………」

逃げ出す刹那をこのかは淋しそうな顔で見ている、そこでこのかが何も着けていない事を思い出し

投影したタオルを明後日の方角を向きながら羽織らせる。

「このままだと風邪を引くぞ、風呂に入って体を暖めるといい」

「うん、ありがとうな、シロウ」

笑顔でお礼を言うこのかにネギ君と明日菜がこぞって刹那との関係を聞こうとしていたので私はロビーで話そうと提案して急いでその場を離れた。

その後、ロビーの片隅でこのかが刹那との関係を話し始めた。

なんでもこのかの実家は山奥にあって、近くには一緒に遊んでくれるような子供はおらず刹那とは子供の頃に出来た初めての友達で、よく遊んでいたらしい。

だが、このかが麻帆良に行く事になり一度離れ離れになってしまい、中学に上がり刹那が麻帆良にやってきたので、久しぶり遊べると思っただけなら避けられるようになっていたそうだ。

「何かウチ、悪いコトしたんかなあ……………せつちゃん昔みたく話してくれへんよーになってて……………」

話し終わるとこのかはポロポロと泣き出した、私は泣いているこのかに近付き頭を撫でながら目線を合わせる。

「大丈夫だよこのか。刹那は今でもこのかの事を大切な友達だと思ってるはずだ」

「ほんまに？」

「ああ、このかと距離を空けているのも昔と違って恥ずかしいからだろう、だからこのかが諦めずに話しかければ、そのうち前みたいに話せるようになるさ」

私の言葉でこのかを安心させられたのかは分からない。けれど、このかの涙は止まっていた。

「うん、ウチ頑張つてせつちゃんとまた仲よーなる！」

泣き止んだこのかは意気揚々と立ち上がる。

私は元気になったこのかを見て安堵のため息を吐く。

「このかならきつと仲良くなれるさ。さ、そろそろ就寝時間だから部屋に戻りなさい」

「うん！ありがとなシロウ。それとネギ君にアスナも」

二人は照れくさそうに笑いながらこのかを励ました。

そしてこのかは手を振りながら部屋へと戻っていった。

「じゃあ、僕は見回りをしながら皆さんに就寝時間を知らせに行きますね」

「私もネギと一緒に行くわ」

「では私は屋根で外の見張りをしておこう」

ネギたちと別れ外に出ようとロビーに向かうと脚立に乗って玄関に一枚一枚札を貼り付けている刹那を発見した。

背の低い刹那は脚立で背伸びをしていたが手が届かないのだろう、プルプルと小刻みに体を震わせながら、脚立の上に爪先立ちで片手を一生懸命に伸ばしている姿はなんとも可愛らしかった。

「何をしてるんだ、刹那？」

苦笑しながら尋ねる。

振り返った刹那は私の顔を見ると何故か慌てた様子で顔を赤くしていた。

「シ、シロウ先生！？こ、これは式神返しの結界です。これで、式だけを旅館内に飛ばしてくる、という事はできなくなります。シロウ先生は何を？」

「私は屋根から周囲の見張りをしようと思ってな、これから外に行くところだ。もし何かあったら携帯に連絡してくれ、私の携帯番号は知っているか？」

「はい、ですがすぐに連絡を取るなら、こちらの方が確実です」

懐から人型の札を取り出すと、ぽんつと刹那を模した式神が現れる。普段の刹那よりは表情豊かで、愛らしい。その式神がぺコリと礼儀正しく一礼した。

「ちびせつなです。よろしく願いします」

「ほう、便利だな」

「はい、何かあれば、式神を通じて連絡いたします」

「分かった。では行こうか、ちびせつなよ」

「ハイッ！」

ちびせつなど2人で屋根へ移動すると、何気なく空を見上げた。
夜の京都は満開の星空に包まれており、見る者を魅了していた。
そして月明かりが照らす中、旅館の屋根には一人の黒い弓兵が夜の
闇に眼を光らせていた。

守護者は運命と出会う

しばし旅館の周囲を鷹の眼を用いて警戒していると、突然ちびせつな驚いた叫びをあげた。

「――！本体から連絡です、このかお嬢様が連れ去られました！」

「何！すでにホテルに進入されていたのか、侵入者の姿は判るか！？」

ちびせつなの報告を受けてすぐに状況を確認する。

「いえ、まだ何も分かっていません。上からは何か見えませんか？」

鷹の眼で周囲を見渡すと渡月橋と書かれた橋の手前で大きな猿の着ぐるみが走っているのを見つけた。

後姿ではあったが、このからしき姿も確認できる。

「見つけた。渡月橋の方向に走っている。先行するぞ！」

足を強化しちびせつなを掴むと、一步の跳躍で旅館の敷地外へ着地すると全力で走った。

橋を越えた辺りで着ぐるみとの距離を十数メートル程まで縮めた。

「このかは返して貰うぞ！」

「はんっ！返せと言われて返すバカはいまへん！」

猿の着ぐるみが札を私に向けて放つと大量の式神（小猿）が現れ進

路を妨害してきた、一匹一匹は大した脅威ではないが無視するわけにもいかず結果押しつ押されつの膠着状態になっている、剣を投擲しようにもこの位置ではこのかを傷つけてしまう恐れがある。

（くそ、このままではジリ貧だ、せめてセイバーの様に一気に距離を詰めれば・・・）

そこでふと思いつく。

セイバーは膨大な魔力を集中させ瞬間的に放出する事でスピードや攻撃力などの能力を向上させていた。

あの華奢なセイバーがバーサーカーと渡り合えたのも魔力放出によるブーストのお陰だ。

以前の私はセイバーの様に膨大な魔力を持っていなかった為強化に頼らざるをえなかったが今は守護者の証から半永久的に魔力が供給されている、魔力放出も理論的には可能のはずだ。

（私に出来るのか・・・いや、迷っている時間はない。セイバー、見守っていてくれ！！）

自らの四肢に魔力を高圧で蓄積しそして一気に噴射した。

その瞬間、自分でも驚く程の超加速で着ぐるみの前に回り込んだ。

「な、あんさん瞬動術が使えたんか！？」

「瞬動術？」

恐らくこの世界で言う所の高速移動術の事だろう、程度の違いはあれどこの技法を使う者がいるとすれば気を付けねばなるまい。

それに魔力放出もセイバーに比べたらまだまだ甘い、セイバーの様に使いこなすには時間と修練が必要だろう。

だがこの魔力放出は様々の事に応用でき汎用性が極めて高い、だとしたらまだ改良の余地がある、今度エヴァに相談してみるか。

「さあ、ここまでだ。このかを返してもらおうか？」

「くっ！まだや、お札さんお札さん、ウチを逃がしておくれやす」

式神が札を取り出し投げつけると、

「喰らいなはれ！京都大文字焼き！」

札から圧倒的な熱量の炎が壁となって行く手を塞いだ。

「ちっ！」

「ホホホ、並の術者じゃその炎は超えられへん。ほな、さいなら」

炎の前で足止めをされた私を見て笑い声を上げながらこのかを担ぎなおし、悠々と背を向けここぞとばかりに逃げ出した。

それを見て須佐能呼^{スサノオ}を発現させ一気に突っ込もうかと考えていると、後ろからネギ君の詠唱が聞こえた。

「ラス・テル マ・スキル マギステル！吹け 一陣の風 風花・風塵乱舞！」

強烈な風が一陣の嵐となって炎を掻き消した。

「な、何や」

着ぐるみは突然の突風によって炎が掻き消された事に驚いて足を止

めていた。

後ろを振り返るとネギ君、明日菜、刹那の三人が合流してきた

「大丈夫ですかシロウさん！」

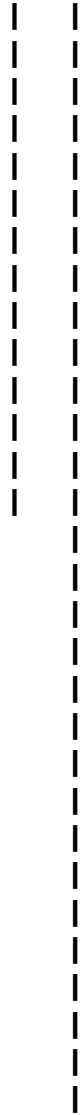
「ああ、心配はいらない。それよりこのかを追っぞ！」

「え、は、はい……！」

再び逃げ出した着ぐるみを見据えまた流星のように駆け出す。

しかし着ぐるみは駅へと逃げ込んでいた。

改札を飛び越えながら停まっている電車へと乗り込むと後を追うように私も電車に飛び込んだ。



【Side 刹那】

私は夜の街を走っていた。

傍らにはネギ先生と神楽坂さんの二人。

そして先頭には私達とは比べ物にならない速さで走るシロウ先生。ようやく誘拐犯の着ぐるみを視認できるまでに迫ったというのに、着ぐるみは駅に停めてある電車に乗り込むと、シロウ先生も同じく飛び込んだ。

「チッ、電車で逃げるつもりか。ネギ先生、神楽坂さん、シロウ先生に続きますよ！」

「うん、でもあのデカイザルは何！？ 着ぐるみなの？」

「恐らく関西呪術協会の呪符使いです。あの着ぐるみも式神の一種だと思われます、油断しないで下さい!」

駅に入り改札を飛び越えると突然、ホームの中にけたたましいベルの音が鳴り響いた。

「マズイ、電車が発車します!」

「おかしい、人が一人もいない・・・?」

「人払いの呪符ですネギ先生!急いで!」

電車のドアが閉まる直前に転がる勢いで車内に飛び込むと体勢を立て直しながら前の車両を睨む。

「ネギ先生、前の車両に追い詰めますよ!」

私は夕風を携えて走った、少し先には着ぐるみと対峙しているシロウ先生、しかしこのかお嬢様を盾にされて動きが止まっていた。

「貴様!このかお嬢様を返せ!」

「いかん、来るな!!」

追いついた途端シロウ先生が大きな声で叱咤する。

私は何が何だか解らず突然の怒声に驚いていると、ネギ先生と神楽坂さんが追いついてきた。

「フフ・・・ほな、三枚目のお札ちゃんいきますえ。お札さんお

札さん、ウチを逃がしておくれやす」

ひょっこりと現れた小猿の式神が一枚の呪符を私達に向かって放り投げた。

途端、放られた呪符から、堰を切ったように洪水が迸り、電車内を満たす程の水を瞬時に発生させた。

「くっ」

「わ　　っ!？」

「な、何よこの水!？」

流される私達をシロウ先生が抱き寄せた、しかし水に満たされた車内では息が続かず意識が朦朧とした時、私は見た。

水の中だと言うのにしっかりと前を見据える眼光と手にしている黒い弓、そして弓を引き絞り次の瞬間には何も番えていない弦に剣が現れ引き絞った指を離し剣を打ち出した。

剣は水中を魚雷の様に突き進みドアに命中すると盛大に爆発する。

水は破壊されたドアから全て流れ出される。

折りよく電車が次の駅に到着し、開かれたドアから流れ出る水流に乗って、吐き出される様にホームへと転がり出た。

「嫌がらせは諦めて大人しくお嬢様を返せ」

「ハアハア、なかなかやりますな。しかし、ここで諦めるんやったら初めから動かんというもの。このかお嬢様は返しまへんえ」

小猿に抱えさせていたお嬢様を再び自らの腕で抱え上げると、駅の出口へ駆け出した。

すかさずシロウ先生が追いかけて私もそれに追隨する。

「…………お嬢様！」

ギリツ、と歯を強く噛み締める。

相当に着ぐるみが水を吸っている筈なのに、それを感じさせないほどの軽やかさと速度で逃げている。

「せ、刹那さん！一体どういう事ですか！？」

「ただの嫌がらせじゃなかったの！？なんであのおサル、このか一人を誘拐しようとするのよ！！」

傍らを走るネギ先生と神楽坂さんが息を切らせながら聞いてくる。

「…………出来る事なら秘密にしておきたかったが、ここまで巻き込んでしまったては仕方ない。」

「じ、実は…………以前より関西呪術協会の中に、このかお嬢様を東の麻帆良学園へやってしまった事を快く思わぬ輩がいて……。恐らく、奴らはこのかお嬢様の力を利用して関西呪術協会を牛耳ろうとしているのではないかと…………」

「え…………？」

「な、何ですかそれ…………」

「！？」

二人が驚くのも無理は無い。

だが、これは事実だ。

それほどまでにお嬢様の魔力は桁違いなのだから。

「私も学園長も甘かったと言わざるを得ません。まさか修学旅行中に誘拐などという暴挙に及ぶとは……。しかし、元々関西呪術協会は裏の仕事も請け負う組織。このような強行手段に出る者がいてもおかしくはなかったのです」

途中で先程の駅と同じく人払いの呪符が貼り付けられた柱を見つけ、やはりお嬢様の誘拐は予め計画されていたものだと確信した。

「くっ……私がついていながら」

着ぐるみはどうやら京都駅の名物にもなっている大階段で雌雄を決するようだ。

大きな跳躍で改札を飛び越えると、階段の丁度中腹辺りで猿の着ぐるみを脱ぎ捨てた術者は私達と向き合った。

「フフ……よあここまで追って来れましたな。そやけどそれもここまでですえ」

「そうはいかん、行くぞ刹那!!」

「はい!!」

シロウ先生の掛け声に応え瞬動で術者へと詰め寄る。

見るとシロウ先生も瞬動らしき移動術で一気に詰め寄っていた。しかし術者の女は二枚の札を取り出し、こちらが攻撃しようとした時、札から盾になるように大きなサルとクマの式神を召喚した。

「くっ」「むっ」

警戒して攻撃を止めたシロウ先生に対し私は夕凧を振り下ろすがク

マの式神に受け止められる。

素早く後退してシロウ先生の隣りに移動する。

大きなヌイグルミのようなふざけた外見だがその実は式神、力は本物だろう。

そもそも、『善鬼』『護鬼』とは西洋魔術師でいうところの『従者』にあたる。

術者が呪を紡いでいる間の護衛として使役されているのだ。

「間抜けなのは見てくれだけです！ 気をつけてください、シロウ先生！」

「ホホホホ。ウチの『猿鬼』と『熊鬼』はなかなか強力ですえ！ 一生そいつらの相手でもしていなはれ！！」

術者はお嬢様を担いでこの場から撤退しようとしていた。

私が焦っていると傍らのシロウ先生が静かな声で、

「・・・刹那、そのクマの出来損ないの相手を頼む」

シロウ先生はゆらりとした動作で眼鏡を外した。

そういえば初めて合った時も眼鏡を外していた、何か理由があるのかと思ひ横目で見るとシロウ先生の眼が赤色が変わっているのに気が付いた。

比喩表現ではなく本当に色が変わっているのだ、それに文様のらしきモノも見える。

問いかけようと口を開こうとした瞬間、手が目にも止まらぬ速さで印のらしき結ぶとサル of 式神に突進していた。

するとシロウ先生の左手から雷のような電撃が迸り何処からともなくチツ、チツ、チツ、と鳥の鳴き声に似た音が聞こえた。

そしてサルの式神に詰め寄ると、

「千鳥！！！！！」

左手を突き出し電撃が式神を貫いていた。

貫かれた式神は電撃の余波を浴び全身を黒焦げにしながら消えていった。

「す、すごい……シロウ先生」

本当に何者なのだこの人は。

私とは比べ物にならない肉体能力と戦闘技術、豊富な経験による反応速度、見た事の無い武器や魔法、その全てが圧倒的だ。

しかし年相応と言われるとそれまでだが彼は何かが違う、例えるならエヴァンジェリンさんのように人間の枠組みを越えた存在に近い、そう感じられた。

だが、今は頼れる私達の先生だ、その大きな背中中は私達を護ると語っているようで恐れよりも安心感が伝わってくる。

シロウ先生は両手に白と黒の中華風の剣を携え、このかお嬢様を奪還する為に一息で術者の女へと接近し剣を振り上げる。

だが。

「え……い」

ノンビリとした口調と共にシロウ先生の前に人影が躍り出た。

そしてキィンという刃の接触音が響き、シロウ先生の攻撃は新たな敵に阻まれた。

（まさか、あの太刀筋は神鳴流！？マズイ、神鳴流の剣士が護衛についたのか！）

シロウ先生は力任せに相手を弾き飛ばすとやや後退した。

相手はゴロゴロ転がりながら土煙に隠れてしまった、私は土煙の先にいる敵を睨むが。

「あいたた。すみません、遅刻してしもて……どうもく
く神鳴流ですくくおはつにくく」

土煙が晴れて現れたのは緊張感を殺ぐ、とても神鳴流には見えない
服装の少女だった。

「え……お……お前が神鳴流剣士……？」

「はいくく月詠いますくく」

手には日本刀と小太刀の二刀を携えている、武器を選ばない神鳴流
だが、基本は野太刀だ。

少女の見た目も相まって、それは異質に見えた。

「こんなのが神鳴流とは……時代も変わったな……」

「フ……甘く見るとケガしますえ。ほなお兄さんの相手はよろしゅ
うたのんます、月詠はん」

「で、ではいきます。ひとつお手柔らかにくく」

ぺこりと会釈をして月詠が駆けた、シロウ先生は冷静に対処しながら
迎え撃った。

甲高い音を立てて両者の刃は火花を散らした、

「え〜〜い、やあ、たあ、とお〜〜」

「ふ はあ」

二刀同士の剣戟は熾烈を極めていた、二撃、三撃と繰り出される連撃を、手に持つ干将・莫耶で捌く。

金属同士がぶつかり合う音が幾重に重なって響き、無数に散る火花が夜の闇を照らす。

「お兄さんほんまにお強いですな〜〜ほな、これならどうや〜〜ざーんがーんけーん」

動きを見切り鋭く重い一撃を回避すると地面が切断された。

「これが神鳴流というものか・・・だがこちらも急いでいな、そろそろ決着を着けさせてもらう!!」

距離を取って干将・莫耶を投擲する。

月詠は干将・莫耶を難なく弾く。

「ほえ？武器を投げるなんてどういっつもりやえ〜〜」

「直に解るさ・・・」

再び干将・莫耶を投影し真横に放つ。

投擲された双剣は先程弾かれた双剣と互いに引き合うかのように集まり月詠を襲う。

「無駄ですくく神鳴流には飛び道具は効きまへんえくく」

白と黒の夫婦剣が飛び交い、月詠がこれを迎撃する。

四本の双剣は同時に回転しながら月詠に迫り。

そして。

「君はなかなか強いが、経験不足だな。何事にも油断は禁物だ・
・ブローケンファンタズム壊れた幻想!!!!」

瞬間、月詠に迫っていた夫婦剣がまとめて爆発する。

「きゃん！」

月詠は爆風の衝撃をマトモに受け派手に地面を転がっていき咳き込む。

「安心しろ、加減はしてある。暫くそこで大人しくしてもらおうか」

「けほ・・けほ・・いけずやなくお兄さん。けほ・・せめてお兄さんの名前教えてくまへんか？」

所々に火傷を負っているというのに、月詠は悦に入っているかのようにつつとりしている。

しかし眼は獲物を見つけた猛禽類のようだ、そう、あの眼は生粋の戦闘狂だったランサーに通ずるモノがある。

こういう輩は経験上何をしでかすか判らない、だから彼女には私という標的を持たせてやるのがいいだろう。

「エミヤシロウだ」

名を名乗ると、すぐに刹那たちの下へ向かう。
するとそこには、このかを盾にする呪符使いの女がいた。

「ホーホホホホ！まったくこの娘は役に立ちますなあ！この調子でこの後も利用させてもらうわ！」

このかの事を気遣って、積極的に攻撃する事が出来ない刹那達を見て勝ち誇ったかのように高笑いをする呪符使いの女。

「このかをどうするつもりなのよ……」

「せやなー、まずは呪薬と呪符でも使て口を利けんようにして、上手いことウチらの言うコト聞く操り人形にするのがえーな……くつくくくつ」

その言葉を聴いた瞬間、心に撃鉄が落ちる。
手には思考するより先に投影した陰剣^{いんけん}莫耶、それを顔の近くに放つ。
放たれた莫耶は顔を掠り、髪を数本切断しながら背後の壁に突き刺さる。

「ひっ！」

「そうか貴様は、このかを壊しても何とも思わないのか、ならば当然貴様が同じ目にあっても文句は無いんだろうな」

冷めた目で凄まじい殺気を発し、女を見据えると怯えたように後退する。

明日菜やネギ君は顔面を蒼白にして座り込んでいた、刹那でさえ身動きが出来ず固まっている。

私の頭には養子に出された家で無理やり蟲によって体を、精神を汚され、深く深く傷ついた後輩の姿が目に見えていた。
一歩、又一歩と殺気を強めながらゆっくり女に近付く。

「ち、近付いたらこのかお嬢様がどうなっても知りませんえ！」

必死にこのかを盾にするが、その行為は私の怒りを逆撫でする行為に過ぎない。

「やってみるがいい。だがその場合、貴様がこのかに何かをするより先に貴様を殺す、それで構わないなら遠慮せずにやるがいい」

一瞬で女の前に移動すると陽剣干将よっけかんしょうを振り上げる。

「ひっ・・・ひiiiiiiii！」

女は恐怖に歪んだ顔でそれを見上げた。

そして振り下ろそうとした瞬間、私の場所目掛けて全方位から石の槍が降ってきた。

「ちっ新手か！」

干将を投擲し爆発させ、空いた隙間から躍り出る。

「まさか君のようなイレギュラーがいるとは思わなかった、ここは退かせてもらっよ」

現れたのは、ネギ君と同じ年位の白髪の少年だった。
だが見た目とは裏腹に身に纏う異様な雰囲気は計り知れない力量を

秘めている。

そして白髪の少年は、呪符使いの女と月詠を連れ水の中へと消えていった。

「転移だと、それにあの少年は一体……いや、気のせいだろう」

あの少年を見た瞬間、胸の中にある守護者の証が騒いだような気がした。

とにかく今はこのかの事が先決だ。

「しっかりしろ、このか。大丈夫か」

倒れたままのこのかに駆け寄りその身体を抱き起こす。
後ろから動けるようになった刹那達が駆け寄ってくる。

男の私が介抱するより女性である刹那の方がいいと思いこのかを預ける。

「このかお嬢様！！ お嬢様しっかりしてください！！」

「ん……あれ？せつちゃん……？」

ゆつくりと開かれた瞳が段々と目の前にいる刹那に合って行くのを傍らで見守る。

するとこのかは、まるで夢でも見ていたかのようにボンヤリと語り始めた。

「あー……せつちゃん……ウチ、夢見たえ……。変なおサルにさらわれて……。でも、シロウやせつちゃん、ネギ君にアスナが助けてくれるんや」

「・・・よかった、もう大丈夫です。このかお嬢様・・・」

刹那が心底穏やかな表情を浮かべてこのかを見つめていた。その顔は慈愛に満ちていて本当にこのかを大事に想っているんだと確信させられるモノだった。

このかもその表情を間近で見えていたのだろう。まるで今まで凍っていたものが溶け出すように見る見る表情を緩ませる。

「よかった　　・・・せつちゃん・・・ウチのこと嫌ってる訳やなかったんやなー・・・」

嬉し涙を目の端に浮かべながら花が咲いたように微笑むこのかを見て、刹那の顔が見る見る赤くなった。

「えっ・・・そ、そりや私かてこのちゃんと話し・・・」

そこまで言って刹那は自分が何を言っているのか気が付いてはつとずる。

そして顔を蒼くさせながら慌てて一歩下がり、このかに頭を垂れて控えた。

「し、失礼しました！私はこのちゃ・・・お嬢様を守ればそれだけで幸せ、いや、それも陰からお支えできればそれで・・・あの

御免！！」

混乱した刹那は早口でしゃべり終わると、脱兎の如く逃げ出してしまった。

「あっ・・・せつちゃん」

このかは、しばらく名残惜しそうに刹那の走っていった方を見ていた。
そんな時、

「桜咲さん！！」

明日菜が声を張り上げて、刹那を呼んでいた。
見ると、刹那もその声に反応して足を止め、こちらを振り返っている。

「明日の班行動、一緒に奈良回ろうね 約束だよ ！！」

刹那はその言葉が意外だったのかポカン、とした表情で固まって、また慌てて駆けて行ってしまった。

「大丈夫だってこのか、安心しなよ」

「でも・・・」

まだ心配そうなのかに明日菜はほんと肩を叩いて安心させた。
このかはネギ君と明日菜にお礼を言いながら楽しく談笑している、その様子を見て私は静かに背を向け歩き出した。
問題は山積みだ、これからこのかは狙われ続けるだろうし、関西呪術協会も色々あるようだ、少なくとも修学旅行中は気を引き締めなくてはならない。

それに一番の懸念はあの少年だ、あの雰囲気から察するに相当の実力者だろう。

そして気掛かりなのは守護者の証が反応したと言う事だ、あの少年が世界を滅すのかそれともただ関係しているだけなのかは今の所解

らない、次に相見えた時に確かめるしかあるまい。

そんな事を考えていると後ろからシロウ、とこのかの呼ぶ声が聞こえたので振り返る。

「今日は助けてくれてありがとなー、それにシロウの言った通りせっちゃんウチの事嫌ってなかったみたいや、ほんまに嬉しいわ!」

飛び跳ねるように喜ぶこのかを見ていると頑張った甲斐があると言ふものだ。

「よかったな、このか」

頭を撫でながら笑うと、このかは顔を赤くしながら微笑んでいた。

こうして修学旅行一日目は幕を閉じたのだった。

楽しくも騒がしい一日（前書き）

更新が遅れてしまい申し訳御座いませんでした！！

積みゲーを消化していたらペースが乱れて遅くなってしまいました。もしかしたら今後も同じ事があるかもしれないのでご注意ください。ご迷惑をお掛けしますがこれからも宜しく願います。

楽しくも騒がしい一日

修学旅行二日目の朝。

生徒達は朝食の集合場所である広間に集まっていた。

「それでは麻帆良中の皆さん、いただきます」

『いただきまーす』

ネギ君の声と共にそれに習った大合唱が響く。

私も生徒たちの喧騒を眺めながらネギ君の隣に座り、一緒に朝食を食べ始める。

そこへこのかがお盆を持って現れた。

「ネギくん、ちょっと眠そうやな」

「

「あ、このかさん、おはようございます」

「このかか、おはよう」

「シロウもネギくんもタベはありがとな。何やよーわからんけど皆一緒にウチを助けてくれて」

朝の挨拶を交わすところのかは昨日のお礼を述べたので私は気にするな、と言っておく。

「い、いえ……僕はほとんどついていただけで……」

ネギ君は遠慮しがちに照れているが私の行く手を阻んだ炎を消してくれたので助かった事は事実だ、まだまだ頼りないがこれからの成長が楽しみではあるな。

そんな感想を抱きながら京都料理を食べていると。

「あ、せつちゃん」

少し離れた所に座っていた刹那を見つけてこのかが声をかけた。

声をかけられた刹那はびくつと震えたが、呼ばれた事が無かったかのようにそろそろとお盆を持ってゆつくりと離れていった。

「せつちゃん、何で逃げるん」

「刹那さん」

「わ、私は別に・・・」

刹那とこのかそしてネギ君の追いかけてこを眺めながら朝の食事を終えた。

朝食も食べ終わり、班別行動の打ち合わせする為にロビーではネギ君、明日菜、刹那の三人が集まっている。

まあ、打ち合わせと言っても、軽い確認だけだ。

「流石に昨日の今日だ襲撃される可能性は低いだろう。だが万が一

の事態を考えて刹那にはこのかと行動を共にしてもらいたい」

「私がお嬢様のお側で、ですか？」

刹那はなにやら言いたげな様子で私の顔を見ている。

このかを影ながら護りたい気持ちは判らない訳ではないが、いつまでも距離を空けていてはこのかが悲しむだろう、これは刹那がこのかとかつてのように仲良くなるいい機会だ。

「ああ、ネギ君には親書の件もある、いつも一緒と言う訳にもいかんしクラス全員にも気を配らなければならん、私は全体を見渡す為に少し離れた場所で監視するからどうしてもこのかの周囲が無防備になるんだ、だからこのかの事は刹那に任せるぞ」

ネギ君に目配りすると意図が判ったのかコクリと頷く。

「し、しかし私は六班でお嬢様は五班です班が違います！」

「なあに、担任と副担任権限で刹那を五班に入れるから安心しろ」

「……職権乱用ですね」

ムス、と私とネギ君を見ると刹那は観念して分かりましたと頷いた。その後行き先である奈良の予定を立てて打ち合わせは終了した。そして解散したネギ君はうーんと唸って考え込みながら佇んでいると。

「ネギくん！今日ウチの班と見学しよ　！」

「わ　っ！？」

「ちよつ、まき絵さん。ネギ先生はウチの3班と見学を！」

「あ、何よ　私が先に誘ったのに　っ」

今日も今日とて、ネギ君争奪戦が始まっていた。

そんな様子に嘆息しながらロビーを後にしようと背を向けた時、

「あ．．．あの、ネギ先生！！よ、よろしければ今日の自由行動・私達と一緒に回りませんか！？」

「え．．．み、宮崎さん？」

見るとクラスでもおとなしい宮崎が声を張り上げながらネギ君にアタックしていた。

その行動にネギ君を始め、争奪戦をしていたクラスメイトたちも驚いて呆然と宮崎を見た。

「え、えーと、あの．．．」

ネギ君は何かを考えた後、私に確認するように視線を向けた。恐らく五班に着いていつてもいいか確認したいのだろう。

私は苦笑して頷き返すとネギ君は宮崎へと向き直り、

「わかりました、宮崎さん！今日はばく、宮崎さんの五班と回る事にします！」

「え．．．」

周囲からおお～～、と歓声が沸き、宮崎は嬉しそうに顔を染めてい

る。

その微笑ましい光景を離れた場所で眺めていると。

「おい、なに呆けているんだシロウ」

足元から声が聞こえたので視線を下げるとエヴァが不機嫌そうにこちらを見ていた。

「エヴァか、修学旅行は満喫しているか？」

「は、冗談だろ。ガキ共と一緒にでは楽しめるものも楽しめん。今日の班別行動は私と茶々丸は別行動を取るからな」

確かにエヴァからしてみればようやく登校地獄の呪が解けたのだ、思う存分楽しみたい気持ちは理解できるが他の生徒の手前黙認する訳にもいかんな。

「まあそう言わずに班行動は守ってくれ、刹那を五班に入れたから六班は3人だけになるのな、ここでエヴァと茶々丸が抜けたら六班はザジだけになるんだ」

「何、どういう事だ・・・そうか、五班にはじじいの孫がいたな。お前がわざわざ刹那を移動させたという事はこの修学旅行には何かあるな」

私の行動に何か察したのかエヴァが訝しむような視線を投げつけてくる。

まあ魔法関係者であるエヴァになら話しても問題ないだろうと判断して親書の事や、このかの誘拐未遂について詳しく話した。

「……成程、それで昨日は騒がしかった訳か。なんとも迷惑な話だな」

「それで頼みなんだが今日は大人しく……」

「だが断る!!」

予想はしていたがここまで露骨に断られては苦笑いしか浮かんでこない。

そんな心境を知ってか知らずかエヴァはしてやったりと言った表情でニヤニヤ笑っている。

「忘れたか、私は悪い魔法使いだ。悪い魔法使いにモノを頼む時にはそれなりの代償が必要だぞ、そうだな　私の奈良観光に付き合え、それで勘弁してやる」

エヴァは近くにあった椅子に座り踏ん反り返りながら、私を見返している。

だが十歳の少女の姿では悲しい事に迫力不足は免れない。

「……それは班として行くも含まれているのかね」

「ああ、まあザジだけなら問題ないだろう。それでどうなんだ、受けるか断るのかハッキリしろ」

若干不貞腐れながらエヴァが睨んでくる。

まあ、これなら見方によつては少なくなった班の付き添いとも取れるので不自然ではない。

それにこのかには刹那達が付いているので大丈夫だろう。

「了解した、今日は君のお供をさせてもらうつよエヴァ」

仰々しく頭を垂れる光景はまるでお姫様と騎士のようである。

その後、エヴァ、茶々丸、ザジの三人と共に奈良公園で鹿と戯れたり、飛鳥寺の飛鳥大仏を眺めたり、薬師寺の東塔と西塔が一面鏡池に写るのか試してみたりと、楽しい時間を過ごして奈良観光を終えた。

エヴァも満足したのかご機嫌な様子で笑っている。

（いつもこんな表情なら外見相応で可愛いのだが、やはり偽悪的な性格が問題ありだな）

いつもの尊大な態度と外見相応に笑うエヴァのギャップにため息を着きながらホテルのロビーに向かうとネギ君が独り言を呟きながら身悶え床をごろごろと転がるという奇行を繰り返していた。
そんなネギ君の様子を3-Aの子達も心配そうに眺めていた。

「何があつたんだ？」

柱の影で同じく様子を伺っている明日菜と刹那に事情を聞こうと声を掛ける。

「あ、シロウ」「シロウ先生・・・」

明日菜は呆れ顔のため息を洩らし刹那は困った様に苦笑いしている。

「実はね、ネギのヤツ本屋ちゃんに告白されちゃったのよ」

「それはまた、返答に困る事態だな」

奇行の原因は、恐らく教師としての葛藤と男としての責任かの間で揺れているからだろう。

まだ子供であるネギ君には荷が重い選択だ。

そうこう思っている間に、いい加減見ていられ無くなったのだろう、雪広と佐々木の二人がネギ君を気遣って話しかけるが、ネギ君は「誰も僕に告ツたりなんか・・・」という墓穴を掘ってしまい、追及されそうになり慌てて逃げ出してしまった。

「うーん・・・大丈夫かしらねえ、あのガキンちょは」

「もう何もかも一杯一杯といった感じですね、ネギ先生」

「まあ、ネギ君にはいい経験になるか」

三者三様、思い思いの言葉を述べながら私は自分の部屋へと戻っていった。

夕食までまだ少し時間があるので昨日入れなかった露天風呂に入る事にした。

この時間帯は教師専用なのでゆっくり入れるだろう。
逸る心を抑えながら男湯に入ろうとした時。

「うわあああ
やりたいのに

ん、だめです
! !」

っ、僕・・・僕、先生

「なああ~~~~っ! ?」

突然の泣き声と共に女の子の奇妙な悲鳴が響く。

泣き声からしてネギ君だろうが音量が半端ではない、更に魔力の奔流も感じられる。

しかし戦闘ではないようだ、それに先程の声には聞き覚えがある、確か3 - Aの誰かだった筈だ。

そしてそれが意味する答えは一つ。

「また厄介ごとか! !」

私程ではないがネギ君の幸運ランクも相当低いのだろう。

ドアを開けて露天風呂に駆け付けると案の定裸のネギ君とクラスで突撃リポーターの異名を持つ朝倉がいた。

また厄介な相手に目を付けられたな。

ため息を吐きながら頭を抱えていると、ネギ君の悲鳴を聞きつけて雪広や佐々木達、最後に明日菜がやって来て、更に事態は混乱する。

「朝倉さん、調査を頼んだのに何ですのコレは っ! ?」

「裸同士でネギ君と何やってたのお 」

「ひい っ、お助け 」

「ちょっとネギ、何やってんのよ! !」

「あ、アスナさん」

阿鼻叫喚の中この惨状と先程感じた魔力の事を総合すると、どうやら朝倉に魔法使いの事がバレたのだろう。

「・・・とりあえず二人とも服を着ろ。それと後で話があるからロビーに来るように」

「は、はい・・・」

「あちゃー・・・」

私は頭を悩ませながら風呂場を後にする。

しかし彼は知らなかった、後ろでは力モと朝倉が怪しい会談している事に・・・

そして新たな騒動の種はこれから始まるという事を。

楽しくも騒がしい一日（後書き）

これからはなるべく前書きと後書きを載せるので応援の程をお願いします。

一人と二匹の夜の大作戦（前書き）

最近更新が遅れ気味で、申し訳ございませんでした。

所々にテンプレの箇所がありますが、暖かい目で見守って頂けたら嬉しいです。

もし不快感を感じた方がいましたら直ちに訂正致しますので、これからもご愛読をお願いします。

一人と二匹の夜の大作戦

一足先に明日菜達とロビーで待っていると、ネギ君がトボトボとやってきて。

「どうしよう・・・朝倉さんに魔法の事がバレちゃいました・・・」

どんよりとした空気を放ちながら静かに語った。

ネギ君の告白は大方の予想通り朝倉への魔法漏洩だったようだな。

「ええ～～～っ！？ま、魔法がバレた～～～！？しかも、あああの朝倉に～～～っ！？」

「は、はい・・・」

ネギ君はこの世の終わりとばかりに暗い顔をして落ち込んでいる。明日菜は魔法がバレた経緯を問い詰めているが、肝心のネギ君は半泣きで人助けやらネコ助けやらと言っていまいち要領を得ないでいる。

そして追い討ちを掛けるように明日菜が、

「もーダメね、アンタ世界中に正体バレてオコジョにされて強制送還だわ」

「そんな～～～っ！！一緒に弁護してくださいよアスナさん、刹那さん～～～！」

すがりつくネギ君を明日菜はやれやれとばかりに両手を上げている。

私はネギ君の肩に手を置くと、何処と無く悲しげな様子で。

「・・・短い付き合いだったが楽しかったよ。オコジヨになっても元気でな」

「うえ　　ん、見捨てないでくださいよ〜っ」

本気で泣きそうになるネギ君を宥めて、これからどうするか考えていると。

「お　い、ネギ先生　」「ここにいたか兄貴　」

悩みの種である朝倉がニコニコと手を振りながらやって来た、何故かネギ君の使い魔であるオコジヨのカモを肩に乗せて。

「うわっ、あ、朝倉さん!？」

驚いた顔で後ずさるネギ君に代わって明日菜が口を開いた。

「ちょっと朝倉、あんまり子供イジメんじゃないわよ」

「イジメ?何言ってるのよ。てゆーかあんたの方がガキ嫌いじゃなかったっけ?」

「そうそう、このブンの姉さんは俺らの味方なんだぜ」

「え・・・?味方?」

「報道部突撃班、朝倉和美。カモっちの熱意にほだされて・・・ネギ先生の秘密を守るエージェントとして協力していくことにした

よ、よろしくね」

「え……え……!? 本当ですか!？」

「今まで集めた証拠写真も返してあげる」

どれもネギ君が魔法を行使するシーンが写っている。

写真を受け取った途端、暗かった表情に希望の光が差し込みネギ君は小躍りするように喜んでいる。

明日菜も刹那もホッとした顔で安心しているようだ。

しかし対照的に私の中には疑問と不信が湧く。

(怪し過ぎる……何かを企んでいる可能性があるな)

彼女達の目にはなにやら作為の色が見える。

私がそんな事を考えていると、喜ぶネギ君をよそに朝倉が近付いてきた。

「そういえば、ここにいるってことはシロウ先生も魔法使いなの？」

「……まあ、そんな所だ。それよりも本当に何も企んでいないだろうな」

予想外の質問だったのか、明らかに狼狽していた。

「やだなー、何も企んでなんかいませんよ」

「そ、そうそう、気にしすぎですぜ!？」

鋭い眼光で朝倉とカモを見据えると、見るからに慌てた様子で取り

繕っている。

朝倉は何とか誤魔化せるレベルだが、カモは冷や汗をダラダラ流しながらそっぽを向いているのでバレバレだ。
私はカモを引つたくと殺気を籠めて問い詰める。

「本当だろうな・・・」

「も、もちろんですぜ・・・お、俺たちはこれでも気高きオコジヨ妖精の端くれ、嘘は言わねえさ!？」

恐怖で震えながらも頑なに口を割ろうとしないカモにため息を吐く
としかたなく朝倉の肩に戻す。
女子中学生には酷かもしれないが忠告だけはしておきたかった。

「いいか、朝倉にカモ。私は魔法が原因で生徒達に危険が及ぶ事が一番心配なんだ、どんな思惑であれ魔法に関われば狙われる事もある。その事をよく考えてくれ、それが魔法に携わる者の責任と覚悟だ」

言い終えると私はネギ君達の所に戻り今夜の警備について話し合う事にした。

【Side 朝倉】

夜も深まり就寝時間になった頃、3-Aの皆は修学旅行特有の開放感で元気一杯にはしゃいでいた。
枕投げや怪談、本屋ちゃんの祝勝会等で盛大に騒いでいると。

「コリア！3 - A！いいかげんにしなさい！！」

流石に騒がし過ぎたのか新田の怒声が響き外出禁止令が発令された、破った者は朝まで正座させられるらしい。

3 - Aのクラスメイトは口々に不満を垂れていた、そしてそんな所を見計らったように声を掛ける。

「くつくつく、怒られてやんの」

「あ、朝倉さん〜！？ムキ〜〜っ、今までどこに行っていましたの、ひきよー者ーっ！」

「まあまあ、私からみんなに提案があるのよ」

隠れて様子を伺っていた事でいいんちょはご立腹だが代わりに魅力的なゲームを提出した。

「名付けて『くちびる争奪！！修学旅行でネギ先生とラヴラヴキッス大作戦？』！！」

「ええ　　っ」

「ネギ君とキス　　ッ！？」

あまりにも意外なゲームにクラスメイト達がおおっとどよめき立っている。

「ルールは簡単！各班から二名ずつ選手を選んで、新田先生方の監視をくぐり旅館内のどこかにいるネギ先生の唇をGETすること！

！妨害可能！ただし武器は両手の枕のみ！！ネギ先生とキスできた人には豪華商品をプレゼント！！なお、新田先生に見つかったら他言無用で朝まで正座する事、以上！！」

ルールを説明し終わるとクラスの皆は怖いくらいに目の色を変えて騒いでいる。

いいんちよもクラス委員長として公認すると目を進らせながらOKを出した。

そんな時、予想外の声が響いた。

「なあなあ、対象はシロウでもええの」

恋愛とは無縁そうに見えるこのかの発言にクラスがしんと静まり返り。

そしてそれに追隨するかのように、

「それは私も聞きたいな、どうなんだ朝倉？」

なんとクラスでも比較的大人しい筈の龍宮真名がこの話に食いついてきた。

突然の事態に私はもちろん、クラスメイト全員が啞然としている。

「え、えゝゝ！！このかと真名ってエミヤ先生が好きなのゝゝゝゝゝゝゝゝ！！！！！！」

だが、沈黙は一際大きな声と共に破られた。

このかと真名はクラス全員から質問攻めにあっている。

それも当然だ、なにせ色恋沙汰には疎そうな二人が初めて反応したのだ、その事を取っても大事件だと言うのが分かる。

私は部屋の隅に移動して懐にいる力もつちと相談する。

「カモっち、どうするよ。シロウ先生だって」

「う　ん、旦那は生真面目過ぎて苦手だが、数は多いに越した事はないからな」

「じゃ、オツケーって事でいいね」

「おう」

話しは纏まったとばかりに振り返って私はOKを出した、再びクラスが沸きワイワイと騒がしくなってきた。
ふと真名を見ていると3・Aのバカレンジャーこと古菲と長瀬楓が興味を引かれるように尋ねているのが目に入った。

「真名がそこまで気にするとは、シロウ先生は何者アルか？」

「それは拙者も聞きたいでござる」

私も興味があつたのでそつと聞く耳を立てる。

「彼は麻帆良でも屈指の実力者だと思ふよ、一度狙撃の腕を見せてもらったけど私とは比べ物にならないな、それに刹那から聞いたんだが接近戦も刹那以上らしい。今麻帆良で一番敵に回したくない人なのは確かさ」

（確かにあの眼光を前にされたら誰だって敵に回したくないわな・・
・）

シロウ先生がカモっちに見せた眼光は私でも危険を感じた程だ、で

も生徒を心配してくれる優しい人だと言うのも分かっているつもりだ。

私が顎に手をあてながら悩んでいると、

「なんと！それは是非とも手合わせしてみたいアル」

「拙者も手合わせしたいでござるな」

なにやら物騒な話が展開されているのもう一人の当事者であるこのかに近づく事にした。

「ねえねえ、ぶっちゃけさ、このかってシロウ先生の事好きなの？」

このかと仲の良いハルナが目の色を変えて問い詰めていた。

”ラブ臭”なる臭いを感知できるらしいハルナは恋愛の事となると人が変わる所があるからね。

「ん よお分らんなあ。ウチ、他人の恋愛話聞くんは好きやけど、誰かを好きになるとか全然分らんからなあ。男の人と仲良おなったのもシロウが初めてやし」

このかは相変わらずぼやぼやした雰囲気で答えている。

しかしハルナは興奮した様子で捲くし立てていた。

「そんな事ないって！だってほら、このかってシロウ先生といえる時、すぐ楽しそうにしてるじゃない。ついにこのかにも春が来たのよ！！」

「そうです、シロウ先生はまだ3・Aの副担任になって日が浅いですがいい人だと思うですよ、このかが惹かれたのも判るです」

「わ、私もそう思います!？」

ハルナに同調するように夕映とのどかが身を乗り出していた。

同じ教師を想う事だけに応援したいのだろう。

恋話で盛り上がったクラスの声がどんどんヒートアップしていつている、流石にこれ以上騒がしくすると新田に見つかるので場を収拾する事する。

「ハイハイ、大声出すとまた新田がくるよ!それじゃあ十時半までに各班二人ずつ選手を選び私に報告。十一時からゲーム開始だ

!!!!!!」

「「「「「お

「「「「「っ

各班が誰に賭けるか盛り上がっている中、そつと部屋から出て自分の班のトイレに移動し懷から顔を出したカモっちと今夜の作戦について確認する。

「フッフ、ラブラブキッズ作戦とは仮の姿・・・その実体は・・・
・『仮契約カード大量GET大作戦』なのさ!!」

カモっちは何処に隠し持っていたのか三枚のタロットカードを取り出して私に見せる。

今の所仮契約が一枚、スカが二枚らしい。

「すでにこの旅館には魔方陣を描いてきたべ。これで旅館内で兄貴と旦那がチューしたら即パクティオー成立だぜ!!」

「そして今回は班&個人の連勝複式トトカルチョも実施するからね、

これで私も食券長者！もう、笑いが止まらないね～～！！」

外にまで響く笑い声はしばらく続き、そして欲望にまみれたゲームが始まるうとしていた。

――

屋根の上で見張りをしていた私は、今非常に困った状況に立たされていた。

事の発端は十一時を過ぎた頃、ネギ君が一人でパトロールに出かけた時に始まった。

最初は妙な気配が四方を囲むように現れ、続いて旅館内が騒がしくなり始めた。

そこまではまだいいのだがむしる問題はここからだった。

「アレは……あの二人は一体何をしてるんだ？」

何故か向かいの屋根の上を通って綾瀬と宮崎が非常階段へと向かっているのが見える。

首を捻りながら見守っていると背後から異様な気配を感じたので振り返ると、そこには古菲と長瀬が枕を持って立っていた。

「古菲に長瀬？二人ともこんな時間にどうした？」

「シロウ先生に一手、手合わせをお願いしたいアル」

「手合わせ、かね？」

手合わせという古菲の言葉に怪訝な顔をするが古菲は構わずに喋り

続ける。

「真名からシロウ先生は強いと聞いたアル。ワタシが勝ったら先生の唇をいただくネ、負けたら私の初キスをあげるアルヨ」

「……すまないが、状況が全く分からないのだが」

「問答無用ネ！では、征くアル！」

古菲はそう言うや否や数メートルの間合いを一瞬で詰め、踏み込みを入れての肘打ちや蹴り等の中国拳法を連続で叩き込んでくる。

古菲の功夫は既に常人の達人レベルを超えている程だ、とても14歳の少女とは思えない動きに感心しながらも冷静に対応する。

まず、繰り出される打撃を全て捌き、そこにワザと打ち込めるような隙を与えると、古菲は渾身の掌底放ったが、私は勢いを殺さずそのまま受け流し、古菲の体を合気道の要領でクルリと回転させ体勢を崩した所を狙い済まし素早くデコピンを一閃させた。

古菲は何とか受身を取ったものの仰向けになって屋根に倒れこんだ。

「……いやー、本当に強いアル。ワタシの負けネ」

「すまないな。修学旅行の夜に騒ぎたい気持ちは分かるが、私も教師だからな、罰もかねてというやつだ」

「そんなコトないネ、シロウ先生の動きは見ていて凄くタメになったアル、今度また手合わせをお願いして欲しいネ！」

「わ、分かった。またそのうち暇があつたら付き合つてやる」

負けても嬉しそうに目を輝かせる古菲に微妙に引きつった笑顔で答

えると、もう一人の傍観者に視線を向ける。

「それで長瀬もかかってくるのか？」

「もちろんでござる」

糸目、というか開いているようには見えない目なのに、爛々と輝いているのはそういう訳か。

「はあ……いつでもいいぞ」

ため息を吐きつつ気のない声で開始を告げた瞬間、長瀬の姿がぶれ5人に分身した。

「まいる、でござる!!」

「分身……いや、影分身か!!」

この世界に忍がいる事に驚きつつ、記憶の中にある忍術に関する知識で対処法を思案するが、長瀬は先手必勝とばかりに詰め寄り4人の分身体で接近戦を挑んできた。

「すごいな、これで中学生とは将来が末恐ろしい限りだ。だが、運が悪かったな」

眼鏡を外し写輪眼の動体視力で4人の長瀬の動きを先読みして悉く躲す。

2人の分身体が陽動の為に突撃してきたので2人をいなすように後方に飛ばすが、後の2人が左右から挟み撃ちするように迫ってきた為、私は長瀬の腕を掴み回転するように放り投げる。

そして最後の本体が放り投げた隙を狙い瞬動術で一氣に眼前に迫り拳を打ち込むが、動きを先読みしていたので逆にカウンターデコピンを一閃させた。

古菲とは比較にならない程の勢いで倒れ込むがすぐに長瀬はケロリと立ち上がった。

「うーむ、シロウ殿には敵わないでござるな」

相変わらずの糸目でありながらもその表情は少し落ち込んでいるように見えた。

「そうでもないさ、もし初見ならばもう少し苦戦していた。ただ単に君以上の影分身使いと戦った事があるだけさ」

「なんと！是非その御仁とも手合わせしたいでござる、今は何処に？」

「……残念ながらもう会う事は出来ないだろう」

仮に出会ったとしても私は記憶を受け継いでいるだけで彼とは別の存在、精々遺言を伝える事ぐらいにしかならないだろう、その様子を察したのか長瀬は何も聞かなかった。遠い目をしながら空を見上げていると。

「さて、次はネギ坊主のトコへ行くアルよ」

「了解でござる」

屋根に置いてあった枕を再び携え2人は屋根から飛び降りる準備をしていた。

反省の色をまったく見せない2人にため息をつくとも奥襟を掴んで持ち上げた。

「な、何するアルカ!？」

「う、うぎゃっ!？」

猫の如く吊り上げられた2人はジタバタと抵抗しているが、

「さて、本来なら新田先生の下に連行するのだが君達にチャンスをあげよう」

顔は穏やかだが、発せられる怒気に2人は恐怖で縮こまっていた。

「な、何でもするでござるよ」

「そうアル!何でもするアルから・・・許してほしいネ!」

「そうか、だったら・・・この騒動の主犯を吐け。それで今回の件は大目に見よう。吐かずに朝まで正座か・・・吐いてチャンスを得るか、好きな方を選びたまえ。むろん、吐かなければ私の地獄の説教が待っているがどうするかね?」

冷や汗を顔一杯に流しながら2人は声を揃えて叫んだ。

「「朝倉でござる(ネ)!!!!!!!!!!」」

旅館のとある一室で1人の女性徒と、1匹のオコジヨが身支度を整えていた。

まるで、夜逃げでもするかのよう。

「大がかりだった割には情けねえ成果だが仕方ねえ！」

カモっちの手には本屋ちゃんの仮契約カードと5枚のスカカードがある。

「よっしゃ！ずらがるよカモっち！」

そう言つて、扉を開けた瞬間、私は何かにぶつかった。

「痛っ、もうなんなの・・・よ・・・」

鼻を押さえながら恐る恐る自分のぶつかった何かを見上げると、そこには・・・静かに怒りを込める、エミヤシロウと言う名の鬼が立っていた

「姉さん達者で！」

「置いてかないでよカモっち！」

窓から逃げようと私から離れていくカモっち。

しかしそれを許すほど今のシロウ先生は優しくなかった。

逃げるカモっちにどこからともなく現れた包丁がカモっちの周りを囲むように降り注いだ。

「カモ、お前は逃げることに許さん。それと朝食、どうやら私の話を理解していなかったようだ、其処の所をもう一度ゆっくり話し合

おう。何か弁解はあるか？」

滲み出る怒気と有無を言わさない鋭い視線を前にして、私は正直に謝るしかなかった。

「さて、次はカモだが。お前も何か弁解はあるか？」

「だ、旦那！俺達は兄貴の為を思つてこの作戦を実行したんだ！？まだ子供の兄貴がもしもの時の為に俺達は戦力を確保しようとぴぎやあああ！？」

包丁に囲まれた檻からやめてえええ、命だけは……、と更なる悲鳴が鳴り響いた。

カモっちの様子は窺い知れないが相当怖い目に遭っているのだろう。時折、イタチの肉は強張つてマズイとか、オコジョの肉はどうだろうな等のデンジャラスワードが聞こえてくるのは私の気のせいだね。

途切れる事のないカモっちの断末魔を聞きながら修学旅行ラヴラヴキッス大作戦は終了したのだった。

一人と二匹の夜の大作戦（後書き）

一応メインヒロインはこのかで、準ヒロインは刹那とエヴァを予定しています！！

基本原作を元に行っているので大まかなストーリーは変わりありませんが、面白くなるよう精一杯頑張りたいと思いますので応援してください、出来れば参考の為に感想を書いてくれると助かりますので是非お願い致します。

うたかたの夢、ささやかな夢（前書き）

今回はオリジナルが先行しすぎて設定などが矛盾しているかもしれないので、おかしい所があれば遠慮せずに言ってください、直ぐに修正します。

お手数をお掛けしますが、何卒宜しくお願いします！

うたかたの夢、ささやかな夢

修学旅行三日目。

小鳥が囀る気持ちのいい朝を迎えていると、軽いノックと共にネギ・明日菜・刹那の三人が私の部屋にやって来た。

なんでも昨日の報告と今日の予定を相談したいらしいので、遠慮なく部屋に上げたのだが屍同然に疲弊している朝倉を見て、ネギ君達が驚いた声を上げる。

「ど、どうしたんですか朝倉さん!？」

「あ、ネギくん……」

ぼーっとしているような、色の無い瞳を朝倉は見せる。

「シロウ先生には逆らっちゃダメだって事、よくわかったよ……」

「

カモの断末魔を思い出したのだろう、青い顔でガクガクと震えている。

「一体何をしたんですか、シロウさん!？」

朝倉のあまりの憔悴ぶりを心配したのかネギ君が問い詰めて来たのでありのままだを話した。

「朝倉には少し説教をしたただけだ。一切危害は加えてないから安心してくれ……。ただし、あの小動物は例外だがな」

私がテーブルに視線を送ると、三人も習って視線を向けた。
そして視線の先には、まな板の上で見るも無残な肉塊と化した力モ
の姿が横たわっていた。

ピクピクと痙攣していなければ死体に見えるかもしれない。

「力、カモくんっ!？」

慌てて駆け寄ったネギ君は力モを抱き起こすが、当の本人は放心状態のまま包丁がく包丁がく、とうわ言を呟いていた。

「これに懲りたら軽はずみな行動は控えるようにしろ朝倉。次にも
のような事があつたら……分かつているな？」

「サー！イエッサー！……!」

ニツコリと微笑むと朝倉は冷や汗を浮かべながら本職顔負けの敬礼
を返した。

そんな様子を見て明日菜と刹那は苦笑いを浮かべながらその光景を
見守っていた。

後にこの「朝倉説教トラウマ事件」は、明日菜を経由して3・Aの
生徒全員に伝えられ、朝倉の憔悴っぷりも相俟って生徒達にシロウ
先生を怒らせちゃダメだ、と言う共通の認識を新たにしていたのだった。

【Side 刹那】

大広間で朝食を食べ終えた私と明日菜さんは、ロビーの片隅にある休憩所に向かっていた。

そこにはこれからの予定を話し合う為にネギ先生を始めとした魔法関係者が一同に集まっている。

明日菜さんは朝倉さんとカモさんが昨日の件で一般人である宮崎さんを巻き込んだ事に怒っていたが、シロウ先生の説教が効いているのか再びガクガクと震え始めた二人を見て矛を収めた。

結局、優勝賞品の仮契約カードはシロウ先生も仕方ないということで宮崎さんに渡し、魔法の事も秘密にすると言う事で話はまとまった、そしてカモさんが仮契約カードの使い方を明日菜さんに説明し一通りの事項は終了したので、本題である今日の予定を話し合う事にする。

「僕としては今日のうちに関西呪術協会の本山に行つて親書を渡してきたと思つてます」

「確かにこれからの日程を考えると、もう今日しかないな。敵もそろそろ仕掛けてくる頃合だ、私と刹那はこのかの護衛を優先させる。親書を届けるのが二人だけになつてしまふが、いいか？」

「はい、僕は大丈夫ですけど・・・」

ちらり、と明日菜さんを盗み見て言いたい事は大体想像できた。

明日菜さんも気付いたのだろう、ネギ先生を締め上げながら力強い目でシロウ先生を見据えている。

シロウ先生は腕を組みながら悩んでいたが観念したようにため息をつくと、

「分かった、無茶だけはするなよ」

「うん！任せといて！！」

自信ありげに親指を立てる明日菜さんを見て少し心配になったのか、シロウ先生は再び何事か考え込んでいるとネギ先生が準備の為に部屋に戻っていった。

明日菜さんも自分の部屋に戻ろうと踵を返すと。

「・・・保険を懸けておくか。・・・トレース・オン投影開始」

呪文らしき言葉を呟くと一昨日の電車内と同じく虚空から何かを取り出した。

それは前とは違い剣ではなく赤い布だった。

物を取り出すのがシロウ先生の魔法なのだろうか？、西洋魔術師に詳しくない私では検討もつかない。

「あの、それは？」

シロウ先生が取り出したからには何か考えがあるのだろう、好奇心で聞いてみると。

「ん、ああ。これは男性にとって最悪な物だな。明日菜にも説明するから刹那も聞くといい」

何故か物悲しい目で遠くをみつめているシロウ先生の背中には哀愁を帯びていた。

首を傾げてその背中を見ていたが明日菜さんに声を掛けようとするのを見て慌てて話を聞く事にした。

「明日菜、ちょっといいか」

「どうしたの？」

「もしも君やネギ君が危険になった時の為に切り札を渡しておく、よく聞いてくれ」

「え！そんなのがあるの！？」

切り札と言う言葉に明日菜さんは目を輝かせている、子供のような反応にシロウ先生は苦笑しながら手に持っている赤い布を手渡した。

「いいか、これはマグダラの聖骸布と呼ばれる相手を拘束する事に特化した礼装だ。拘束したい相手に”我に触れぬ（ノリ・メ・タンゲレ）”と言つて放てば問答無用で能力や動きを束縛できる。ただし男性にしか効果がないうえ、相手が女性なら只の頑丈な布に過ぎないから使い所に気を付けろよ」

「う、何か難しそう。え、えーと……”我に触れぬ（ノリ・メ・タンゲレ）”！！」

言葉を紡いだ瞬間、赤い布が意思を持ったかのように蠢いて一番近くにいたシロウ先生に迫り拘束した。

「のわ　　っ！？」

赤い布に雁字搦めにされシロウ先生は動かなくなった。

あの、屈強なシロウ先生がいとも簡単に……確かに男性に対しては正に切り札となる存在だ。

関心しながら眺めていると慌てたようにシロウ先生が叫んでいる。

「いいから拘束を解いてくれ明日菜！自分の意思で解ける、と念じ

れば効果が切れる!!」

「う、うん……解ける!!」

すると、赤い布は何事もなかったように解けてシロウ先生を解放した。

拘束を解かれ、ふらふらと立ち上がると本当に困った顔で、

「やれやれ、ひどい目に遭ったな」

「ごめん、ごめん。ここまで凄いとは思わなくて」

あはは、と私と明日菜さんが笑い合っているのを見てシロウ先生も苦笑している。

そして不意に思った、私のような化け物が同年代の人や尊敬出来る人と一緒に、こんな笑い合いが出来た事がこの上なく嬉しくて心地よかったと。

初めての感覚に戸惑いながらも、もう少しこのままでいたい、と心からそう思ってしまった。

晴れ渡る空の下、京都の街を一つの集団が歩いていた。

その集団の名は3・A五班……女の子が六人に対し男は二人、更に言えばネギ君は子供にカウントされるのもつばらの注目は私一人に集まっている。

傍から見れば世の男たちが殺意の一つも抱きたくなる光景なのだが、当事者からすればとても甘受できる状況では無いからだ。

それと言つのも私の周りには、右側から早乙女ハルナが執拗にこのかとの関係を尋問して、左側で綾瀬がそれに追随し、その問いに興味があるのか本を抱えた宮崎が私の背中に隠れながら時折、私の顔を見ろという鉄壁のフォーメーションが完成しているのだ。

前方をこのかと刹那が歩き、ネギ君と明日菜はその少し前で申し訳なさそうな顔をしている。

何故このような事になったのかと問われれば私にも分からないと答えるしかない。

最初は刹那と事前に打ち合わせをして今日はこのかの傍を刹那が、周囲の警戒を私が担当する事になっていたのだが予想外の事態が起こった。

親書を渡す為にネギ君と合流する筈だった明日菜をこのか達五班が捕まえてしまい、なし崩しにネギ君と行動を共にしてしまったのだ。ここまでは別段大した問題ではなかったのだが、最大の誤算は先程の三人が私を取り囲むかのように質問攻めをしているので周囲の警戒に集中できないのだ。

かといって適当に話を合わせようにも内容が内容なだけに、答えを一步間違えばロリコン教師と呼ばれるのは目に見えている。

敵の襲撃が来ない事を祈りながら暫し歩いていると、天の助けか早乙女の興味が私から店先のゲームセンターに移った。

「ほら、あつちにゲーセンあるから記念に京都のプリクラ撮ろうよ。のどかもネギ先生と一緒に！ね？」

「あ、え・・・！？」

突然の展開に驚いている宮崎だが、早乙女が素早く宮崎の手を取りゲームセンターへと連れて行くと。

「あ、えーなー、それ？　せつちゃん、ウチらも撮ろー」

「あ、いえ、私は……」

このかも刹那の手を取り強引に連れて行こうとしていた。

刹那はいきなりの事に戸惑い気味だ。

私はようやく質問の嵐から解放された事に安堵の息を吐くが。

「さあ、シロウ先生も行くですよ。ゲームが終わったら質問の続きも聞きたいですから」

隣りにいる綾瀬に手を引かれ騒音が鳴り響くゲームセンターに連行される。

どうやら私の苦行はまだまだ続くらしい……

確かにゲームセンターと言つのは人目について相手も手が出しにくい。

位置的にも有利な為、私が言う事は今の所ないので見張りも兼ねて入口で佇んでいると。

ゲームセンターの扉が開くと同時に後ろから誰かが走って来て。

「わ！？」「む？」

ドン、とぶつかってしまい体格差の関係でぶつかった子を吹き飛ばしてしまった。

ぶつかった子は白いニット帽と学生服を着た十歳位の少年だった。

「大丈夫かね？」

座り込んでいる少年に手を差し出し引っぱり起こす。

少年は何やら訝しむような視線を向けるがすぐに何事もなかったかのように振舞った。

「ナハハ、すまんなでつかい兄ちゃん。ちょっと急いでてな」

「いや、こちらこそ済まなかった。中に居る連れを待っていてね、外で待ち惚けていたんだ」

「そら難儀やな、大変そうやけど頑張りいや」

少年は踵を返すと笑いながら駆け出して行った。

私は少年の背中に向けて、

「ああ、君も気をつけろよ。その耳から察するに君は関西呪術協会の者だろう？ 偵察は一向に構わんが、生徒達に手を出すようならそれ相応の覚悟をすることだ」

ピクリ、と少年の体が止まった。

そしてゆっくりと少年が振り返ると先程とは違う戦闘者特有のギラ

ギラした目付きで睨んでくる。

「兄ちゃん、何者や……」

「君の仲間から聞いていないのかな？このかの保護者兼3 - A 副担任のエミヤシロウだ」

「あんたがエミヤシロウか。俺の名は犬上小太郎、その気配からして只者やないな、次に会う時が楽しみや！」

「避けられる戦いは避ける主義なのでな、出来れば出会わない事を祈るよ」

「そら無理や、俺は強そうな奴と戦うのが一番好きでな。兄ちゃんが相手なら思いつきり楽しみめそうや、ほなな!!」

そう言うのと名前の通り犬のような身のこなしで往来の中を縫うように駆け姿を消した。

それから少ししてネギ君と明日菜が親書を届ける為にゲームセンターから出てきた。

「じゃ行ってくるわ、シロウも桜咲さんとこのかのこと頼むね」

「ああ、確かな事は言えないが向こうは必ず何かしらかの行動を起こすと思う、だから二人も気をつけてな」

「ハイッ!!」「行くわよ、ネギ!!」

駆け出す二人を見送ってこのか達の様子を見る為にゲームセンターに入る事にした。

・・・だが、彼は見逃していた。入れ違いに宮崎が抜け出したネギを追って行くのを・・・

一人の少年が、日差しの薄いビルとビルの間にある路地裏に駆け込んでいった。

その少年、犬上小太郎は路地裏で待機している今回の仕事仲間に先程の少年について報告していた。

「やっぱ名字スプリングフィールドやて」

それを聞いて着物を着崩した背の高い女性、天ヶ崎千草は面白くなさそうに鼻を鳴らした。

「フン、やはり・・・あのサウザンドマスターの息子やったか・・・それやったら相手にとって不足はないなあ」

自虐的な笑みを浮かべ借りは返したる、と自分に言い聞かすように呟いている。

そして白いドレスに身を包んだ少女、月詠はノンビリとした口調で。

「小太郎はん、シロウはんには会われましたか〜」

「ああ、エミヤシロウやる。ゲーセンの入口でお会たよ、それにしても何者なんやるなあ、あの兄ちゃんは、裏の世界でもエミヤシロウなんて名前は聞いた事ないで、もしかしたら偽名かもな。まあ、俺はあの兄ちゃんが何者だろうと戦えるならどうでもええか」

強者に出会えた喜びで犬上小太郎はワクワクしながら軽口を叩いているが。

エミヤシロウの名を聞いた途端、天ヶ崎千草は顔色を蒼白にして怯えだした。

彼女の脳裏にはエミヤシロウが放った殺気が恐怖と言う形で刷り込まれていた。

肩を抱いて震えを抑えるが震えは一向に収まらないようだ。

その様子を人形のような瞳で眺めていた白髪の少年、フェイト・アーウェルリンクスは無機質ながらも興味深そうに話に割り込んだ。

「犬上小太郎。彼の情報が少ないなら、迂闊に戦うのは止した方がいい。君も相手の力量ぐらいは分かるだろう？ 一人で行っても返り討ちに遭うだけさ」

「……なんや新入り、喧嘩売ってるんか」

せつかくの気分には水を差された為、犬上小太郎は敵意の籠もった視線でフェイトを睨んでいる。

一触即発の雰囲気がいばらく続くが、フェイトの無機質な表情に毒気を抜かれたのか、犬上小太郎は不機嫌そうに顔を逸らした。

「とにかく、今は仕事に集中しよう、僕達の目的は親書を渡させない事と近衛木乃香を奪う事だ。君と千草さんは予定通り親書を持つネギ・スプリングフィールドを待ち伏せしてくれ、君の實力なら十分彼を倒せる筈だ。……頼んだよ」

「　　ちっ！しゃあないな、あの兄ちゃんは譲ったるわ。行くで千草の姉ちゃん！！」

「アンタに言われんでも分かつとるわ！！」

走り去る二人を見送り路地裏に残ったのは月詠とフェイトのみとなつた。

二人はしばし黙ったまま佇んでいたが相変わらずの口調で月詠が尋ねた。

「ところで・・・フェイトはんは刹那センパイとシロウはん、どちらの相手をするんです・・・ウチとしては個人的にシロウはんがええですんけど・・・？」

「・・・いや、エミヤシロウの相手は僕がする。恐らく彼の實力はこの世界でも最強の部類に入るだろう対抗できるのは僕くらいだ、君は神鳴流の剣士を頼む」

「わかりました・・・シロウはんはんと死合えへんのは残念やけど刹那センパイと死合うのも面白そうですね・・・ウチを満足させてくださいねセンパイ？」

頬を染めながらウツトリする様子はまるで愛しい恋人に会いに行くかのようなだ。

二本の刀と暗器の棒手裏剣を抱えて路地裏を出ると月詠は屋根伝いを跳ぶように移動して行つた。

そして最後の一人となったフェイト・アーウェルックスは顎に手を当て考えるように呟いていた。

「エミヤシロウか．．．魔法世界でも聞いた事のない名だ。だが、あの強さと妙な魔法．．．放って置けば僕の計画の脅威となるだろう。確実に排除しなくては．．．」

フェイト・アーウェルンクスは路地裏に水溜りを作りそのまま水面に乗ると、溶けるように沈んで行き少年の姿は路地裏から消えた。

うたかたの夢、ささやかな夢（後書き）

オリジナルって難しいですね、今回はテンプレを少なくして自己流の展開を書いたので駄文と言われても仕方が無いです。

お手数ですが皆さんの反応次第で良いか悪いかを判断出来るのは是非ご意見をお願いします！！

京都の戦いinnネギ（前書き）

はつきり言って今回はひどい出来です。

殆ど読む価値ないので無視して頂いて結構です。

これは前回のネタを繋げる為にネギ視点で書いた駄文なので、あまりにも酷いと感じられたら遠慮なく言ってください。

削除も検討しています、それでも大丈夫だと言う方は次を期待して待っていてください！！

京都の戦いinnネギ

【Side ネギ】

僕とアスナさんは関西呪術協会の長さんがいる本山に来ただけど、西の人の罠に嵌ってしまい基点を壊すか相手が解除するまで出られない無間方処という結界の中に閉じ込められてしまった。

僕達は闇雲に走り回って運良く無人の休憩所みたいところを見つけて休んでいると、僕がゲームセンターで会った男の子が大きな蜘蛛に乗って襲ってきた。

でも、契約執行したアスナさんの攻撃で大きな蜘蛛は紙になって消えていった。

僕が関心していると蜘蛛に乗っていた男の子が挑発するように、僕よりアスナさんがすごいって言ってきて女の子に守って恥ずかしくないのかとか、だから西洋魔術師がキライだとか好き勝手言うてるから流石の僕もカチンと来た。

でも、実際に戦ってみると、彼の言う通りアスナさんがいない僕は何の役にも立たなかった。

接近戦に持ち込まれ繰り出される連打を障壁で何とか防ぐが、彼の掬い上げるような掌底が障壁を破り僕の顎に直撃して僕の体は石段に叩き伏せられた。

「へへ、どや。障壁抜いたで。今のは効いたやろ」

「う……」

血を吐きながら純粹に思った、彼は強い、エヴァンジェリンさんと

は違う強さだ。

動きも速いし、力も強い、今のままじゃ勝つ事は無理だ……でも策はある。

それを実行する為にも必死になって立ち上がろうとするが、その様子を嘲笑うかのように。

「ハハハ、やつぱ西洋魔術師はアカンな、弱々や。このぶんやと、お前の親父のサウザンなんとかゆーのも大したことないんやろ、チビ助」

「!?!?.....」

その言葉を聞いて僕は彼に負けるわけにいかなくなった。

僕の事はまだいい、でも僕の父さんのことをバカにするのは許さない。

僕にとって父さんは強くて誰にも負けないヒーローなんだ、それを知りもしないのに大したことないなんて絶対に言わせない！
体を奮い立たせ相手を睨む、そんな時、カモ君の投げたペットボトルをちびせつなさんの術で水分を霧に変え目くらましとした。

「姐さん、兄貴を頼む」

カモ君の声が響くと、僕の体はアスナさんに抱きかかえられ、休憩所からそれ程離れてはいない小さな滝のある岩場に離脱して身を隠した。

そこで彼を倒す方法を考えていると、口に血が付いているのを見つけたアスナさんが怪我の手当てをしてくれた。

介護してくれるアスナさんを見て、不甲斐なさからつい父さんを探すために戦い方を勉強した事を口ずさんでいた。

「……アスナさん……僕はまだまだ未熟です。でも強くな
らなくちゃ父さんを探し続けることなんてできません……だか
ら、僕はここであいつに勝たなきゃ!!」

「ネギ……」

自分の目標と未熟さをアスナさんに告白して、僕にも踏ん切りがつ
いた。

勝算はある、後は賭けにでるしかない。

そう自分に言い聞かせていると、カモ君が不安そうに叫んでいる。

「で、でもよ、だからってどうやって奴に勝つんだ兄貴!？」

確かに現状では勝ち目はない、賭けが上手くいくかは五分五分だろ
う。

でも、父さんの名誉の為に僕は諦めない!!

「大丈夫だよカモ君。僕に勝算がある」

僕の……西洋魔術師の力を見せてやる!

容赦無く降り注ぐ拳の雨が、僕の意識が刈り取ろうとしている
全身を襲う激痛に負けそうになりながら、目だけは彼の動きしっか
りと捉える。

「勝ったで！！とどめ！！！」

僕を守っていた障壁は脆くなっている、後は大振りの一撃で倒せ
ると踏んだのだろう。

右拳を大きく振り被り、最大限に気を籠めた右ストレートが顔に肉
迫しようとしていた。

でも、僕はこれを待っていた！！

「契約執行0・5秒間、ネギ・スプリングフィールド！！」

自分に魔力を貸して身体能力を高める。

そして彼の必殺の一撃は、僕の左腕によって軌道を逸らされ空を切
った。

「な・・・！？」

彼は目を見開いて驚愕していた、しかしその一瞬が明暗を分けた。

「ゴッ」

魔力の籠もった拳を掬い上げる様に放ち、彼を宙に吹き飛ばす。

相手は何故自分が宙に浮かんでいるか理解できずに困惑している。

僕は彼の真下に素早く潜り込み呪文を唱えた。

「ラス・テル マ・スキル マギステル 闇夜切り裂く一条の光
我が手に宿りて敵を喰らえ」

そして掌を広げ背中から落下してくる彼を受け止めて、

「白き雷！-！」

ゼロ距離から白き雷を直撃させた。

迸る電撃を一身に浴び、彼は再び吹き飛び石畳の上を滑る様に転がって行った。

「ぐあ・・・が・・・」

彼は全身を襲う紫電によって身動きがとれず地面をもがいている。僕は彼の前まで近付くと高々に宣言する。

「どうだ！これが西洋魔術師^{ほく}の力だ！！」

苦しそうに呻いている彼を見据えていると。

「や、やったじゃないのネギ！！」

黒い犬に組み伏せられていたアスナさんが慌てて駆け寄ってきた。アスナさんは傷だらけの僕の顔を見ると呆れたように怪我を氣遣ってくれた。

痛いけど、これで終わったんだなって思うと不思議と笑顔がこぼれる。

「よおっしや！後はこっから脱出するだけだぜ！！」

「そ、そうですね！なんとか脱出方法を・・・」

足元で意気揚々とカモ君とちびせつなさんが脱出の手立てを探そう
した その時。

「ま……待てエえッ！ た……ただの人間にここまでやられた
のは初めてや……さつきのは……取り消すで……ネギ……
スプリングフィールド……だが……まだや、まだ終わらへんで
！！こっからが本番や、ネギ！！」

立ち上がるうとする彼の体がメキメキと音を立てて狼のシルエット
に変貌してゆく、その姿は正に狼男そのものだ。
膨張した筋肉と長く強靱な爪の一撃は僕達を簡単に葬れるだろう。
彼は僕達の前でそれを証明するかのように拳を振り下ろし、石畳を
粉々に粉碎する。

「いや ん、こんなの反則 ツ！！」

「くっ……仕方ない！」

ダメージはあるけど戦えない程じゃない、皆を守る為にも僕は覚悟
を決めて杖を構えた。

「契約執行10秒間！！ネギ・スプリングフィールド」

自身の体に魔力を覆い、獣と化した彼に向き合った。
しかし彼の動きは先程の比ではなく、目にも留まらない速さで視界
から消えた。

（速すぎる！ 右か左……どっちから！？）

直感で右から来る考えた瞬間。

「左です先生　　！！」

「！？」

僕は叫ばれた通り、左から来るかもしれない攻撃を避ける。すると、本当に左から攻撃が来た。

咄然としつともどこか聞き覚えのある声に振り返ると、そこにはゲームセンターで別れた筈のどかさんが立っていた。

「の……のどかさん！？どうしてここに……」

「えーとあの、それはその　　あっ！右です先生！！上！！み……右うしろ回し蹴りだそうです　　っ！」

僕はのどかさんの言う通りに動き、そして攻撃を避けることが出来た。

更に相手の攻撃の出所が分かるので、僕のパンチが面白いように当たる。

（もしかしてこれはのどかさんの……っ！？）

僕が安心した所為だろう、彼の顔にパンチを当てた瞬間、無理をした体に痛みが走り動きを止めてしまった。

そしてその決定的な隙を彼は見逃さなかった。

「やってもうたなネギ！動きが読まれるんはどういう理屈が知らんけどなあ、知ってても避けられへんかったら意味がないんやで！！」

彼は素早く体勢を立て直し、腕を振り下ろした。

鋭い爪が僕の体に迫るのをただ呆然と眺めていた瞬間……

「我に触れぬ（ノリ・メ・タンゲレ）」！！」

アスナさんの鋭い声が響くと共に彼の動きがピタリと止まった。恐る恐る目を凝らして見ると彼の体には赤い布が幾重にも絡まって動きを拘束していた。

「ふー、危機一髪って奴ね」

「ぐー？な、なんやこれは、体が全く動かん！！」

必死になって拘束から逃れようと目論みましたが、赤い布は破れる気配すらなかった。

どうやらあの赤い布には相手を拘束する魔法が掛けられているようだ。

そして気になったのは、何故そんな強力な魔法道具マジック・アイテムをアスナさんが持っていると言う事だ。

「アスナさん、それを一体何処で……」

「ああ、これはピンチになった時に使えてシロウがくれたのよ。私も詳しくは知らないけど、なんでも男なら問答無用で力も動きも拘束出来るんだって、本当シロウには感謝しなくちゃ！」

「シロウさんが？」

あの強力な魔法道具マジック・アイテムをシロウさんが持っていた事に驚きつつも、シロウさんのお陰で助かった事に感謝する。

しかし残った問題は此処をどう脱出するかだ、結界を解除する方法

は彼に聞くしかない、けど簡単に口を割ると思えず、打開策に頭を抱えていると。

「あ、あのっ・・・ネギ先生!!」

本を抱えたのどかさんが、突然大きな声で僕に言った。

「私ここから出る方法がわかるかもしれません!」

それは一筋の光明にも似た言葉だった。

「あ、あの小太郎くん。ここから出るにはどうすればいいんですか？」

赤い布に絡まれ未だ足掻く彼にのどかさんは絵日記を片手に質問を投げかけた。

「あ？アホか姉ちゃん、俺がそんなこと言うわけ・・・ハッ!？」

彼の視線がのどかさんの絵日記に向けられる、そして自分の攻撃が

彼女に読まれていた事に思い当たり慌てて思考を止めるが時は既に遅かった。

「わかりました。この広場から東へ6番目の鳥居の上と左右三箇所
の隠された印を壊せばいいそうです」

「ふおおおお!!?」

「すごい!!!本屋ちゃん」

カモ君とアスナさんは心底驚いた表情でのどかさんを見ている。
気持ちは僕も同じだけど、今はここから脱出するのが先決だ。
僕は6番目にある鳥居に隠された魔力の基点を見つけると、それを
壊すべく呪文を唱える。

「ラス・テル マ・スキル マギステル 光の精霊3柱 集い来た
りて敵を射て 魔法の射手 光の3矢!!!」

放たれた三つの光の矢は鳥居の基点を射抜いた。
すると無限に続いていた鳥居の先で光が毀れている。

「光って見えるのが空間の亀裂です。神楽坂さん!」

「任せて!!」

アスナさんは亀裂の光を確認すると、光に向かって突撃しハリセン
を袈裟懸けに振るった。

そして何かが割れる音と共に、光がガラスの様に砕け散り、結界は
消滅した。

「やった　　ッ、出れた！！」

「さあ、のどかさんも行きましょう」

不安にさせないように笑顔で手を差し出す。

のどかさんは顔を赤くしながら、後ろを振り返った。

「は、はい・・・小太郎くん、ごめんね　　」

のどかさんは小さく謝ると僕の手を取って駆け出し、僕達は無限に続いた鳥居から無事脱出する事が出来た。

その場を離れた僕達は状況を整理する為に川辺の岩肌に腰を落着ける事にした。

あまりにも予想外の出来事が続けて起きたからか、しばし無言となっていたけど、巻き込んでしまった一般人ののどかさんには事情を説明しないといけないので、僕はおずおずしながら口を開いた。

「えーと、その・・・バ・・・バレちゃいましたね。だまってすいません・・・秘密だったので・・・」

「いいえ・・・あの、前からうすうすは　　・・・」

「えっ！？そ、そうなんですか」

た、確かに色々魔法を使った所を見られてるし、朝倉さんの件もあるから魔法の事に気付いている人も中にはいるかもしれない。

どうしよう、このままじゃ僕はオコジヨに・・・

「でも・・・でもネギ先生があ・・・その・・・魔法使いなん

て……こんなので図書館の本の中だけの話だと思ってましたから……私……何だかドキドキしちゃって……」

「は、はあ……」

予想していた反応とは違っていたので少し面食らっていると、小声でアスナさんが話しかけて来た。

（ちょっとネギ、本屋ちゃんは巻き込まないんじゃないかなかったの）

（は、はい、でもここまで知られちゃったら……）

僕とアスナさんがボソボソと話していると、カモ君がのどかさんのアーティファクトを関心した様子で見ている。

「しかしこいつは使い方によっちゃ異常に強力なアイテムだ！いや強力なパートナーが仲間に入って良かったぜ！！」

「コラそのエロガモ！！勝手に話を進めるな」

「でもよ姐さん、こんな強力なアイテムを逃す手はないぜ！！」

「しつこいわね……いい加減にしないとシロウに言いつけるわよ」

シロウさんの名を聞いた途端、カモ君の体がビクンと跳ねてガタガタ震えだした。

「すみません。それだけは勘弁してください」

余程シロウさんが怖いのか、カモ君は頭を擦り付けながら土下座している。

僕はそんなカモ君を苦笑いしながら見ていると。

「とにかく先程のワナをくぐり抜けたので関西呪術協会の本山まではもうすぐだと思います。急ぎ親書をネギ先生！」

「そ、そうですね、ちびせつなさん！」

ちびせつなさんの言う通り、とにかく今は親書を届ける事を優先しなくちゃ。

「宮崎さんをここにおいていく訳にはいきませんから本山まで一緒に・・・あつ!？」

「ど、どうしたの!？」

突然ちびせつなさんの身体がかすれていく!？

「い、いけません。本体のほうで何かが・・・連絡が途だ・・・」

最後まで言い切ることなくちびせつなさんは紙に戻ってしまった。

「こ、こりゃ、マズい。刹那の姉さんのほうに何かあったな、それでちびせつなを使う余裕がなくなったんだ」

「・・・え~~~~っ!？」

皆の叫びが川辺に響き、僕はこのかさんを護ってくれる二人を信じるしかなかった。

刹那さん、シロウさん、このかさんを頼みます・・・

京都の戦いinnネギ（後書き）

皆さんに不快な思いを抱かせてしまい本当にすみませんでした、今後はこのような事にならないよう製作には気を付けます。

次は正月明けには投稿出来ると思われます、シロウの戦闘描写を予定しているので、どうか期待しててください。

それでは新年にお会いしましょう、お疲れ様でした！！

京都の戦いinnシロウ（前書き）

あけましておめでとうございます！！

新年に入って初めての更新です、昨年は大掃除や元旦の準備等であまり書くことが出来ず、結局今日まで掛かってしまいました。

二週間近くも待たせてしまい申し訳ございません、これからも段々更新速度が遅れて来ると思われますが、どうかこれからもご愛読を願います！！

京都の戦いinnシロウ

ネギ達が千本鳥居を脱出した丁度その頃、私と刹那はゲームを終えたこのか、早乙女、綾瀬の三人と一緒に観光を楽しむふりをしながらこのかの護衛をしていた。

一般人の往来する中では派手な真似は出来まいと踏んでいたのだが、先程から物陰に隠れながら追跡して来る気配がある。

間違いなく関西呪術協会の者だろう、するとそれを証明するように一本の棒手裏剣が刹那へと迫った。

私は刹那に届く前に棒手裏剣を掴み取る、刹那も気付いたようで険しい視線を背後に向けた。

一步間違えば一般人に死人が出てもおかしくないやり方だ、刹那はこのかの手を引いて走り出したのだが、それに気付いた早乙女と綾瀬が追いかけて来ていた。

「せ、せつちゃんどこ行くん？ 足速いよお」

「」

「ああつ！す、すみませんこのかお嬢様」

「な、なぜ……いきなり……マラソン大会に……？」

息を切らして私達に付いて来る綾瀬と早乙女を見て自分の油断を齒噛みする。

（まさか白昼堂々街中で襲ってくるとは。いや、強行派が人目を憚らず襲撃するのは十分予測できる事態だった、これは自分のミスだ）再度投擲される五本の棒手裏剣を流れる様に受け止めると刹那に視線を送る。

「・・・刹那、ここは私が引き受ける。君はこのかを連れて先に行け!!」

「分かりました・・・すみません！早乙女さん、綾瀬さん！わ、私このか・・・さんとふ、二人つきりになりたいんです。ここで別れましょう!!」

「え!？」

「お嬢様、失礼します!」

「ふえ？」

驚く二人を他所に刹那は素早くこのかを抱えて太秦シネマ村へと向かって行く。

ここはシネマ村で時間を稼ぎ、ネギ君達の帰還を待ち協力するのが一番の最善策だろう。

「すまん、早乙女に綾瀬。私も用事が出来た」

「え！ちょ、ちょっとシロウ先生」

踵を返して方向転換すると襲撃者の下へと跳ぶ。
投擲場所と殺気を含んだ気配の前に降り立つと。

「どうも！シロウはん、またお会いしましたな」

屋根の上には大方の予想通り月詠が微笑みながら立っていた。

「やはり貴様だったか、月詠……」

険しい顔とは対照的に月詠はくすつと笑う。

「はい月詠ですくでも残念ですく今日のシロウはんの相手はウチじゃないんで」

月詠は言うだけ言って、隠し持っていた煙り球を投げそれを爆発させ辺り一面を濃い煙が包み込んだ。

「ほなまたあとで」

「チツ、逃すか！」

逃走を図ろうとする月詠を追撃しようと駆け出した瞬間。

「!？」

月詠とは比べモノにならない殺気が突然背後に現れた。

振り返るとそこには二日前に遭遇したあの白髪の少年がいた。

「障壁突破”石の槍”」

背後で詠唱を終えたと同時に複数の石の槍が私の体目掛けて突き出される。

すぐさま身を捻り自分に放たれた石の槍を躲し、素早く取り出した草薙の剣に魔力を流し天叢雲剣で石の槍を横薙ぎに切り裂いた。
アマノムラクモノツルギ

「へえ、今のに反応するなんて驚きだね。流石は規格外のイレギュラー、益々君に興味が出てきたよエミヤシロウ」

「お褒めに預かり光栄と言った所かな。そう言う君もなかなかの使い手だ……名を聞いておこう」

人形に似た瞳を向けながら何か考える素振りをして、無表情のまま答えた。

「フェイト・アーウェルンクス。それ以上は君が知る必要はない」

胸騒ぎする守護者の証と子供とは思えない圧迫するような存在感や全てに無機質な雰囲気を見て確信した、この少年は世界の脅威となる存在だと。

草薙の剣を構え写輪眼で白髪少年を見据える、何か動きを見せれば即座に反応出来るよう全周囲を警戒する。

相手の力が未知数である以上、今後の為にも切り札である投影を見せるのは避けるべきだろう。

「やれやれ、どうやら君と私は戦う運命にあるようだな」

「？ 何を言って」

足に魔力を集中させ超加速で一気に詰め寄り、鋭く速い斬撃がフェイトの体を切り裂いた……

【Side 刹那】

お嬢様を連れてシネマ村に来たまでは良かったのだが、状況ははっ

きり言って不利と言うしかなかった。

最初の時はお嬢様が私の貸衣装を選んでくれたり、シネマ村に来ていた他の学校の修学旅行生にお嬢様と一緒に写真を撮ってもらったりと、今が危機的状況だと言う事を忘れてしまっただけお嬢様とのひとは本当に楽しかった。

こんな時間がいつまでも続けばいいと思っていたのも束の間、一台の馬車が私達の前に現れ西洋風の貸衣装に身を包んだ月詠が私に決闘を申し込んできた。

お互いにこの格好では周りの客も劇か何かと勘違いしているようなので衆人環視の中堂々とお嬢様を奪えると言う訳だ。

月詠は30分後に日本橋で待っていると言い残しドス黒い殺気を含んだ目を向けながら去って行った。

しかし本当の問題はここから始まった、なぜなら……

「ちょっと桜咲さんどーゆーことよー」

「今の心境は!？」

一部始終を見ていたいいんちゃんや早乙女さん達がもの凄い勢いで詰め寄って来たのだ。

「もー何でこんな重要なコト言ってくれなかったの」

「やっぱり告白したのは桜咲さんなの!？」

「でも手強いよー、なにせこのかにはシロウ先生がいるからね。そういえば桜咲さんとシロウ先生って最近仲いいよね。あ、もしかしてシロウ先生を巡って愛憎入り乱れた三角関係って奴!？キヤ?」

女子特有の恋愛に関する雨あられのような質問の嵐に戸惑っている内になにやらとんでもない方向に話が進んでいる。

「ちよちよ、ちよつと待ってください！皆さん何の話をしてるんですか！？」

私とお嬢様がシロウ先生を取り合うなど……でも、もしシロウ先生が私を選んでくれたら私は喜んで……って何を考えているんだ私は！！

そんな場面を想像したら顔が熱くなってしまい私は慌てて雑念を振り払う。

しかし私の予想を超える勢いで話はどんどん進んで行き、遂には。

「よし、『シロウ先生ハーレム化計画』を私達は全力で応援するよ　　！！」

「わああ！？皆さん何を言ってるんですか、違います　　っ！！」

「もお　　？照れなくてもいいよ桜咲さん。とにかく恋の行く手を阻むあのゴスロリ少女を何とかしないとね。よっしゃ野郎共助太刀だ　　っ！！」

「……お　　っ！！」

大きな勘違いをしたまま意気揚々と日本橋に向かう私達一行。

ここまで盛り上がったしまったテンションを止める手は私にはなかった……

三十分後、指定された日本橋まで来ると、橋の上では二振りの刀を携えた月詠が待っていた。
更に周囲にはここで何かすると聞きつけた人ばかりが周りを囲んでいる。

「ほな始めましょうかーセンパイ・・・？」

ふふふと笑う月詠に本能的な恐怖を感じ取ったお嬢様は私の背中に反射的にすがり付いた。

「せ、せっちゃん、あの人なんかこわい。き、気をつけて・・・」

「・・・ありがとう、このちゃん。」

その言葉を聞けただけで私は頑張れます。

私はお嬢様を心から安心させるような笑みを浮かべて振り返る。

「安心してください、このかお嬢様。何があっても私がお嬢様をお守りします」

「・・・せ、せっちゃん・・・」

お嬢様は先程の不安そうな顔ではなく嬉しそうな笑顔へと変わって

いった。

と、そこへいいんちよさんが涙を流しながら詰め寄り。

「桜咲さん！！お二人の友情！！大変感動いたしましたわ。このかさんを守る為にお力をお貸しします。さあ私達がお相手いたしますわ」

そう言うって先陣を切って高々と立ちはだかった。

しかし一般人であるいいんちよさんが私達の戦いに巻き込まれれば、確実に命を落とすだろう。

それを避ける為にも月詠にはちゃんと言い聞かせておかねば。

「待て月詠、この人達は・・・」

「ハイ、センパイ？心得てます〜この方達は私の可愛いペットがお相手します」

月詠は言うや否や無数の呪符をばら撒き。

「ひゃっきゃこお〜」

弾むような一声と共に、無数の呪符が可愛くデフォルメされた様々な式神に姿を変えていく。

流石の月詠もいんちよさん達のような一般人を私との勝負に巻き込むつもりはないらしい。

だがここは危険なのでお嬢様には安全な場所にいて欲しかった、唯一の救いは私の式神の札を使って気の跡をたどってきたネギ先生の式と合流することができた事だ。

シロウ先生が間に合わない以上、ネギ先生しかお嬢様を任せられない。

「ネギ先生！このかお嬢様を連れて安全な場所へ逃げてください」

「え・・・でも」

「見かけだけですネギ先生を等身大にします」

私はネギ先生にお嬢様を安全な所に逃げてもらうために見かけただがネギ先生の式を等身大にした。

「申し訳ありません、このかお嬢様をお願いします！！」

ネギ先生は頷くとお嬢様の手を引いて人ごみに入っていく、私からは見えなくなった。

「ふふ、これで思う存分死合えますな、ほな、いきますえ、センパイ」

月詠が二刀を構えて、駆けてくる。

私も迎え撃つ為に衣装についていた模造刀と夕風を抜き。

「京都神鳴流、桜咲 刹那。参る！！」

「ふふふ、にとーれんげき、ざんてつせーん？」

二つの銀交が閃き京都の空に死闘の合図が鳴り響いた。

- パシャッ -

横一閃に切り裂かれた瞬間、フェイトの体は水となって霧散し、その直後、背後の水溜りから現れたフェイトは手をかざし詠唱する。

「永久石・・・！？」

だが彼は最後まで詠唱を紡ぐ事が出来ずにいた、何故なら・・・

- バチチチチチ -

「流石だね、気配は完全に消したつもりだったんだけど」

「水を触媒にした幻影と転移、それ自体は見事だ。だがそれは同時に水に気を付けておけば行動の予測は可能と言う事だよ、私が背後の水に気付かないと思ったのかね？」

フェイトの胸は千鳥鋭槍によって刺し貫かれていた。

逆手に放たれた千鳥鋭槍は先端から何本もの刃を形成しフェイトの体を完全に串刺しにしている、しかし貫通された自分の傷口を無表情で眺めているフェイトを見て油断なく警戒する。

「まさかあの一瞬で幻影と転移に対応するとは、本当に人間かい」

「そう言う君は人間じゃないな、体を貫かれて顔色一つ変えない所をみると人工的に作られたホムンクルスかその体が君の本体ではないと言った所だろう」

「・・・そこまで見抜くなんて洞察力も大したものだね。やはり君は危険な存在のようだ」

そう呟くと千鳥鋭槍の影響など無いかのように左手を振り上げ。
そしてフェイトの手にバーサーカーの斧剣に酷似した岩の剣が現れた。

「何!？」

恐らく先程の石の槍を剣状にした物だろう、バーサーカーの斧剣に比べると大きさは劣るが、それでも一人一人を容易に殺せる代物だ。
千鳥鋭槍を放ったままの状態では動きが制限されるので術を解除し、距離を取る事にする。

しかし術の解除を狙っていたフェイトはその僅かな隙を見逃さなかった。

「ヴィシュ・タル リ・シュタル ヴァンゲイト 小さき王 八つ足の蜥蜴 邪眼の主よ その光 我が手に宿し 災いなる眼差しで射よ 石化の邪眼」

フェイトの指先が私を捉えた瞬間、指先から光線が発射され、光跡が体に迫ろうとした刹那。

「^{スサノオ}須佐能乎!!」

主を守るかの如く発現した^{スサノオ}須佐能乎によって光線は防がれ、エミヤシロウに届く事なく霧散した。

「それが君の能力かい？普通の魔法障壁とは大分違うようだけど所詮障壁に変わりな・・・」

「ゴッ」

「!!!?」

スサノオ
須佐能乎を只の魔法障壁と置いていたフェイトは須佐能乎の拳をまともに喰らい真横に弾き飛ばされた。

魔法使いが展開する魔法障壁が動く筈が無いと言っ盲点を突いたからこそ不意打ちだ、フェイトが体勢を立て直す前に勝負を決める！！

- スツ・・・ -

左眼を閉じてフェイトの落下位置を捉える。

そしてフェイトが屋根を滑りながら体勢を立て直した所を狙い血涙が流れる左眼を解放した。

「天照!!!」

ピントをフェイトの右腕合わせると、そこを始点に燃え盛る黒い炎が発火した。

「ぐっ!!!」

右腕が黒い炎に包まれた事でフェイトの顔に初めて焦りの表情が浮かんだ。

炎を消そうと自身の魔力で形成した水で消火を試みるが太陽の如き高温の前では為す術もなく水は水蒸気となって消えて行く。

「・・・成程、厄介な術だね。正直ここまでやるとは、君の实力は驚嘆に値するよ」

そう呟くと左手に持っていた岩の剣で自分の右腕を切り裂いた！
ポトリと音を立てて右腕が屋根に落ち、数秒と待たずに灰となって消滅した。

何の躊躇いもなく腕を切り落とし、痛がる素振りも見せない徹底振り、やはりホームンクルスか本体では無い線が強いな。

「流石に片腕で君の相手は出来ないからね、今回は退かせてもらう。次に会う時までに対策を練らせてもらうよ、エミヤシロウ」

フエイトはそう言い残し足元の水の中へと消えていった、そして残された水溜まりを複雑な気分で見つめる。

「・・・千鳥鋭槍と天照でも仕留めきれんとは。やはり奴を倒すには宝具の一撃で完全に消滅させるしかないか」

私は苦々しく呟いた、だが今しなければならぬ事はこのか達を危険から護る事だ。

月詠と呪符の女それにゲームセンターで会った犬上小太郎、最低三人の相手を刹那一人がしなければならぬのだ、刹那の腕は信用しているが数で不利な以上苦戦は避けられない筈だ、確か二人が駆け込んで行ったのはシネマ村だったな。

すぐさま足を強化してこのか達に追いつくために駆け出した。

【Side 木乃香】

最初突然始まった劇に付き合っつてせっちゃんと思っただけど、あの怖い目をした子を見た途端たまらなく不安になった。

ただどせつちゃんは笑顔でウチを守ってくれると言ってくれた、そして決闘が始まるといつの間にか現れたネギ君に連れられてお城に隠れていたんやけど、お城の中には着物を着崩した背の高い女の人がいてそれを見たネギ君は急いでウチをお城の天守まで非難させてくれたけど、そこでウチらは追い詰められてしもうた。

「聞・とるかお嬢様の護衛、桜咲刹那！この鬼の矢がピタリと二人を狙つとるのが見えるやろ！お嬢様の身を案じるなら、手は出さんときー！」

後ろから現れた映画に出てくるような怪物が弓矢でウチに狙いをつけているのを見て恐怖がこみ上げてきた。

「フフ・・ネギ言つたか坊や？一歩でも動いたら射たせてもらいますえ。さあ、おとなしくお嬢様を渡してもらおうか」

「ネ・・ネギ君、こ、これもCG？・・・とちゃうよね・・やっぱ」

ウチは正直言つて何が何だか分からなかった、女の人はずのウチの事を知っているようやけど、こちらは見覚えがない、お父様の知り合いなんやるか？

でもそんな雰囲気でもないようや、不安になつてネギ君の裾を掴むとネギ君は申し訳なさそうに謝っている。

俯いたネギ君を見てウチはせつちゃんの言葉を思い出した。

「・・ネギくん、大丈夫や」

「え・・」

「せつちゃん何があつても守る言つたんや、必ずせつちゃんが助けてくれるて」

「こ……このかさん」

「それにな、不思議と怖くないんや。ぼんやりとやけどせつちゃんやウチをどんな怖い事からも守ってくれる人がある、そんな気がするんや。だからきつと大丈夫!!」

ネギ君に向けて笑顔で答えた。

もしここに彼女の事をよく知る者がいれば、それは嬉しさとは違う笑みだと気付いただろう。

しかしここで無情にも天の悪戯にも似た一陣の突風が吹いた。

「ひゃ!?!」

「このかさんつ!!」

天守から落下してしまう程の強さでは無かったが、多少体勢が崩れてしまう。

つまり『動いて』しまったのだ。

・ヒュン・

それを敵対行動だと見なした鬼は矢尻を離し、風切り音と共に矢が放たれる。

「あ つ!?! 何で射つんや ツ。 お嬢様に死なれたら
困るやろ つ」

鋭利な矢がもの凄い速さで一直線に飛んでくるのをただ啞然と見ているしかなかった。

そこへウチを守る為に、ネギ君が身を挺して立ち塞がったけど、矢はネギ君の腕を煙のように貫通して行く。

（シロウ・・・せつちゃん・・・ウチ、死んでまうのかな。シロウのお陰でまたせつちゃんと仲よーなれたし、折角やからもっとシロウとお話したかったな）

流星の如く迫る矢を見て息を呑んだ瞬間。

- キーン -

ウチに迫った矢は寸前に滑り込んだ影によって防がれた。

恐る恐る目を凝らし目の前の影を見つめる。

その影は漆黒の外套をはためかせるとこちらに振り返った。

「無事でよかった。安心してくれこのか、君は必ず守るよ」

頭を撫でてくれる大きな手とウチに向けてくれた笑顔を見た途端、様々な思い奔放し涙が溢れた。

「シ・・・シロウ ツ！！！！！！」

ウチはわき目も振らずシロウに飛び付いた、お父様以外の男の人に抱き付いたのは初めてやけど不思議と悪い気はしなかった、むしろお父様に似た懐かしい感じがした。

その事をシロウに伝えるとシロウは困ったように苦笑したのだった。

京都の戦いinnシロウ（後書き）

今回はどうだったでしょうか？

前々回と同じくオリジナルを多く入れてみましたが、大丈夫でしたか？

やっぱり自己流で書く面白いかどうか不安になったりするので、もしよろしければ感想や指摘を書いてくれたら嬉しいです。

今後もオリジナルとテンプレを組み込んでいきますが頑張って皆さんが楽しめるような小説を作っていきたいと思います、どうかそれまで応援してください。

その気持ちは傳くて（前書き）

次回から前書きを書くのを止めます、理由は後書きに書いてあるので読んでください・・・・それでは・・・・

その気持ちは傳くて

「さあ、まだやるかね？」

嬉しそうに笑うこのかを降ろすと呪符使いの女に振り返る。
女は私の鋭い視線を見るとビクツ、と体を震わせた。

「ふ・ふん、あ・あんさん一人が加わった所で怖くも何とも・
・」

「ズガン」

「ひいいいいい！」

足元に先日と同じ陰剣莫耶いんけんばくやをめり込ませると、女は顔を蒼白にして怯えている。

「今のは警告だ、これ以上このかに関わるなら……覚悟してもらおう」

殺気を籠め、陽剣干将ようけんしやうを弓を構えた鬼に向かって投擲する。

放たれた干将は鬼の腹部に突き刺さり、続いて爆発した。

鬼の体が爆発した事で呪符使いの女は完全に戦意を失ったのか、自らの式神と共にその場を離脱した。

「シロウ……」

私の放った殺気を感じ、このかは少し怯えた様子で外套を掴んでいる。

気を静め、怖がらせないよう警戒を解いてこのかに向き合った。

「怖い思いをさせてすまなかった、このか。お詫びといったらなんだが今度私の料理をご馳走するよ」

苦笑とも取れる顔でこのかの頭を撫でると、このかは照れるように顔を赤くしていた。

私としては敵の襲撃がこれほど本格化してきた以上、このかの護衛は厳しくなるだろう。

フェイトのような例もあるし、全てをカバーするにも私一人では限界がある。

かと言ってネギ君達三人だけでは数が足りない、せめてネギ君や刹那と同等の実力者がいれば。

・・・と、なれば一人しかいるまい。

そう結論し、急いでこの場を離れようとこのかを連れて行こうとした時、

「お嬢様！！シロウ先生！！」

声が響くと同時に刹那が私達のいる天守まで跳んで来た。

ここに駆け付ける途中、橋の上で月詠と戦っているのが見えたが、どうやら無事だったようだ。

「せつちゃん！！」

このかは刹那の無事な姿を見ると涙を浮かべて抱き付き、刹那は一瞬驚いたような顔をしたがすぐに嬉しそうに照れている。

「無事でなによりだ、刹那。あれから月詠はどうした？」

「は、はい。シロウ先生が式神を倒すと同時に不利を悟ったのか、すぐにその場から撤退したようです。しかしあの様子ではまだお嬢様を諦めてはいないようでした」

「そうか、とにかくいつ敵の襲撃が再開されるか分からん。今の内にこのかを安全な場所へ連れていくぞ」

「ええ。さあ、お嬢様。急いで此处から離れ・・・」

このかの手を取って天守から離れようとした瞬間。

・ヒュン・

背後から矢が放たれ刹那の肩を貫いた。

「く・・・」

振り返ると先程爆破した筈の鬼が上半身だけをこちらに向け弓を構えていた。

（しまった、式神は気で出来た無生物、完全に消滅するのを確認すべきだった）

自分の油断に舌打ちしつつ、三本の短剣ダークを投影し鬼の頭部に投擲し爆発させ、鬼を完全に消滅させる。

しかし矢で貫かれた衝撃で刹那は足を踏み外し天守から落ちてしまった。

「刹那ッ！！！」

「せ……せつちゃ　ん！」

落下していく刹那に手を伸ばすがその手は虚しく空を掴んだ。

「くっ!!」

すかさず魔力放出で後を追おうと魔力を通そうとした時、私より先にこのかが躊躇なく刹那を追って飛び降りていた。

「なっ!?!このか!!」

空中で刹那を抱きとめた瞬間、二人は光に包まれた。

「この光の奔流は……このかの魔力か？」

巻き起こる発光は温かさを帯びており、このかと刹那を中心に魔力の風が吹き乱れて二人を空中に浮かばせている。

そしてこのかは刹那を抱えて何事もなかったかのようにゆっくりと地面へ着地していた。

すぐさま二人の後を追うべく空中に身を投げ出し、魔力放出による加速で一気に地上に降りた。

「このか!!刹那!!」

「あ、シロウ」

「シロウ先生。私もお嬢様も大丈夫です」

駆け寄って刹那の肩を見ると、矢による傷が跡形もなく消えている事に気付いた。

「傷が治っている……」

恐らくあの光はこのかの潜在的な治癒能力が刹那を助けたいという気持ちに反応して発現したものだろう。

刹那は何が起こったのか理解できずにいるのか、呆然とこのかを見上げていた。

「お嬢様……魔法チカラをお使いに？」

「ウ、ウチ今何やったん？夢中で……」

どうやら、このかは自分が魔法を使った事に気付いてないようだが無意識とはいえ力に目覚めてしまった以上、近い内にこのかは全てを話さなければなるまい。

私がこのかの事で思案していると、「刹那さん」と声を出してちびせつなと同じサイズのネギ君が飛んできた。

「敵の数も多い。ここは一度落ち合おうぜ！」

「そ……そうですね。シロウ先生もそれでいいですか？」

どうやらネギ君の様子を見る限りでは、まだ関西呪術協会の本山に親書を届けないようだ。

それにこのかの事もある、ここはこのかの実家である関西呪術協会と直接話をした方がいいだろう。

「そうだな。私も関西呪術協会に行く用事が出来た、そこで落ち合うでしょう」

刹那は私の言葉に頷くとこのかを抱き上げ、驚くこのかに行き先を告げた。

「お嬢様、今からお嬢様の御実家へ参りましょう。神楽坂さんと合流します！」

森の澄んだ空気と遠くから聞こえる川のせせらぎ、普段なら古風な雰囲気醸し出すであろう並木道もワイワイと歩く集団の前では儼く揺れるだけだった。

「で、何でもみんながついて来てるのか説明してもらえるかしら？」

ネギ君と合流し関西呪術協会へ向かう道すがら、こめかみを押さえた明日菜が説明を求めてきた。
私も頭を痛めつつ状況を説明する。

「いや、それがいつの間にか朝倉が刹那の鞆にGPS携帯を入られていてな。ここまで来た以上、西の襲撃者が見ていたら朝倉達を帰した所を襲われるかもしれん、それで仕方ないからこのまま連れて来てしまったんだ」

「すみません……私もまさかそこまでするとは思わなくて」

「んふふ？私から逃げようなんて百年早いよ」

朝倉はしてやったりと言った顔で笑っている、それを見た明日菜はここがどんなに危険かを怒りながら説教をしている。

そんな明日菜と朝倉を横目に私はネギ君に宮崎の事を聞く為に近付いた。

「ネギ君、君の式神から大体の事情も聞いた。君の怪我を見るに、止むを得ない状況であつたのも理解している。それで宮崎に魔法使いの事を話したのか？」

「……はい、簡単には説明しました」

「そうか……」

ネギ君の言葉に頷くと、こっちをちらちらと窺っていた宮崎へと振り向いて近寄っていった。

「宮崎、少しいいか？」

「な、なんでしょうか？エミヤ先生？」

話しかけてもオドオドと俯いて目を合わせようとしない宮崎を見て思い出した。

こうして話しかけたのは初めてだが、このかに聞いた限りでは宮崎は軽度の男性恐怖症らしい。

だとしたらこれ以上、近寄るのは可哀想だな。

怖がられないよう宮崎から二メートル程離れた所でギリギリ聞こえ

る音量で話す。

「宮崎、ネギ君から説明は聞いたか？」

「ネギ先生が魔法使いという話・・・ですか？あ、もしかしてエミヤ先生も？」

「ああ、私も関係者だ。偶然とはいえ魔法使いの世界に関わってしまったからには知ってしまった方、知られてしまった両方に危険が発生する事もある。この世界に入ったことを私はあまり良く思っていないが・・・心に決めた事を諦めろと言う資格は私にはない。でもここからは安全ではないという事だけは覚えていてくれ」

「は、はい、わかりました」

しっかりと私の目を見据える宮崎、その目は強い決意が籠もっている。

それ程の決意があるなら私は何も言わない。

「宮崎、君は私とネギ君の大事な生徒だ。だから困った事や助けが欲しい時は遠慮せずに言ってくれ必ず力になるよ。まあ、私よりもネギ君の方が魔法に詳しい、相談するならネギ君の方がいいかもしれないな」

苦笑しながら暫く歩いていると大きな門が見えてきた。

巨大な結界が張られている事から関西呪術協会の総本山であるのは間違いないだろう。

早乙女は門を見つけると、宮崎と綾瀬そしてこのかを連れて「レッツゴー！」と掛け声を出して門へと駆け込んでいった。

「あ　　ツちよつとみんな　。　そ、そこは敵の本拠地なのよ！？
何が出てくるか・・・！」

明日菜の静止も聞かず門をくぐった先には、式服を着た人たちがずらりと整列していた。
そして一同揃って頭を下げる。

『『『お帰りなさいませ、このかお嬢様

ッ
『『『

「「へ？」

敵の本拠地だと完全に思い込んでいた明日菜とネギ君は目を丸くしていた。

警戒していたのに逆に出迎えられてしまった為、ネギ君はそのままポカンと立っていると出迎えた女性達に囲まれて怪我を見てもらったりしている。

早乙女達もここがこのかの実家ということを知って驚いてる。

「さ、桜咲さん、これってどーゆー・・・」

「えーと、つまりその・・・ここは関西呪術協会の総本山であると同時にこのかお嬢様のご実家でもあるのです」

「ええ~~~~っ！？それ初耳よ、何で言ってくれなかったの

」

「す、すいませんっ・・・今御実家に近付くとお嬢様が危険だと思っていたのですが・・・シネマ村ではそれが裏目に出てしまっ
たようですね。御実家・・・総本山に入ってしまうば安全です」

「そ、そつか。ここがこのかの実家か　あ、もしかしてシロウもこの事知ってたの？」

「まあ、話程度なら学園長から聞いていたのですね。だからこそ朝倉達をここに連れてきたんだ、相手も総本山を敵に回すのは避けたいだろうしな」

明日菜とネギ君は深く考えているなーと感心していると、長が待っていますと声をかけられて揃って奥へと招かれた。

屋敷内に招かれて案内された場所へ足を進めると早乙女達は予想以上の歓迎ぶりにはてな顔を浮かべたが、ネギ君の秘密の任務という説明にほほうと頷いていた。

そしてネギ君達が座った正面の階段から式服の一人の男性が下りてくる。

「お待たせしました。ようこそ明日菜君、このかのクラスメイトの皆さん、担任のネギ先生、そして衛宮先生。私が関西呪術協会の長、近衛詠春です」

関西の長であると同時に、このかの父にあたる男は、疲れた笑顔で私達を出迎えた。

このかは久方ぶりに再会した父親と嬉しそうに抱きつき、明日菜は「渋くてステキかも・・・」と呟いている。

・・・明日菜の好みをとにかく言う気はないが、間違っても惚れるなよ、なにせ親友の父親なんだからな。

後ろで早乙女達一同が騒然とする中、ネギ君が頃合いを見計らって詠春の前に出て、そして手紙を差し出した。

「東の長、麻帆良学園学園長、近衛近右衛門から西の長への親書です。お受け取りください」

「確かに承りました、ネギ君」

詠春はネギ君が差し出した親書を受け取り軽く目を通した。親書の内容は解らないがどうやら苦笑しているようだ、暫くして顔をあげると温和な笑みで返答をした。

「……いいでしょう。東の長の意を汲み、私達も東西の仲違いの解消に尽力するとお伝えください。任務御苦労！！ネギ・スプリングフィールド君！！」

「あ……ハイ！！」

任務を無事終えた事でネギ君は顔を綻ばせ、明日菜達は歓声を上げる。

そのままテンションを上げていく一同に詠春が歓迎の宴を開いてくれた為、早乙女達のボルテージは最高潮に達し、大いに盛り上がっている。

あまり騒ぎ立てては迷惑かと思ったが、従者とはいえ普通の女子中学生である明日菜や戦いで疲れている刹那とネギの為に、ここは大目に見るか、それに詠春にはこのかの事を話さないといかんからな。

飲めや騒げやのドンチャン騒ぎの中、少し離れた場所でのこのかと刹那を懐かしい眼差しで見ているに詠春を見つけると声を掛ける。

「詠春殿、少し付き合ってもらっていいかな。このかの事で話があるのだが……」

「はは、詠春で構いませんよ。私も貴方に礼が言いたいですから」

お互いに笑い合つと話が聞こえぬよう通路の端に移動すると詠春が頭を下げた。

「話は刹那君から聞いています。このかと刹那君を守ってもらつて頂きありがとうございます」

「気にしないでくれ、二人とも私の大事な生徒でもある、それに子供を守るのは大人の仕事だ」

「それでも礼を言わせてください」

「いや、刹那から聞いてると思うが私にそんな資格はないさ。刹那も怪我が治癒したとはいえ矢がもう少しずれていたら即死だった、大人としても教師としても失格だよ」

実際このかの力がなければ最悪の事態になっていたかもしれない、その原因の一つは私の甘さだ。

（くつ、何が正義の味方だ、結果的にオレは刹那を救えなかった。これでは昔と変わらないな）

深いため息と共に虚ろな瞳を空に向けた。

その雰囲気になにかを察したのか詠春は何も聞かなかった。

「……詠春、このかの能力チカラの事だが。私としては全てを話すべきだと思う」

「それは……」

「このかに普通の女の子として生きて欲しい気持ちはよく分かる、

私も出来る事なら巻き込みたくない。だが、魔法に目覚めてしまった以上、敵もなりふり構わずこのかを奪いに来るだろう。辛いかもしれないがこのかを守る為だ」

「……そうですね。これ以上の押し付けは、親のエゴです。このかには刹那君を通してそれとなく伝えておきましょう」

「すまない、本来なら私が言うべきなのだが、そろそろホテルに戻らないといけなくてね。流石に担任、副担任がどちらもないとなればクラスが混乱するのでは、申し訳ないがネギ君達を頼みます」

「わかりました、この本山にいる限り、彼女達は安全です。安心してお任せください」

少し不安は残るものの、ネギ君に刹那、詠春に数十名の呪術師がいるここならばそう簡単に落ちる事はあるまいと自分を納得させ、帰る事にする。

「……では、これで失礼する」

「はい、これからもこのかと刹那君の事をよろしくお願いします。
衛宮先生」

「応えられるかどうかは解らないが善処するよ」

二人して苦笑いを浮かべ、私は門をくぐりホテルへと、詠春は屋敷の中へとそれぞれ戻って行った。

【Side 木乃香】

ハルナ達が騒いでいるの中、ウチは宴会場を抜け出してシロウを探していた。

でも、シロウの姿は見つからない。

（何処いったんやるか？今日の事聞こうと思ったのに・・・
それに助けてくれたお礼も）

今日の出来事は常識の理解を超えていた。

シネマ村で起きたお芝居とは思えない殺陣、天守閣でみた鬼のような怪獣、せつちゃんが矢に貫かれて屋根から落ちたのを無我夢中で助けた時自分から溢れた暖かい光。

どれも常識外れの事ばかりだった。

でもこれだけは判る、みんなウチを狙ろうとった。

そしてせつちゃんやシロウがウチの為に戦ってくれてたと言う事。

「せつちゃんとシロウがウチを守ってくれるのは嬉しい・・・せやけど、ウチの為に危ない目に逢うんやったらせめて狙われる理由を知りたい」

そう思ってシロウを探すけど見つからない。

仕方なく宴会場に戻るとお父様がせつちゃんとネギ君になにか話しているのを見つけた。

「お父様。シロウ知らへん？」

「ああ、衛宮先生なら少し前に帰ったよ。流石に先生が二人も居ないとクラスの子も困るだろうからね」

「そつか・・・帰ってもうたか・・・」

「お嬢様？シロウ先生になにか用事ですか？」

「あのな・・・今日の事聞こうと思って」

「そ、そうですか・・・あ、あのお嬢様、今夜お話したい事があるのですが」

せつちゃんが落ち着かないように言い出した、なんか動揺してるよ
うやけどなんやるか？
ネギ君も事の成り行きをじっと見つめている。

「うん、ええよ」

「あ、ありがとうございます」

顔を赤くしているせつちゃんを見て、ハルナと和美は「いよいよ告白か　ッ」と、騒ぎ立てている。

そう言われるとウチもちよっと恥ずかしいわ・・・

「ははは、人気者だなこのか」

「もう、お父様ったらー!!」

「このかもいい年だ、気になる男性の一人や二人ぐらい居るんじゃないかい？」

そう言われて心に浮んだのはウチの頭を撫でてくれたやさしい笑顔

のシロウ。

そうやな・・・一番はせつちゃんやけど男の人で一番は・・・

「うん、ウチ、やっぱシロウのコト好きや」

決して大きい声ではなかったがその言葉は全員の耳に入り反芻し。
瞬間、宴会場の喧騒は一瞬だが確かに停止したのだった。

その気持ちは傳くて（後書き）

最近何故かめつきりやる気が出なくなってしまう執筆が全然進みませんでした・・・季節はずれの五月病ですかね・・・そんな訳で内容が殆どテンプレ気味なってしまい申し訳御座いません。

そろそろ題材も底が尽きてきたので修学旅行編が終わったらほぼオリジナルに移行すると思われます・・・その場合、更に執筆速度が落ちるかもしれませんかどうか長い目で待っていてください。皆さんにお手数をお掛けして本当にすみませんでした。

貴方の言葉が嬉しくて・・・（前書き）

一ヶ月近く更新が遅れてしまい本当に申し訳御座いませんでした！！
相変わらずスランプ気味な上モチベーションの低下が著しく、一日
数行のペースでしか進まず、今日まで時間が掛かってしまいました。
内容も前回と同じテンプレが主流となっている為、つまらないと思
われる方もいるかもしれませんが、どうか最後まで見ていってください。
さい。

貴方の言葉が嬉しくて・・・

ホテルに戻った私は新田先生達にネギ君を含めた生徒数人がこのかの実家に外泊する事を説明し、問題がないよう事前に連絡しておいた学園長に許可を貰い、なんとか先生方を納得させる事が出来た。その後、ある人物と話す為にロビーで完全自由行動から帰ってきた生徒達を迎えていると、目的の人物が帰って来た。

「お帰り。京都は楽しめたか？」

「ふん、まあまあだな。お前の方は・・・どうやらその様子ではお楽しみだったようだな」

含みのある笑みを浮かべるエヴァにこちらも苦笑で返す。
お互い意地の悪さでは似た者同士なのかもしれないな。

「で、私に何か用か？貴様がわざわざ私を出迎えるからには何かあるんだろう」

「話が早くて助かる、実は折り入って頼みがあるんだが」

そう言うと襲撃が本格的になってきた事やこのかが魔法に目覚めた事を話す。

性格に多少の問題はあるが、やはりに魔法の事に関してはエヴァほど頼れる者はいないだろう。

「と、言う訳でこのか達の護衛にエヴァも協力してもらいたい」

「おい、前にも言った筈だぞ、私にモノを頼む時はそれなりの対価が必要だとな。それに何で私がガキ共のお守りをしなくちゃならん、それだけでもお断りだ」

「では君は私とネギ君に借りを返す気はないと？」

「は、何を言っている貴様とはこの世界の情報と魔法を教える事で問題無いだろう、ぼーやも貴様が手助けしたからこそ私に借りを作れたんだ、ぼーやに返す義理はない」

やはり一筋縄にはいかないか、ならばこちらも奥の手を出すとしよう。

トレース・オン
「投影開始」

投影するのはエヴァの呪いを破壊した破戒すべき全ての符、ルールブレイカーそれをこれ見よがしに見せる。

「ん、それは私の呪いを解いた短刀ではないか。なんだ見せびらかして恩義を誘うつもりか、生憎そんな手に・・・」

「言い忘れていたがこの破戒すべき全ての符は破棄する事で呪いを元に戻す事ができる、つまり私が破戒すべき全ての符を破壊した瞬間、君の無限登校地獄の呪いが還元すると言っ訳だ」
ルールブレイカー

「な！？」

むろんただのはったりだ、念を入れて私の投影の事を秘密にしたお陰で、嘘でもかなりの効果あると見える。

「……ふ、ふん、そんな見え透いた嘘が通じると思っているのか」

「ほう、では、試してみるかね？」

態度は相変わらずの強気だが、僅かに動揺しているエヴァに見せ付けるように破戒すべき全ての符を折る仕草をする。

「呪いが戻れば瞬く間に君の魔力は無くなり、明日からまた強制的に学園に通う毎日が始まる訳だ。では二日後にまた逢おう」

破戒すべき全ての符に力を込めると、金属が軋む音が鳴り、後数秒で完全に折れるであろう破戒すべき全ての符を見てエヴァは顔を青くし慌てて止めに入った。

「ぐう、わ……わかった。ばーや達の件は前向きに検討する……！」

「……ふむ、断られるよりはましか」

力を抜いて破戒すべき全ての符を霧散させると、エヴァは苦虫を噛み潰したような顔で睨んできた。

「中々楽しませてくれるじゃないか、この闇の福音をここまでコケにしたのは貴様で二人目だ」

「くつ、私の他に君を手こずらせる者がいたとは驚きだよ、さぞかし愉快的感性の持ち主なのだろうな」

「ああ、憎らしい程にな」

二人が悪者オーラ全開で笑い合っていると、

パーララ パラララパラ ラララ

どこか聞き覚えのある曲がホテルのロビーに響いた。

「長瀬でござる、おや？バカリーダー？」

どうやら長瀬の携帯の着信音だったようだ。

しかし女子中学生の携帯の着信音がゴットファーザーのテーマとは・・・流行なのか？

だが、そんなズレた考えとは別に電話に出ていた長瀬の顔が強張った。

「む・・・？どうした夕映殿？まずは落ち着くでござるよ・・・」

「

どうやら通話の相手は綾瀬のようだがなにか様子が変だ、長瀬はふむ・・・ふむ・・・と頷くとこちらに視線を向けた。

「ん、ちょっと待つでござる。シロウ殿、電話でござるよ」

「綾瀬が私に？」

「いいから出るでござるよ」

嫌な予感が頭を過ぎりながらも長瀬に促されて電話を受け取った。

【Side 夕映】

（早く・・・早く出てくださいシロウ先生！！）

携帯電話を片手に山の中を走る少女、綾瀬夕映は幾分冷静になった頭で先程起きた事態を思い返していた。

お風呂を終え、ハルナ達と一緒にカードゲームに興じていると、襖がノックされ近くにいたハルナが襖を開けた瞬間、チラリと見えた白い髪の少年がなにかを呟くと同時に煙が放たれハルナが石にされてしまったのだ。

突然の事態に驚いていると和美が少年から隠すように私を庇うと小声でこう言った。

「ゆえっち、あんた逃げろ。逃げて・・・シロウ先生を呼ぶんだ！！」

「な、何故、シロウ先生なんですか？」

「いいから!？」

有無を言わずに突き飛ばされ私は言われた通りに逃げた。

それから山の中を走る事数分、何故和美がシロウ先生に助けを呼べと言ったのかは分からないけれど今はやれる事をやろうと思い震える手で携帯を開く、しかし肝心のシロウ先生の携帯番号を知らない事に気が付いた。

（ど、どうすれば・・・一体誰に助けを求めれば!？）

不安で胸が押し潰されそうになりながらも、必死に呼吸を整え冷静になる、そして頭に思考を巡らせ考える。

常人ならここまで冷静になり考えられる事自体がありえないが、彼女は幸いなことに幼い頃からこういった精神面に対して強い耐性あった為、答えはすぐに出た。

（そ、そうです・・・あの人達なら・・・！）

彼女は知っていた、恐らくシロウ先生にも通じ、こういった非現実的な事態に対処してくれる人達の存在を。

そして携帯電話の電話帳を開き今度こそ、迷うことなくその相手をコールした。

電話にシロウ先生が出ると慌てながらも先程起こった事を詳しく話した。

『そうか・・・すまなかったな。すぐそこに向かうから綾瀬はそこから動かないで待っていてくれ』

「は、はい。分かったです」

シロウ先生との通話が切れると、安心したのか夢中になって忘れていた恐怖が今になって襲ってくる。

しかし不思議と悲壮感は無かった、その理由はわからないけど、今私が出来る事は皆さんを信じて待つ事だけ。

そう、彼女は確かにこの状況に恐怖もしていた、だが、反面このような非日常の関わりを望んでいた彼女にとって退屈な日常には無い刺激に満ちた状況に自分でも知らず気持ち昂ぶらせていたのだった。

携帯を切ると軽く礼を言つて長瀬に携帯電話を返す。

「ありがとう長瀬、携帯助かったよ」

「いやいや、構わないでござるよ」

のんびりとした様子で携帯を受け取ると、何故か近くにいた古菲と龍宮と共に外に出て行く。

友達である綾瀬の危機に対してあまりにあっさりとした態度に怪訝な顔をするが今は冷静にこれからの事に思考を巡らせていると仕事の携帯電話が鳴ったので、着信相手を見ると学園長だった。

このタイミングで電話を掛けたという事から十中八九、西の本山の件だろうと思いながら、携帯に出てみる。

『もしもしエミヤ君か、実は先程ネギ君からの連絡で西の本山が・・・』

「ああ、分かっている・・・状況はすでに最悪だな。もうすでにこのかは敵の手に渡ったと考えるのが妥当だろう」

『むう、まさか嬪殿が敵わぬ相手がいるとはのう、敵は相当な手慣れとみて間違いない。タカミチも海外に出ていない今、ネギ君と刹那君だけじゃと恐らく返り討ちにされるじやろう』

珍しく落ち着かない様子で学園長がまくし立てている、流石に孫娘の危機には冷静でいられないか。

「私も今から本山に向かう所だ。全力でこのかを助け出してみせる、安心してくれ」

だが、いくら少数とはいえ詠春率いる総本山を落す程の使い手となればあのフェイト・アーウェルックスと名乗った少年以外に考えられないだろう、こちらも切り札である宝具があるとはいえ油断はできない。

『すまんのう、こちらも今すぐそこへ急行できる人材がおればいいんじゃが・・・』

「そのことも心配ない、丁度強力な助っ人が目の前にいるのでな」顔を綻ばせてエヴァに視線を送ると、本人は怪訝な表情を浮かべている。

「ん？なんだシロウ、マヌケヅラして」

最強にして悪の魔法使いは、こうして荒れ狂う京都の戦いに巻き込

まれたのだった。

手短に助つ人の事を話すとエヴァは最初は渋っていたが、破戒すべ^{ルールブレイカー}き全ての符を見せると不機嫌になりながらも素直に応じ、取りに行く物があるから先に行っていると言って部屋に戻って行った。まあ、エヴァなら約束を違える事はしないだろう、時間もないので急いでホテルを出ると三人の人影が私の前に立ち塞がった。

「待っていたでござるよ、シロウ殿」

「おー来たアルな」

「助つ人のご所望は如何かな」

そこにはチャイナ服姿の長瀬と古菲、そして大きなギターケースを担いだ龍宮が立っていた。

「長瀬、龍宮、古菲？どうした、こんな所で」

「拙者達もシロウ殿について行くでござるよ」

長瀬は相変わらず表情の読めない糸目でこちらを見ているが、流石に許可する事はできない。

「……駄目だ、今の私は副担任とはいえ君達の先生だ、生徒を危険な場所に連れて行く事は出来ん」

確かに長瀬と古菲の実力は昨日の手合わせで確認したので、並の相手なら遅れを取る事はないだろう、龍宮も実力は窺い知れないが醸し出す雰囲気は自分と同じ戦場で鍛えられた特有のモノだ、少なくとも長瀬達に近い実力者なのは想像に固くない。

だが、いくら実力が高くても生徒を戦いに巻き込ませる訳にはいかない。

しかし、長瀬はそれを認めず執拗に食い下がっている。

「たとえシロウ殿が許可せずとも、拙者達は勝手に行くでござる、クラスメイトの危機を見逃すわけには行かぬでござるよ」

「そうネ。はやくバカリーダー達を助けに行くアル！」

「いや……しかし……」

「シロウさん、議論している暇はないと思うよ。それに勝手に行動されるよりは、目の届く範囲にいたほうが良いとは思わないかい？」

龍宮の言葉に一瞬躊躇うが、龍宮の言う通り勝手に動かれては目も当てられない上、時間が無いのも事実だ。

結局、綾瀬が長瀬に電話した時点でこうなる事は避けられなかったのだろう、深いため息を吐き、しかたなく折れることにする。

「・・・分かった、確かに今は少しでも時間が惜しい。すぐに行くぞ」

ホテルを出て本山の方角を見定めると魔力で足を強化する。
長瀬達は駅に向かわない事に怪訝な顔をしている。

「シロウ殿、電車で行くのではないのでござるか？」

「いや、電車では時間が掛かる。それよりもこのまま三人で一直線に行ったほうが早い、私が龍宮を運ぶから長瀬は古菲を運んでくれ」

「むう・・・拙者はかまわぬでござるが、シロウ殿は大丈夫でござる？」

「心配するな女の子に負けるほど柔な鍛え方はしていない、なんなら古菲も私が運でもいいぞ」

「いやいや、拙者もそれくらいの役に立たなくては立つ瀬がないでござるよ」

「そうか、なら早速・・・」

そう言つて私は龍宮を抱えると、それを見た古菲は長瀬におぶさつた。

「シ、シロウさん！？な、何をして・・・」

ちなみに龍宮には移動中負担が掛からない様、俗に言つてお姫様抱っこにしている。

「すまない、これが一番効率のいい抱え方でな、嫌かもしれないが我慢してくれ」

赤面する龍宮に申し訳ない顔で謝ると観念したのか顔を背けている、気のせいかがっかりしているように見えた。

「よし、では行くぞ。ついて来れるか長瀬」

「にんにん」

「行くアルよ」

「まったく、鈍いのか鋭いのかよく解らない人だ・・・」

強化した足を踏み締め流星のように跳躍し、四人は夜の街へ消えていった。

【Side 刹那】

「てやああ!!」

「奥義、雷鳴剣・・・!!」

「ドガッ」

鬼達の一角を薙ぎ払いながら私と明日菜さんは背中合わせに呼吸を整える。

雷鳴剣と明日菜さんのハマノツルギで異形の鬼の群れはそれなりに減ったがそれでも数は四百を越えている。

疲労困憊で気が遠くなりながらも鬼達を睨むが、私よりも一般人の明日菜さん方が心配だ。

「大丈夫ですか、明日菜さん」

「うん！ネギだって頑張っているのよ、私も負けてられないわ！！」

「そうですね！ですがあまり無理はしないで下さい」

「大丈夫、まだいけるよ。後はネギがこのかを取り返してくれれば・・・」

しかし一息つくヒマもなく、明日菜さんに接近した烏族によって束の間の休息も、すぐに破られた。

「きゃああああっ！？」

「明日菜さんっ！！」

急ぎ救援に向かおうにも、こちらは大鬼とトンファーのような武器を持った狐女に阻まれ駆けつける事ができないでいる。

しかも、ネギ先生が向かった方角から大きな光の柱が立ち登り、最悪な事に。

「どうやらあちらもだいぶ盛り上がってるようですな～～まあ、ウチらはウチらで楽しみましょうか～～刹那センパイ」

暢気な声と共に鬼の群れから月詠が現れた。

「っ……月詠!!」

ここにきて四百以上の鬼の軍勢とただでさえ厄介な月詠を相手にしなければならなくなってしまった。

後ろでは明日菜さんが烏族に右腕を掴まれ身動きが取れないでいる。

(くっ !ここまでなのか……)

援護が期待出来ない今、私達にこの最悪の状況を打破する力は残っていない、最早残された手段は忌み嫌われ、私にとって吐き気がする程抵抗感のあるこの禁忌の力を使い敵の隙を狙うしかない。

しかしそれは同時に明日菜さんにあの姿を見せる事になる、そう、化け物の私が皆の傍に居る訳にはいかないのだ。

だが、理性はネギ先生やお嬢様の笑顔を失いたくないと否定している、そして頭に浮かぶのはシロウ先生の顔だった……あの鋼のような心と剣の強さに憧れた、私もあの人のようになりたいと思った。

なら、出すべき答えは決まっている。

(そうですね、シロウ先生……私はお嬢様を全力でお守りすると誓いました。例えば化け物と罵られようともお嬢様を助ける、それが私の使命です)

覚悟を決め、その力を解放しようとした瞬間。

- ヒュン -

流星のような風切り音が響くと同時に、明日菜さんを捕らえていた烏族の眉間に一本の細身の剣が刺さっていた。

「ぐおっ！なんだ、一体何が！？」

烏族が明日菜さんを離れた途端、幾重もの剣が突き刺さり烏族はそのまま何が起きたかもわからず霞のように消えていった。

「ぬう、新手か！てめえら、狙撃に気をつけ」

・ヒュン、ヒュン、ヒュン、ヒュン・

大鬼が言葉を発するより早く、幾条もの流星群が鬼達に突き刺さり消滅する。

次々と鬼が消えていく中、私はその神がかり的な命中精度に言葉が出なかった、明日菜さんも訳が分からずポカンとしている。

時間にして数秒程だろう、流星群が止む頃には鬼の数は三百程にまで減っていた。

そして月の光が陰ったと思うと私達の前に漆黒の外套を纏ったシロウ先生が舞い降りていた。

「よく頑張ったな二人共、無事でなによりだ」

「シ・・シロウ先生！！」「シロウ！！」

あまりにも颯爽と現れたシロウ先生に私は元より明日菜さんや鬼達も啞然としている。

あたかもその光景は私が始めてシロウ先生と出会った日の焼き増しのように、自然と胸が高鳴っていた。

そんなシロウ先生の登場に心ときめかしていると、背後で銃声が響き大鬼と狐女の武器を破壊し新たな乱入者が姿を現した。

「……らしくない。苦戦しているようじゃないか？」

「ええっ！？えええゝゝっ！？」

明日菜さんは想像もつかなかった人物が来たものだから驚きの声を上げ、私も予想外の人物に少し驚いてしまう。

「この助っ人の仕事料はツケにしてあげるよ、刹那」

「うひゃ あのデカいの本物アルか ？強そアルねー」

龍宮はまだ分かるが古菲は強いとはいえ一般人の筈、しかしお嬢様を取り戻す為にも味方は多いに越した事はない。

「シロウ先生、お嬢様は呪符使いと白髪の少年にさらわれ、ネギ先生はそれを追っています。私達に構わずお嬢様を追ってください！
！」

「……いや、ここを片付けて全員で行った方がいい。なに、そんなに時間は掛からんさ」

「えっ！？まさかそんな短時間でこの数を倒すなんて、シロウ先生でも無理ですよ！！」

私と明日菜さんの二人がかりでも二百体が限界だった、それでも低級のザコばかりだ。

そして今残っている鬼達は実力のある強者ばかり、それが三百体以上もいるのだ、広域破壊の大規模魔法でも使わない限り、殲滅は不可能な筈。

いくらシロウ先生が凄くても、そんな大魔法を使えるとは思えない。

「おう兄ちゃん、いきなり現れて何勝手な事ほざいとるんや。それ
も言っに事かいてワシらを片付けるやと？寝言は寝てから言わんか
い！」

シロウ先生の挑発とも取れる言動に我慢の限界を迎えた大鬼が声を
荒げ、鬼達も殺気を籠めた視線を投じている。

そんな殺気の中、シロウ先生は鬼達を鋭い鷹の眼で睨み静かな威圧
感を放っている。

「悪いが時間がなくてね、一瞬で終わらせてもらっ

トレースオン
投影開始」

咄くと同時にシロウ先生の手に禍々しい深紅の槍が現れ、その槍か
ら魔力が蜃気楼のようにゆらりと立ち上る。

「っ

！！」

鳴動するような魔力を見た瞬間、寒気にも似た震えを感じた。
本能でわかる、あれは武器などという生易しいものではない、いわ
ば災害・・・来ると解っていても何も出来ない一つの自然現象のよ
うなものだ。

シロウ先生は槍を中段に構え獣のように地面に四肢をつける。

「行くぞ。この一撃、手向けとして受け取れ」

シロウ先生の腰が上がり、その姿は号砲を待つスプリンターのよう
だ。

そしてシロウ先生が突風となって鬼達へと疾駆し、そのまま大きく
跳躍した。

大きく振りかぶった腕にはぎしり、と空間を軋みながら唸りを上げ

る魔槍。

「
刺し穿つ^{ガイ}」

シロウ先生は弓を引き絞るように上体を反らし。

「^{ボルク}死翔の槍

!!!」

怒号と共に、その一撃を叩き下ろした

- キイイイイイイン -

魔槍は周囲の魔力を食い尽くしながら、無数に分裂し流星の如き速さで鬼達を貫き、

「^{ブロックン・ファンタズム}壊れた幻想」

- ドゴオオオオオン -

莫大な威力で鬼達を跡形もなく吹き飛ばし、大爆発を起こした。恐る恐る目を開けると、そこには隕石でも落ちたのではないかという程の巨大なクレーターが広がっている。

「う、嘘でしょ……」

「す、すごい」

三百体以上いた屈強な鬼達が一撃でほぼ消滅した事に私も明日菜さんも感嘆の声をあげる。
残っているのはシロウ先生の攻撃に咄嗟に反応し、身を隠した先程

の大鬼と狐女、そして月詠の三人だけのようだ。

「……やってくれたの、ワイら以外どうやら全員還されたようやな。ごっつい兄ちゃんがいたもんや、せやけど命令がある以上、最後まで相手したる」

「ウチもお給料分は働かせてもらいますえ〜それに〜シロウはんや刹那センパイと死合えるんなら、こんな嬉しい事はないどすからな〜」

「ちつ、厄介な！このままではお嬢様が……」

私は焦燥しながらこのかお嬢様がさらわれた方角を見た、しかしその瞬間、光の柱から四本の腕を持つ巨大な鬼が現れた。

「な……何だあれは！？」

遠く離れたこの場所からでもはっきりと分かる圧倒的な存在感、あれほどの大きさの鬼が何故あんな場所から……まさか、あれを呼び出すのがあの女の狙いかっ！？

「せ、刹那さん！あのでかい鬼はいつたい何！？もしあの鬼がいつらの目的なら、ネギの奴、間に合わなかったの！？」

「わかりません。でも助けに行かなければ……」

ネギ先生の救援に向かおうとする私達の前に月詠が立ちはだかる。

「センパイ、逃げるんですかあ〜」

二刀を携え駆けてくる月詠、だが、飛びかかろうとする月詠の前に白と黒の中華風の剣を携えたシロウ先生が割って入った。

「この場は私達に任せろ、早くネギ君とこのかを助けに行け刹那！」

「しかし・・・」

「心配するな、すぐに終わらせて追いつく」

シロウ先生は月詠と激しく打ち合いながら互角以上の戦いを繰り広げ、龍宮と古菲は残った大鬼と狐女の相手をしている。

「うふふふ、やっぱお強いどすな〜シロウはん。こんな楽しい死合いは初めてやわ〜」

月詠は心底嬉しそうにシロウ先生と打ち合っている。

シロウ先生の実力なら負ける事ないと思うが、月詠の予想以上の強さに不安が募る。

心配する私にシロウ先生はいつもの苦笑を返した。

「刹那、何を呆けている。それでも君はこのかの護衛か？このかを守るんだろっ、なら私の力なぞ借りず自分の力で取り返してみたまえ、このかも君が助けに来ることを待っている。それに応えてやれ」

直立不動で月詠を見据えるその大きな背中が語っていた“頼んだぞ”と。

その無言の言葉をみた私はお嬢様を任せてくれた以上に、シロウ先生に認められたのが嬉しかった。

「……ありがとうございます。行きましょう明日菜さん！」

「うん、うん」

私と明日菜さんは急いでこの場を離れ、ネギ先生の下へ向かう為に山の中を走る。

前では未だ明日菜さんが心配そうに後ろを振り返っている。

「大丈夫かな、シロウ……」

「心配いりません。あの人の強さは私を遙かに上回っています、それにお嬢様が初めて憧れた男性です、きっと大丈夫ですよ。それよりも今は私達が出来ることをしましょう！！」

「……うん、そうだね。待つてなさいよ、このか！絶対に私達が助けてあげるからね！」

待つていてください、お嬢様。

例えこの身が朽ち果てようと、必ず私がお助けします。

そして私に託してくれたシロウ先生の想いを無駄にはさせません。逸る気持ちを抑え全力で山を駆け抜けて行く。

だが、彼女は気付いてはいなかった、これが桜咲刹那と近衛木乃香のエミヤシロウを巡る長い物語の始まりである事を

貴方の言葉が嬉しくて・・・（後書き）

解る人には解ると思いますが、この小説は赤い外套さんの『正義の味方とやさしい少女』をベースにしています。

テンプレばかりの私ですが頑張つて皆さんにこの物語を楽しんで頂けるよう努力致しますので、次回もよろしく願いします！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4025o/>

Fate/CrossOverGuardian 第二章 『ネギま編』

2011年8月7日18時00分発行